

【表紙】

【提出書類】 有価証券報告書

【根拠条文】 金融商品取引法第24条第1項

【提出先】 関東財務局長

【提出日】 令和元年6月21日(2019年6月21日)

【事業年度】 第70期(自平成30年4月1日(2018年4月1日)至平成31年3月31日(2019年3月31日))

【会社名】 日立化成株式会社

【英訳名】 Hitachi Chemical Company, Ltd.

【代表者の役職氏名】 執行役社長 丸山 寿

【本店の所在の場所】 東京都千代田区丸の内一丁目9番2号

【電話番号】 03(5533)7000

【事務連絡者氏名】 法務部 法務担当部長 高橋 毅

【最寄りの連絡場所】 東京都千代田区丸の内一丁目9番2号

【電話番号】 03(5533)7000

【事務連絡者氏名】 法務部 法務担当部長 高橋 毅

【縦覧に供する場所】 株式会社東京証券取引所
(東京都中央区日本橋兜町2番1号)

第一部【企業情報】

第1【企業の概況】

1【主要な経営指標等の推移】

(1) 連結経営指標等

| 回次 | 国際財務報告基準 | | | | |
|------------------------|----------|----------|----------|----------|----------|
| | 2014年度 | 2015年度 | 2016年度 | 2017年度 | 2018年度 |
| 決算年月 | 2015年3月 | 2016年3月 | 2017年3月 | 2018年3月 | 2019年3月 |
| 売上収益 (百万円) | 526,687 | 546,468 | 554,144 | 669,234 | 681,025 |
| 税引前当期利益 (百万円) | 34,692 | 53,682 | 54,380 | 48,941 | 40,500 |
| 親会社株主に帰属する当期利益 (百万円) | 22,587 | 38,512 | 40,186 | 36,324 | 28,723 |
| 親会社株主に帰属する当期包括利益 (百万円) | 42,390 | 19,424 | 39,238 | 39,953 | 27,699 |
| 親会社株主持分 (百万円) | 348,241 | 356,207 | 375,001 | 400,383 | 420,095 |
| 総資産額 (百万円) | 542,535 | 535,155 | 609,155 | 701,163 | 708,659 |
| 1株当たり親会社株主持分 (円) | 1,672.33 | 1,710.62 | 1,800.91 | 1,922.85 | 2,017.54 |
| 基本的1株当たり当期利益 (円) | 108.47 | 184.95 | 192.99 | 174.45 | 137.94 |
| 希薄化後1株当たり当期利益 (円) | - | - | - | - | - |
| 親会社株主持分比率 (%) | 64.2 | 66.6 | 61.6 | 57.1 | 59.3 |
| 親会社株主持分当期利益率 (%) | 6.8 | 10.9 | 11.0 | 9.4 | 7.0 |
| 株価収益率 (倍) | 23.7 | 10.9 | 16.0 | 13.9 | 17.8 |
| 営業活動によるキャッシュ・フロー (百万円) | 34,009 | 95,069 | 60,819 | 34,916 | 77,159 |
| 投資活動によるキャッシュ・フロー (百万円) | 22,258 | 35,663 | 34,606 | 87,802 | 47,397 |
| 財務活動によるキャッシュ・フロー (百万円) | 16,874 | 22,123 | 36,476 | 28,932 | 12,664 |
| 現金及び現金同等物の期末残高 (百万円) | 88,997 | 119,988 | 107,649 | 84,037 | 101,292 |
| 従業員数 (人) | 19,499 | 19,117 | 20,043 | 22,623 | 22,989 |

(注) 1. 2014年度より国際財務報告基準(以下、「IFRS」)に基づいて連結財務諸表を作成している。

2. 「売上収益」には、消費税及び地方消費税は含まれていない。

3. 「希薄化後1株当たり当期利益」については、潜在株式が存在しないため記載していない。

4. 2015年度より、従来、連結損益計算書の「その他の収益」に計上していた「受取ロイヤリティー」を、「売上収益」に含めて計上することに変更している。2014年度についても当該表示方法の変更を反映した組替後の数値を記載している。

5. 「第5 経理の状況 連結財務諸表注記 6. 企業結合」に記載の通り、2017年度において、企業結合に係る暫定的な会計処理の確定を行っており、2016年度の関連する主要な経営指標等について、暫定的な会計処理の確定の内容を反映させている。

| 回次 | 日本基準 | |
|-------------------|-----------|----------|
| | 2014年度 | |
| 決算年月 | 2015年 3 月 | |
| 売上高 | (百万円) | 535,581 |
| 経常利益 | (百万円) | 40,261 |
| 親会社株主に帰属する当期純利益 | (百万円) | 21,101 |
| 包括利益 | (百万円) | 41,001 |
| 純資産額 | (百万円) | 371,897 |
| 総資産額 | (百万円) | 555,071 |
| 1株当たり純資産額 | (円) | 1,743.32 |
| 1株当たり当期純利益 | (円) | 101.33 |
| 潜在株式調整後1株当たり当期純利益 | (円) | - |
| 自己資本比率 | (%) | 65.4 |
| 自己資本利益率 | (%) | 6.1 |
| 株価収益率 | (倍) | 25.4 |
| 営業活動によるキャッシュ・フロー | (百万円) | 34,484 |
| 投資活動によるキャッシュ・フロー | (百万円) | 28,499 |
| 財務活動によるキャッシュ・フロー | (百万円) | 11,107 |
| 現金及び現金同等物の期末残高 | (百万円) | 88,997 |
| 従業員数 | (人) | 19,499 |

(注) 1. 2014年度の日本基準に基づく連結財務諸表については、金融商品取引法193条の2第1項の規定に基づく監査を受けていない。

2. 「売上高」には、消費税及び地方消費税は含まれていない。

3. 「潜在株式調整後1株当たり当期純利益」については、潜在株式が存在しないため記載していない。

4. 2014年度については、従来、連結損益計算書の「営業外収益」に計上していた「受取ロイヤリティー」を、「売上高」に含めて計上している。

(2) 提出会社の経営指標等

| 回次 | 第66期 | 第67期 | 第68期 | 第69期 | 第70期 |
|---------------------------------------|------------------|------------------|------------------|------------------|------------------|
| 決算年月 | 2015年3月 | 2016年3月 | 2017年3月 | 2018年3月 | 2019年3月 |
| 売上高 (百万円) | 308,160 | 323,337 | 349,873 | 374,352 | 364,319 |
| 経常利益 (百万円) | 25,236 | 27,348 | 27,874 | 28,450 | 32,790 |
| 当期純利益 (百万円) | 24,760 | 27,580 | 22,838 | 15,642 | 22,316 |
| 資本金 (百万円) | 15,454 | 15,454 | 15,454 | 15,454 | 15,454 |
| 発行済株式総数 (千株) | 208,364 | 208,364 | 208,364 | 208,364 | 208,364 |
| 純資産額 (百万円) | 251,356 | 269,382 | 282,126 | 285,217 | 294,056 |
| 総資産額 (百万円) | 334,925 | 358,844 | 383,229 | 401,476 | 405,159 |
| 1株当たり純資産額 (円) | 1,207.07 | 1,293.66 | 1,354.89 | 1,369.76 | 1,412.23 |
| 1株当たり配当額 (うち1株当たり 中間配当額(円)) (円) | 36.00 (18.00) | 50.00 (25.00) | 55.00 (25.00) | 60.00 (30.00) | 60.00 (30.00) |
| 1株当たり当期純利益 (円) | 118.90 | 132.45 | 109.68 | 75.12 | 107.17 |
| 潜在株式調整後 1株当たり当期純利益 (円) | - | - | - | - | - |
| 自己資本比率 (%) | 75.0 | 75.1 | 73.6 | 71.0 | 72.6 |
| 自己資本利益率 (%) | 10.2 | 10.6 | 8.3 | 5.5 | 7.7 |
| 株価収益率 (倍) | 21.6 | 15.3 | 28.1 | 32.3 | 22.9 |
| 配当性向 (%) | 30.3 | 37.8 | 50.1 | 79.9 | 56.0 |
| 従業員数 (人) | 5,057 | 6,209 | 6,484 | 6,480 | 6,523 |
| 株主総利回り (比較指標：配当込み TOPIX) (%) | 185.6 (130.7) | 150.2 (116.5) | 229.3 (133.7) | 186.9 (154.9) | 193.1 (147.1) |
| 最高株価 (円) | 2,755 | 2,630 | 3,345 | 3,445 | 2,630 |
| 最低株価 (円) | 1,374 | 1,595 | 1,730 | 2,255 | 1,482 |

(注) 1. 「売上高」には、消費税及び地方消費税は含まれていない。

2. 「潜在株式調整後1株当たり当期純利益」については、潜在株式が存在しないため記載していない。

3. 第67期より、従来、損益計算書の「営業外収益」に計上していた「受取ロイヤリティー」を、「売上高」に含めて計上することに変更している。第66期についても当該表示方法の変更を反映した組替後の数値を記載している。

4. 最高株価及び最低株価は、東京証券取引所市場第一部におけるものである。

2【沿革】

当社は、1962年10月10日に設立された。その後、1968年1月、当社は、株式の額面金額を変更するため、東京都中央区所在の日立化成工業株式会社(設立 1950年6月)を形式上の存続会社として合併を行っている。従って、以下は、実質上の存続会社及びその主要な連結子会社の重要な事項について記載している。

| 年月 | 沿革 |
|----------|--|
| 1962年10月 | 日立化成工業株式会社設立 |
| 1963年4月 | 株式会社日立製作所の化学製品部門の営業資産を譲り受け、同時に日立化工株式会社を吸収合併して営業開始 |
| 1965年4月 | 神奈川工場(コンデンサ部門)を分離独立させ、日立コンデンサ株式会社(後の日立エーアイシー株式会社(現 日立化成エレクトロニクス株式会社))を設立 |
| 12月 | 桜川工場を設置 |
| 1967年5月 | 事業目的に「医薬品の製造及び販売」を追加 |
| 11月 | 事業目的に「建設工事の設計、施工及び請負」を追加 |
| 1968年1月 | 株式の額面金額を変更するため、東京都中央区所在の日立化成工業株式会社と合併 |
| 10月 | 松戸工場(粉末冶金部門)を分離独立させ、日立粉末冶金株式会社を設立 |
| 11月 | 事業目的に「住宅機器の製造及び販売」を追加 |
| 1969年10月 | 結城工場を設置 |
| 1970年10月 | 東京・大阪両証券取引所市場第二部に上場 |
| 1971年8月 | 東京・大阪両証券取引所市場第一部に上場 |
| 1972年6月 | 新神戸電機株式会社の株式の過半数を取得 |
| 8月 | 新神戸電機株式会社、東京・大阪両証券取引所市場第一部に上場 |
| 1973年3月 | 茨城研究所、下館研究所を設置 |
| 8月 | 五井工場を設置 |
| 1974年11月 | 事業目的に「環境設備機器の製造及び販売」を追加 |
| " | 本店を東京都千代田区より東京都新宿区に移転 |
| 1980年1月 | 下館第二工場を設置 |
| 1982年6月 | 事業目的に「電子材料並びに電子部品の製造及び販売」を追加 |
| 1985年1月 | 下館第二工場を五所宮工場に名称変更 |
| 1986年12月 | 南結城工場、筑波開発研究所を設置 |
| 1987年1月 | 日立粉末冶金株式会社、東京証券取引所市場第二部に上場 |
| 1990年4月 | 鹿島工場を設置 |
| 1991年7月 | 医薬品研究所を設置 |
| 1994年1月 | 桜川工場を山崎工場に、南結城工場を下館工場に、五所宮工場を結城工場に統合 |
| 1995年8月 | 結城工場から五所宮工場を分離 |
| 9月 | 日立粉末冶金株式会社、東京証券取引所市場第一部に上場 |
| 1998年11月 | 事業部、工場及び営業部門を工業材料事業本部及び住環境事業本部の2事業本部に再編 |
| 1999年6月 | 筑波開発研究所、茨城研究所及び下館研究所の組織を統合し、総合研究所発足 |
| " | 工場を事業所に呼称変更 |
| 2000年6月 | 鹿島事業所を山崎事業所に統合 |
| 9月 | 日立エーアイシー株式会社(現 日立化成エレクトロニクス株式会社)、東京証券取引所市場第一部に上場 |
| 2001年7月 | 日立エーアイシー株式会社、上場廃止 |
| 8月 | 日立エーアイシー株式会社の当社完全子会社化 |
| 10月 | 住宅機器・環境設備部門を会社分割により当社完全子会社の株式会社日立ハウステックとして分社 |
| 2003年6月 | 委員会等設置会社(現 指名委員会等設置会社)に移行 |
| 2005年4月 | 総合研究所を機能性材料研究所、電子材料研究所及び先端材料研究所に再編 |
| 2008年1月 | 株式会社日立ハウステック株式の譲渡により、当社グループ事業から住宅機器・環境設備事業を分離 |
| 3月 | 日立粉末冶金株式会社、上場廃止 |
| 4月 | 日立粉末冶金株式会社の当社完全子会社化 |
| " | 機能性材料研究所、電子材料研究所及び先端材料研究所の組織を統合し、先端材料開発研究所及び新材料応用開発研究所に再編 |

| 年月 | 沿革 |
|----------|--|
| 2009年 4月 | 日化設備エンジニアリング株式会社を吸収合併 |
| 9月 | 先端材料開発研究所及び新材料応用開発研究所を統合し、筑波総合研究所発足 |
| 2010年 4月 | 五所宮事業所を下館事業所に統合 |
| " | 日立粉末冶金株式会社の営業、事業企画及び研究開発部門を当社に統合 |
| 2012年 3月 | 新神戸電機株式会社、上場廃止 |
| " | 新神戸電機株式会社の当社完全子会社化(すべての議決権を保有) |
| 6月 | 事業目的に「電池、キャパシタ並びにそれ等の応用製品の製造及び販売」を追加 |
| 10月 | 日東電工株式会社より半導体用封止材事業を譲受け |
| " | 新神戸電機株式会社の電池関連の研究開発部門を当社に統合 |
| 2013年 1月 | 商号を「日立化成工業株式会社」から「日立化成株式会社」に変更するとともに、本店を東京都新宿区より東京都千代田区に移転 |
| 4月 | 新神戸電機株式会社の営業、事業企画及び電池関連以外の研究開発部門を当社に統合 |
| 2014年 4月 | 日立粉末冶金株式会社を吸収合併、松戸事業所を設置 |
| " | 日立化成商事株式会社における当社グループ製品に関する営業権を当社に移管 |
| 6月 | 事業目的の「粉末冶金、特殊金属並びにそれ等の応用製品の販売」を「粉末冶金、特殊金属並びにそれ等の応用製品の製造及び販売」に変更 |
| 2015年 1月 | 台湾神戸電池股份有限公司(現 日立化成能源科技股份有限公司)の連結子会社化 |
| 4月 | 台湾日邦樹脂股份有限公司の連結子会社化 |
| 2016年 1月 | 新神戸電機株式会社及び新神戸テクノサービス株式会社を吸収合併、埼玉事業所、名張事業所及び彦根事業所を設置 |
| 4月 | 日立化成ポリマー株式会社及び日立化成フィルテック株式会社を吸収合併 |
| 2017年 2月 | FIAMM Energy Technology S.p.A.の連結子会社化 |
| 5月 | PCT, LLC, a Caladrius Company(現 Hitachi Chemical Advanced Therapeutics Solutions, LLC)の当社完全子会社化 |
| 7月 | ISOLITE GmbHの当社完全子会社化 |
| 9月 | Thai Storage Battery Public Company Limited(現 Hitachi Chemical Storage Battery (Thailand) Public Company Limited)の連結子会社化 |
| 2018年 1月 | 協和メデックス株式会社の連結子会社化 |
| 2019年 4月 | Apceth Biopharma GmbHの当社完全子会社化 |

3【事業の内容】

当社グループ(当社並びに当社の子会社及び持分法適用会社)は、当連結会計年度末現在、当社、子会社89社及び持分法適用会社2社により構成されており、機能材料及び先端部品・システムの製造・加工及び販売を主たる事業としている。当社グループの事業区分別の主要製品及び当社と関係会社の当該事業に係る位置付けは次のとおりである。なお、当社は、機能材料及び先端部品・システムの製造・加工及び販売等に携わっている。

次の2事業区分は、「第5 経理の状況 1 連結財務諸表等 (1) 連結財務諸表 連結財務諸表注記」に掲げるセグメントの区分と同一である。

2019年3月31日現在

| 区分 | 主要製品 | 主要な関係会社の位置付け | |
|------|---|---|---|
| | | 製造・加工 | 販売等 |
| 機能材料 | 電子材料 半導体用エポキシ封止材、半導体用ダイボンディング材料、半導体回路平坦化用研磨材料、電気絶縁用ワニス | 日立化成住電パワープロダクツ(株) 日立化成電子材料九州(株) 浪江日立化成工業(株) 日立化成テクノサービス(株) 日立化成工業(南通)化工有限公司 日立化成電子材料(広州)有限公司 日立化成工業(蘇州)有限公司 日立化成工業(東莞)有限公司 日立化成工業(煙台)有限公司 日立化成工業(重慶)有限公司 | 日立化成商事(株) 日立化成ビジネスサービス(株) 日立化成(中国)投資有限公司 Hitachi Chemical Co. (Hong Kong) Limited 台湾日立化成國際股份有限公司 Hitachi Chemical Asia-Pacific Pte. Ltd. Hitachi Chemical Company America, Ltd. Hitachi Chemical Europe GmbH |
| | 無機材料 リチウムイオン電池用カーボン負極材 | Hitachi Chemical Electronic Materials (Hong Kong) Limited 台湾日立化成電子材料股份有限公司 台湾日邦樹脂股份有限公司 | |
| | 樹脂材料 機能性樹脂、ディスプレイ用回路接続フィルム、タッチパネル周辺材料、粘着フィルム | Hitachi Chemical Electronic Materials (Korea) Co., Ltd. Hitachi Chemical (Johor) Sdn. Bhd. Hitachi Chemical (Selangor) Sdn. Bhd. Hitachi Chemical (Malaysia) Sdn. Bhd. | |
| | 配線板材料 銅張積層板、感光性フィルム | 五井化成(株) Hitachi Chemical DuPont MicroSystems L. L. C. | |

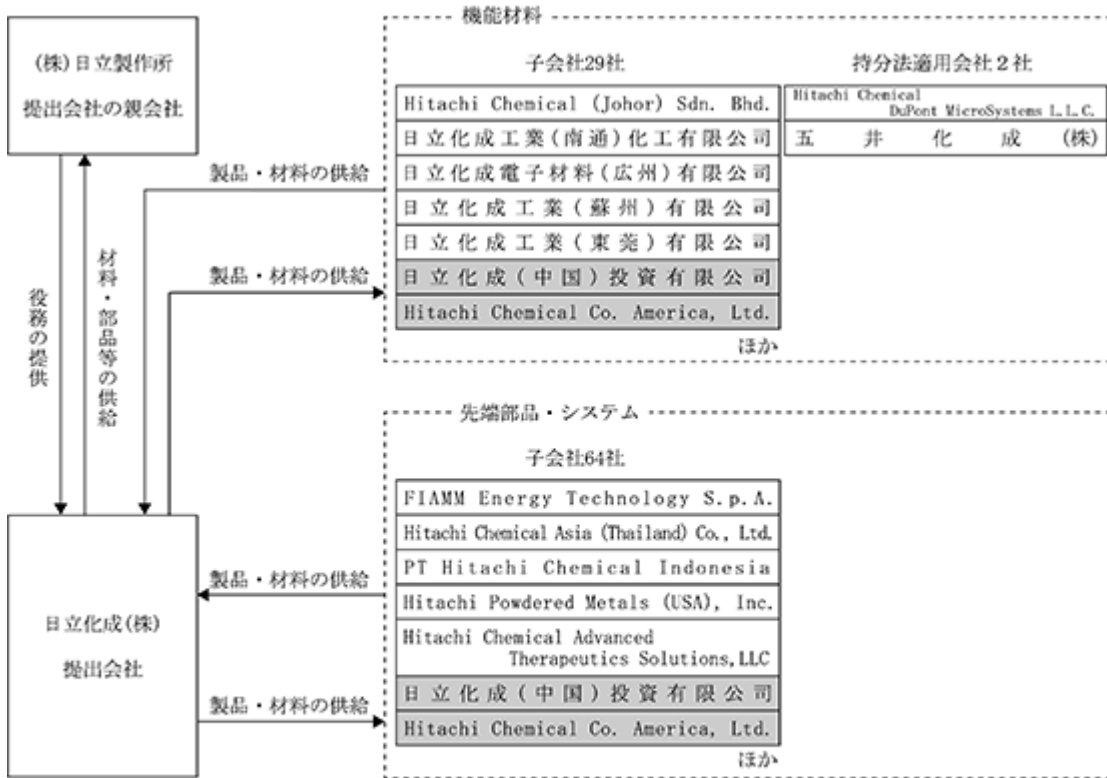
| 区分 | 主要製品 | 主要な関係会社の位置付け | |
|-----------|---------------------------------------|--|--|
| | | 製造・加工 | 販売等 |
| 先端部品・システム | 自動車部品 樹脂成形品、摩擦材、粉末冶金製品 | 日立化成エレクトロニクス(株) 日立エーアイシー(株) 日本ブレーキ工業(株) 協和メデックス(株) 日立化成オートモーティブプロダクツ(株) 日立バッテリー販売サービス(株) 日立化成工業(鄭州)汽車配件有限公司 | 日立化成商事(株) 日立化成ビジネスサービス(株) 日立化成(中国)投資有限公司 Hitachi Chemical Company America, Ltd. |
| | 蓄電デバイス・システム 車両用電池、産業用電池・システム、キャパシタ | 日立粉末冶金(東莞)有限公司 日立化成能源科技股份有限公司 PT Hitachi Chemical Indonesia Hitachi Chemical (Singapore) Pte. Ltd. Hitachi Powdered Metals (Singapore) Pte. Ltd. Hitachi Chemical Asia (Thailand) Co., Ltd. | |
| | 電子部品 配線板 | Hitachi Chemical Storage Battery (Thailand) Public Company Limited Hitachi Chemical Automotive Products (Thailand) Company Limited Hitachi Chemical India Private Limited Hitachi Powdered Metals (USA), Inc. | |
| | その他 診断薬・装置 | Hitachi Chemical Advanced Therapeutics Solutions, LLC Hitachi Chemical Diagnostics, Inc. Hitachi Chemical Mexico, S.A. de C.V. ISOLITE GmbH FIAMM Energy Technology S.p.A. | |

(注) 1 . 当社は、親会社である(株)日立製作所に対し継続的に当社製品を販売するとともに、同社より情報システムに係るサービスの提供を受けている。また、当社は同社に対し、研究開発の一部の委託等を行っている。

2 . 当社は、2019年4月2日付で、Apceth Biopharma GmbHの全持分を取得し、同社は当社の完全子会社となった。

[事業系統図] (2019年3月31日現在)

以上述べた事項を事業系統図によって示すと次のとおりである。



(注) 1. は、販売・サービス会社を示しています。

2. 当社グループにおいて、日立化成(中国)投資有限公司を含む4社が機能材料及び先端部品・システムの両事業に携わっており、各事業区分の子会社数にそれぞれ算入しています。

4【関係会社の状況】

(1) 親会社

| 会社の名称 | 所在地 | 資本金 (百万円) | 主要な事業の内容 | 議決権 の被所有割合 (%) | 関係内容 | | | | |
|----------|---------|--------------|--------------------|----------------------|-------|----------|----------|--|------------------|
| | | | | | 役員兼任等 | | 資金 援助 | 営業上の取引 | 固定 資産の 賃貸借 |
| | | | | | 兼任 | 転籍 出向 | | | |
| (株)日立製作所 | 東京都千代田区 | 458,791 | 電子電気機械器具の 製造、販売 | (0.1) 51.4 | あり | あり | なし | 当社製品の販売先、 情報システムサービ スの提供元、研究開 発の委託先 | あり |

(注) 1. 議決権の被所有割合欄の()内数値は、間接被所有割合で内数表示している。

2. 有価証券報告書提出会社である。

(2) 連結子会社

| 会社の名称 | 所在地 | 資本金 (百万円) | 主要な事業の内容 | 議決権 の所有割合 (%) | 関係内容 | | | | |
|------------------------------|--------------|--------------|--|---------------------|-------|----------|----------|---|------------------|
| | | | | | 役員兼任等 | | 資金 援助 | 営業上の取引 | 固定 資産の 賃貸借 |
| | | | | | 兼任 | 転籍 出向 | | | |
| 日立化成エレクトロ ニクス(株) (注) 1 | 茨城県筑西市 | 2,316 | 配線板の製造 | 100.0 | あり | あり | あり | 当社製品の外注先 | あり |
| 日立エーアイシー (株) | 栃木県真岡市 | 490 | キャパシタ、蒸着 フィルムの製造 | 100.0 | あり | なし | なし | 当社製品の外注先 | なし |
| 日本ブレーキ工業 (株) | 東京都八王子市 | 460 | 摩擦材の製造 | 100.0 | あり | あり | なし | 当社製品の外注先 | あり |
| 協和メデックス(株) | 東京都中央区 | 450 | 診断薬の開発、製 造、販売 | 66.6 | あり | あり | あり | なし | なし |
| 日立化成住電パワー プロダクツ(株) | 茨城県日立市 | 450 | 電気絶縁用エポキシ 樹脂成型品の製造、 販売 | 51.0 | あり | あり | なし | 製品の仕入先 | なし |
| 日立化成電子材料九 州(株) | 佐賀県吉野ヶ里 町 | 436 | 半導体用エポキシ封 止材、半導体封止用 金型クリーニング シートの製造 | 100.0 | あり | あり | なし | 当社製品の外注先 | なし |
| 日立化成オートモー ティブプロダクツ (株) | 福岡県田川市 | 400 | 自動車用樹脂成形品 の製造 | 100.0 | あり | あり | なし | 当社製品の外注先 | あり |
| 日立化成商事(株) | 東京都千代田区 | 301 | 配線板材料その他機 能材料、配線板等の 製造装置の販売 | 100.0 | あり | あり | なし | 当社製品の販売先、 材料の仕入先 | あり |
| 浪江日立化成工業 (株) | 福島県浪江町 | 200 | カーボン製品の製造 | 100.0 | あり | あり | なし | 当社製品の外注先 | あり |
| 日立バッテリー販売 サービス(株) | 東京都荒川区 | 150 | 電池・電気機器の販 売、サービス及びゴ ルフカートの製造、 販売、サービス | 100.0 | あり | あり | なし | 当社製品の販売先、 当社サービスの委託 先 | あり |
| 日立化成ビジネス サービス(株) | 東京都千代田区 | 140 | パソコンその他の事 務機器等のリース 、給与・福利・財 務関連事務等の業務 受託 | 100.0 | あり | あり | なし | パソコンその他の事 務用機器等のリース 元、当社給与・福 利・財務関連事務等 の委託先 | あり |
| 日立化成テクノサー ビス(株) | 茨城県日立市 | 140 | 合成、分析、安全 データシート作成等 の業務受託及び FRP、コーテッドサ ンド、分離材の製 造、販売 | 100.0 | あり | あり | なし | 当社製品の外注先、 材料の仕入先 | あり |

| 会社の名称 | 所在地 | 資本金 | 主要な事業の内容 | 議決権の所有割合 (%) | 関係内容 | | | | |
|---|-----|---------------------|---|------------------|-------|----------|------|-------------------|----------|
| | | | | | 役員兼任等 | | 資金援助 | 営業上の取引 | 固定資産の賃貸借 |
| | | | | | 兼任 | 転籍 出向 | | | |
| 日立化成(中国)投資有限公司 (注) 1 | 中国 | (千RMB) 1,109,478 | 中国における投資及び中国グループ会社の統括、管理支援、事業拡大支援並びに機能材料、先端部品・システムの販売 | 100.0 | あり | あり | なし | なし | なし |
| 日立化成工業(南通)化工有限公司 (注) 1 | 中国 | (千RMB) 354,479 | 機能性樹脂材料、化学素材、ディスプレイ用回路接続フィルムの製造、販売 | (100.0) 100.0 | あり | あり | なし | 当社製品の販売先、当社製品の外注先 | なし |
| 日立化成電子材料(広州)有限公司 (注) 1 | 中国 | (千RMB) 308,889 | 配線板用銅張積層板の製造、販売 | (100.0) 100.0 | あり | あり | なし | 当社製品の販売先 | なし |
| 日立化成工業(蘇州)有限公司 (注) 1 | 中国 | (千RMB) 248,186 | 半導体用エポキシ封止材、配線板用感光性フィルムの製造、販売 | (100.0) 100.0 | あり | あり | なし | 当社製品の販売先 | なし |
| 日立化成工業(東莞)有限公司 (注) 1 | 中国 | (千RMB) 215,434 | 配線板用感光性フィルム、電気絶縁用ワニス、ディスプレイ用回路接続フィルムの製造、販売 | (100.0) 100.0 | あり | あり | なし | 当社製品の販売先 | なし |
| 日立化成工業(鄭州)汽車配件有限公司 (注) 1 | 中国 | (千RMB) 166,065 | 自動車用樹脂成形品の製造、販売 | (100.0) 100.0 | あり | なし | なし | 当社製品の販売先 | なし |
| 日立粉末冶金(東莞)有限公司 | 中国 | (千RMB) 116,361 | 粉末冶金製品の製造、販売 | (100.0) 100.0 | あり | あり | なし | 当社製品の販売先 | なし |
| 韶關日立化成能源科技有限公司 (注) 1 | 中国 | (千RMB) 184,665 | 鉛蓄電池の製造 | (100.0) 100.0 | あり | なし | なし | なし | なし |
| 佛山捷貝汽車配件有限公司 | 中国 | (千RMB) 57,258 | 摩擦材の製造 | (100.0) 100.0 | あり | なし | なし | 当社製品の販売先 | なし |
| 日立化成工業(煙台)有限公司 | 中国 | (千RMB) 41,598 | 配線板用感光性フィルムの加工、販売及びリチウムイオン電池用カーボン負極材の製造、販売 | (100.0) 100.0 | あり | なし | なし | 当社製品の販売先 | なし |
| 日立化成工業(上海)有限公司 | 中国 | (千RMB) 28,354 | 機能材料の販売 | (100.0) 100.0 | あり | なし | なし | 当社製品の販売先 | なし |
| 日邦樹脂(無錫)有限公司 | 中国 | (千RMB) 17,382 | 接着剤、合成樹脂の製造、販売 | (73.5) 100.0 | あり | あり | なし | 当社製品の販売先 | なし |
| 日立化成工業(重慶)有限公司 | 中国 | (千RMB) 16,938 | 配線板用感光性フィルムの加工 | (100.0) 100.0 | あり | なし | なし | 当社製品の販売先 | なし |
| Hitachi Chemical Electronic Materials (Hong Kong) Limited | 香港 | (千HK\$) 68,499 | 配線板用銅張積層板の製造、販売 | 100.0 | あり | あり | なし | 当社製品の販売先 | なし |
| Hitachi Chemical Co. (Hong Kong) Limited | 香港 | (千HK\$) 9,000 | 機能材料の販売 | (8.9) 100.0 | あり | なし | なし | 当社製品の販売先、材料の仕入先 | なし |
| 日立化成能源科技股份有限公司 (注) 1 | 台湾 | (千NT\$) 739,570 | 鉛蓄電池の製造、販売 | 100.0 | あり | あり | なし | 製品の仕入先 | なし |
| 台湾日立化成電子材料股份有限公司 (注) 1 | 台湾 | (千NT\$) 702,797 | 半導体回路平坦化用研磨材料の製造及び配線板用感光性フィルムの加工 | 100.0 | あり | あり | なし | 当社製品の販売先、当社製品の外注先 | なし |
| 台湾日邦樹脂股份有限公司 | 台湾 | (千NT\$) 81,000 | 接着剤、樹脂複合材料の製造、販売 | 76.0 | あり | なし | なし | 当社製品の販売先 | なし |
| 台湾日立化成國際股份有限公司 | 台湾 | (千NT\$) 10,000 | 機能材料の販売 | 100.0 | あり | なし | なし | 当社製品の販売先、材料の仕入先 | なし |

| 会社の名称 | 所在地 | 資本金 | 主要な事業の内容 | 議決権の所有割合 (%) | 関係内容 | | | | |
|--|--------|----------------------|---|------------------|-------|----------|------|-------------------------------|----------|
| | | | | | 役員兼任等 | | 資金援助 | 営業上の取引 | 固定資産の賃貸借 |
| | | | | | 兼任 | 転籍 出向 | | | |
| Hitachi Chemical Electronic Materials (Korea) Co., Ltd. | 韓国 | (千WON) 630,000 | 配線板用感光性フィルムの加工、販売及び機能材料の販売 | 100.0 | あり | あり | なし | 当社製品の販売先 | なし |
| PT Hitachi Chemical Indonesia (注) 1 | インドネシア | (百万IDR) 333,007 | 粉末冶金製品の製造、販売 | (0.0) 100.0 | あり | あり | あり | 当社製品の販売先、 当社製品の外注先 | なし |
| Hitachi Chemical (Johor) Sdn. Bhd. (注) 1 | マレーシア | (千M\$) 150,000 | 配線板用感光性フィルム、電気絶縁用ウニスの製造、販売 | 100.0 | あり | あり | なし | 当社製品の販売先、 当社製品の外注先 | なし |
| Hitachi Chemical (Selangor) Sdn. Bhd. | マレーシア | (千M\$) 52,500 | 半導体用エポキシ封止材の製造、販売 | 100.0 | あり | あり | なし | 当社製品の販売先 | なし |
| Hitachi Chemical (Malaysia) Sdn. Bhd. | マレーシア | (千M\$) 13,000 | 半導体用エポキシ封止材、ダイボンディング材料の製造、販売 | 100.0 | あり | なし | なし | 当社製品の販売先 | なし |
| Hitachi Chemical (Singapore) Pte. Ltd. (注) 1 | シンガポール | (千US\$) 19,512 | 配線板の製造、販売 | 100.0 | あり | なし | なし | 当社製品の販売先、 当社製品の外注先 | なし |
| Hitachi Powdered Metals (Singapore) Pte. Limited | シンガポール | (千US\$) 5,400 | 粉末冶金製品の製造、販売 | 100.0 | あり | なし | なし | 当社製品の販売先、 当社製品の外注先 | なし |
| Hitachi Chemical Asia-Pacific Pte. Ltd. | シンガポール | (千US\$) 1,000 | 機能材料の販売並びにアセアン及びインドのグループ会社の管理支援 | 100.0 | あり | あり | なし | 当社製品の販売先 | なし |
| Hitachi Chemical Asia (Thailand) Co., Ltd. (注) 1 | タイ | (千BAHT) 2,180,000 | 粉末冶金製品、摩擦材、電池の製造、販売 | (0.0) 100.0 | あり | あり | なし | 当社製品の販売先、 当社製品の外注先 | なし |
| Siam Magi Co., Ltd. (注) 3 | タイ | (千BAHT) 100,000 | 持株会社 | 49.0 | あり | なし | あり | なし | なし |
| Hitachi Chemical Storage Battery (Thailand) Public Company Limited | タイ | (千BAHT) 200,000 | 鉛蓄電池の製造、販売 | (51.0) 86.9 | あり | あり | なし | 当社製品の販売先 | なし |
| Hitachi Chemical Automotive Products (Thailand) Company Limited | タイ | (千BAHT) 166,000 | 自動車用樹脂成形品の製造、販売 | 51.0 | あり | あり | なし | 当社製品の販売先 | なし |
| Hitachi Chemical Energy Technology (Vietnam) Co., Ltd. (注) 1 | ベトナム | (百万VND) 369,402 | 鉛蓄電池の製造 | (100.0) 100.0 | あり | なし | なし | なし | なし |
| Hitachi Chemical India Private Limited (注) 1 | インド | (千INR) 1,200,000 | 粉末冶金製品の製造、販売 | (0.0) 100.0 | あり | あり | あり | 当社製品の販売先 | なし |
| Allied JB Friction Private Limited | インド | (千INR) 251,273 | 摩擦材の製造、販売 | (25.0) 51.0 | あり | なし | あり | なし | なし |
| Hitachi Chemical Company America, Ltd. | 米国 | (千US\$) 1,200 | 米国グループ会社の統括及び管理支援、事業拡大支援、機能材料、先端部品・システムの販売、パイオテクノロジーに関する研究・開発 | 100.0 | あり | なし | なし | 当社製品の販売先、 材料の仕入先及び当社の研究委託先 | なし |
| Hitachi Powdered Metals (USA), Inc. (注) 1 | 米国 | (千US\$) 34,300 | 粉末冶金製品、樹脂ギアの製造、販売 | (100.0) 100.0 | あり | あり | なし | 当社製品の販売先 | なし |

| 会社の名称 | 所在地 | 資本金 | 主要な事業の内容 | 議決権の所有割合 (%) | 関係内容 | | | | |
|--|------|-------------------|------------------|------------------|-------|----------|------|----------|----------|
| | | | | | 役員兼任等 | | 資金援助 | 営業上の取引 | 固定資産の賃貸借 |
| | | | | | 兼任 | 転籍 出向 | | | |
| Hitachi Chemical Advanced Therapeutics Solutions, LLC (注) 1 | 米国 | (千US\$) 25,573 | 再生医療等製品の受託製造 | (100.0) 100.0 | あり | なし | なし | なし | なし |
| Hitachi Chemical Diagnostics, Inc. (注) 1 | 米国 | (千US\$) 11,782 | 診断薬の製造、販売 | (100.0) 100.0 | あり | あり | なし | 製品の仕入先 | なし |
| FIAMM Energy Technology (USA) LLC | 米国 | (千US\$) 5,000 | 鉛蓄電池の販売 | (100.0) 100.0 | なし | なし | なし | なし | なし |
| Hitachi Chemical Mexico, S.A. de C.V. (注) 1 | メキシコ | (千MXN) 325,650 | 摩擦材、粉末冶金製品の製造、販売 | (99.0) 100.0 | あり | あり | なし | なし | なし |
| FIAMM GmbH | ドイツ | (千EUR) 3,835 | 鉛蓄電池の販売 | (100.0) 100.0 | なし | なし | なし | なし | なし |
| Hitachi Chemical Europe GmbH | ドイツ | (千EUR) 153 | 機能材料の販売 | 100.0 | あり | あり | なし | 当社製品の販売先 | なし |
| ISOLITE GmbH | ドイツ | (千EUR) 25 | 断熱部品の製造、販売 | (100.0) 100.0 | あり | あり | なし | なし | なし |
| FIAMM Energy Technology S.p.A. (注) 1 | イタリア | (千EUR) 65,300 | 鉛蓄電池の製造、販売 | 51.0 | あり | あり | なし | なし | なし |
| Società Italiana Accumulatori Produzione Ricerca Avezzano - SIAPRA S.p.A. (注) 1 | イタリア | (千EUR) 34,500 | 鉛蓄電池の製造 | (100.0) 100.0 | あり | なし | なし | なし | なし |
| その他 32社 | | | | | | | | | |

(注) 1. 特定子会社に該当している。

2. 議決権の所有割合欄の()内数値は、間接所有割合で内数表示している。

3. 議決権の所有割合は50%以下であるが、実質的に支配しているため連結子会社としている。

(3) 持分法適用会社

| 会社の名称 | 所在地 | 資本金 (百万円) | 主要な事業の内容 | 議決権の所有割合 (%) | 関係内容 | | | | |
|---|--------|-------------------|-----------------|----------------|-------|----------|------|--------|----------|
| | | | | | 役員兼任等 | | 資金援助 | 営業上の取引 | 固定資産の賃貸借 |
| | | | | | 兼任 | 転籍 出向 | | | |
| 五井化成(株) | 千葉県市原市 | 50 | 工業用素材の製造、販売 | 50.0 | あり | なし | なし | 材料の仕入先 | あり |
| Hitachi Chemical DuPont MicroSystems L.L.C. | 米国 | (千US\$) 14,000 | 半導体用ポリイミドの製造、販売 | (50.0) 50.0 | あり | あり | なし | 材料の仕入先 | あり |

(注) 1. 五井化成(株)及びHitachi Chemical DuPont MicroSystems L.L.C.は共同支配企業である。

2. 議決権の所有割合欄の()内数値は、間接所有割合で内数表示している。

5【従業員の状況】

(1) 連結会社の状況

2019年3月31日現在

| セグメントの名称 | 従業員数(人) |
|-----------|---------|
| 機能材料 | 7,859 |
| 先端部品・システム | 15,130 |
| 合計 | 22,989 |

(2) 提出会社の状況

2019年3月31日現在

| 従業員数(人) | 平均年齢(歳) | 平均勤続年数(年) | 平均年間給与(円) |
|---------|---------|-----------|-----------|
| 6,523 | 42.4 | 18.3 | 7,442,845 |

(注) 1. 上記「平均勤続年数」は、当社の関係会社における勤続年数を合算して算出している。
 2. 上記「平均年間給与」は、基準外賃金及び賞与を含んでいる。

2019年3月31日現在

| セグメントの名称 | 従業員数(人) |
|-----------|---------|
| 機能材料 | 3,891 |
| 先端部品・システム | 2,632 |
| 合計 | 6,523 |

(3) 労働組合の状況

当社グループの主要各社の労働組合は次のとおりであり、それぞれ会社との関係は円満に推移しており、特記すべき事項はない。

2019年3月31日現在

| 会社名 | 組合名 | 上部団体名 |
|----------------------|------------------------------|------------------------|
| 日立化成(株) | 日立化成労働組合 | 全日本電機・電子・情報関連産業労働組合連合会 |
| 日立化成エレクトロニクス(株) | 日立化成エレクトロニクス労働組合 | |
| 日本ブレーキ工業(株) | 日本ブレーキ工業労働組合 | |
| | 全国一般東京一般労働組合西部ブロック日本ブレーキ工業分会 | 全国一般労働組合 |
| | JAM東京千葉日本ブレーキ労働組合 | JAM東京千葉 |
| 日立化成オートモーティブプロダクツ(株) | 日立化成オートモーティブプロダクツ労働組合 | |
| 浪江日立化成工業(株) | 浪江日立化成工業労働組合 | |
| 日立化成テクノサービス(株) | 日立化成テクノサービス労働組合 | |

第2【事業の状況】

1【経営方針、経営環境及び対処すべき課題等】

文中における将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において当社グループが判断したものである。

(1) 経営の基本方針

日立化成グループ・アイデンティティ

当社グループは、時代を拓く優れた技術と製品の開発を通して社会に貢献することを企業理念とし、日立創業の精神である「開拓者精神」「誠」「和」を大切にしていくなかで価値と定め、未知の領域に踏み出すチャレンジ精神をもって、化学を超えた新たな価値を創造し、社会やお客様の期待を超える「驚き」を実現する。

経営の基本方針

当社グループは、化学を超えた広範な領域において研究を深化させ、当社グループの高度で幅広い基盤技術、すなわち「材料技術」「プロセス技術」「評価技術」を強化する。これらを基に多様な市場の全てのバリューチェーンにおいてイノベーションを実現し、社会に新たな価値を提供することにより、適切な利益を獲得して事業の持続的成長を達成するとともに、ステークホルダーと協働することを通じ、企業価値の最大化を図る。

イ．事業運営

(事業展開する領域)

当社グループは、グローバルな成長市場において当社グループの基盤技術を最大限に生かせる事業領域に機動的に経営資源を投入し、高付加価値事業を展開するとともに、成長性及び収益性の低い事業については市場・事業環境を早急に見極め、再生もしくは撤退を行うことにより、成長性と収益性の高い事業ポートフォリオを構築する。

(事業運営上の行動指針)

当社グループは、社会やお客様の期待を超える「驚き」を実現するため、ニーズの探索から、研究、開発、生産、営業に至るまでの全ての活動において、以下の行動指針、すなわち、「ニーズを見出す力を持つ」「未来のシナリオを描く」「次のコア技術を生み出す」「グローバルで選ばれる企業になる」「共創しあえるワークスタイルをつくる」ことに挑戦する。

(ステークホルダーへの責任の履行)

当社グループは、お客様、株主、従業員をはじめとするステークホルダーへの責任を履行するため、双方向でのコミュニケーションを重視し相互の理解を深めるほか、事業活動を通じ環境問題をはじめとする社会課題の解決に寄与するとともに、社会の一員として社会貢献活動に積極的かつ継続的に取り組む。また、国籍・性別・人種等を問わず、平等かつ公正に従業員が活躍できる機会を提供するとともに、従業員及び職場の安全を確保できる環境整備に取り組む。

(中期経営計画と年度予算)

当社グループは、10年先のめざす姿を見据えて3ヵ年ごとに中期経営計画を策定し中長期的な視野に立った経営を実践する一方、毎年、中期経営計画の達成に向けた予算を編成、実行することにより、持続的な成長の実現に取り組む。

ロ．コーポレートガバナンス

当社は、コーポレートガバナンスの基本方針として「日立化成コーポレートガバナンス・ガイドライン」を定め、株主をはじめとするあらゆるステークホルダーの利益に資する経営を実践する。

同ガイドラインの下、業務執行機能と監督機能とを分離した「指名委員会等設置会社」の特長を最大限に生かし、執行役社長を中心とする業務執行体制により機動性、専門性の高い意思決定に基づく経営を実行するとともに、取締役会は独立性と客観性を兼ね備えた経営監督機能を発揮する。

ハ．コンプライアンス

当社グループは、全ての役員・従業員の判断の拠り所や取るべき行動を「日立化成グループ行動規範」に定め、企業が社会の一員であるという深い認識のもと、「基本と正道」を旨とし、「日立化成コンプライアンス5則」に則った、企業倫理と法令遵守に根ざした事業活動に徹するとともにその確実な実行のための組織体制を構築する。

当社グループの製品・サービスについては社会の発展に大きく貢献していることを認識し、最終顧客まで意識した品質保証責任の自覚を持つ。また、お客様との健全な関係性を維持し、適切な仕様等の取り決めとその遵守に努める。さらに環境との調和を図り、社会貢献活動を継続することにより、良識ある企業市民として真に豊かな社会の実現に尽力する。

ニ．親会社等との関係

当社グループは、(株)日立製作所を親会社とする日立グループの一員として、経営情報の交換、研究開発、製品の供給等の事業活動において、日立グループ各社との協力関係を維持、発展させ、日立グループのブランド力等の経営資源を有効に活用するとともに、親会社による合理的なガバナンス機能を十分発揮させつつ、上場会社として、全てのステークホルダーとのコミュニケーションを深め、当社グループの強みを生かした自律性と緊張感のある経営を実践する。

(2) 目標とする経営指標

当社グループは、2021年度を最終年度とする中期経営計画において、調整後営業利益率 10%以上、ROIC 13%以上を目標値としている。調整後営業利益率は、「売上収益」から「売上原価」並びに「販売費及び一般管理費」の額を減算して得られた金額の「売上収益」に対する比率をいう。

(3) 当社グループの現状の認識について

今後の経済見通しについては、米国の通商政策、英国のEU離脱問題など、世界経済への影響が懸念される不確定要因があり、先行きは不透明な状況にある。

こうした状況の下、当社グループは、不適切な検査等についての反省及び2018中期経営計画の成果・反省を踏まえ、この度2021年度を最終年度とする2021中期経営計画を策定した。2021年度までの3年間で「経営・事業の質を高めるステージ」と位置づけ、「グローバルでのガバナンスの強化」、「高収益基盤の確立」を基本方針として取り組んでいく。

(4) 中長期的な経営戦略及び対処すべき課題

グローバルでのガバナンスの強化

イ．コンプライアンス体制の再構築

不適切な検査等と同様の事案を二度と繰り返さないために、不正を起こさないための全社的な意識改革、事業部門から独立した品質保証体制による管理の厳格化、人の手を介さない製品検査関連システムの構築など、再発防止策を徹底していく。

ロ．グループガバナンスの強化

コンプライアンス・リスクの低減を図るため、M&A等により増加したグループ会社数の削減を推進するとともに、海外の各地域内の監査体制の構築・強化やレポーティングラインの明確化を通じて、地域毎にグループ会社が自律的にリスク管理を行う体制を整備していく。

高収益基盤の確立

イ．デファクト化されたトップシェア事業の拡大

既存の半導体・スマートフォン向け材料、自動車部品に加え、5G・EV・新電池・医療分野に経営リソースを投入し、当社の基盤技術である「材料技術」「プロセス技術」「評価技術」を基に、競争優位性のある独自のソリューションを提供することにより、業界内でのデファクトスタンダード化を図る。

(イ)情報通信

「半導体実装材料オープン・ラボ」の活用によりオープン・ラボ戦略を拡大し、お客様に半導体実装材料のワンストップソリューションを提供することで、当社グループの確固たる地位を確立していく。また、今後拡大が見込まれる5G等の次世代通信インフラ向け新製品の開発に取り組んでいく。

(ロ)モビリティ

次世代自動車開発での重要なキーワードとなるCASE(Connectivity、Autonomous、Shared&Service、Electric)において、一層重要性の高まりが見込まれる軽量化・電動化・熱マネジメントの課題に対し、当社グループの材料技術の強みを生かしてあらゆるモビリティに必要な不可欠な製品をグローバルに提供していく。

(ハ)エネルギー

M&Aによる新規連結子会社に対するPMI(買収後統合プロセス)の加速により、シナジー効果の最大化を図る。また、ISS(Idle Stop System)車用電池をはじめとする環境に配慮した製品の拡大や、産業用鉛蓄電池の状態を監視保守するサービスのビジネスモデル構築により、事業強化に努めていく。

(ニ)ライフサイエンス

M&Aによる新規連結子会社とのシナジー効果を発揮し、当社グループの将来を担う高収益事業に育成していく。診断薬事業では、欧米向け販売網の拡大・整備を進めるとともに、再生医療事業では、日米欧3拠点で製造・営業・開発のグローバル連携体制を確立する。また、培地などの再生医療用消耗材の立ち上げに取り組んでいく。

ロ．新事業・新製品の創出加速

2018中期経営計画の下、再生医療事業など当社にとって新しい領域の事業・製品の立ち上げを推し進めてきたが、2021中期経営計画では、次世代通信インフラや次世代モビリティ等の当社グループが持つ強みを生かせる市場・製品領域にターゲットをシフトし、さらに新事業・新製品の創出を加速していく。

ハ．グローバル先進クラスのコスト構造への再挑戦

2018中期経営計画において、売上収益はほぼ計画通りに拡大できた一方、営業利益率は目標未達に終わった。これを踏まえ、2021中期経営計画では、低収益事業対策を断行して事業ポートフォリオを改革することなどにより、営業利益率の改善を進めていく。また、新たにROIIC(Return on Invested Capital：投下資本利益率)を経営指標として重要視し、より資本効率を重視した経営を行っていく。

サステナビリティへの取り組み

当社グループは、ESG(Environment、Social、Governance)トレンドを踏まえた重要課題(マテリアリティ)への対応策を反映した2021中期経営計画達成への取り組みを通じて、持続可能な世界を実現するための国際社会全体の開発目標であるSDGs(Sustainable Development Goals)の達成に貢献していく。特に、モノづくりの全プロセスにおいてCO2排出量削減のための対策を徹底するほか、競争力強化の観点から多様性を確保するため、経営層における女性及び外国籍の人材の比率を高めていく。

(5) 株式会社の支配に関する基本方針について

当社は、「材料技術」「プロセス技術」「評価技術」を基に多様な市場の全てのバリューチェーンにおいてイノベーションを実現し、社会に新たな価値を提供することにより、適切な利益を獲得して事業の持続的成長を達成するとともに、ステークホルダーと協働することを通じ、企業価値の最大化を図ることを経営の基本方針としている。

こうした方針の下、当社は、株式の上場を通じて、資本市場から事業の維持及び拡大に必要な資金を調達するとともに、親会社の(株)日立製作所による合理的なガバナンス機能を十分発揮させつつ株主の視点に立ったコーポレート・ガバナンスを確保すると同時に、上場会社として、全てのステークホルダーとのコミュニケーションを深め、当社の強みを生かした自律性と緊張感のある経営を実践することが当社の企業価値向上に極めて重要であると考えている。

一方、当社は、日立グループの一員として、経営情報の交換、研究開発、製品の供給等の事業活動において、(株)日立製作所及びそのグループ会社との協力関係を維持、発展させ、日立グループのブランド力等の経営資源を有効活用することも、当社の企業価値向上に資するものと認識している。

当社としては、親会社のみならず、全ての株主にとっての企業価値の最大化を常に念頭に置き、日立グループ会社との関係においては事業運営及び取引の独立性を保つことを基本としつつ、経営計画の策定、ガバナンス体制の確立等に取り組んでいる。

2【事業等のリスク】

当社グループは、幅広い事業分野にわたり、世界各地において事業活動を行っている。また、事業を遂行するために高度で専門的な技術を利用している。そのため、当社グループの事業活動は、多岐にわたる要因の影響を受ける。その要因の主なもの、次のとおりである。

なお、文中における将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において当社グループが判断したものである。

(1) 経済の動向による影響について

当社グループの市場である国及び地域の経済環境の動向は、当社グループの経営成績に影響を及ぼす可能性がある。当社グループが事業活動を行っている日本、アジア、米国及び欧州等の市場において、景気後退により個人消費や民間設備投資が減少した場合、当社グループが提供する製品及びサービスの需要の減少や価格競争の激化が進展する可能性がある。このような環境下において、当社グループは売上収益や収益性を維持できる保証はない。

(2) 競争の激化について

当社グループの事業分野においては、大規模な国際的企業から専門企業に至るまで、多様な競合相手が存在するほか、製品の汎用品化や低コストの地域における製造が進んでおり、価格競争が激化している。激しい競争の下で成功するためには、価格、技術、品質及びブランド価値の面において競争力を有する製品及びサービスを時宜に適った方法で市場に投入しなければならないが、当社グループの提供する全ての製品及びサービスについて実現できる保証はない。製品及びサービスが競争力を維持できない場合又は市場投入の時期が適切でない場合は、当社グループの経営成績に影響を及ぼす可能性がある。

(3) 海外活動に潜在するリスクについて

当社グループは、日本の他にアジア、米国及び欧州等の国及び地域で生産及び販売を行っている。これらの国及び地域では、それぞれに固有の政治的及び社会的リスクがあり、当社グループの財政状態及び経営成績に影響を及ぼす可能性がある。

(4) 事故及び災害による影響について

当社グループは、火災、爆発等の事故を防止するため、設備点検を実施するとともに、安全装置及び消火設備の充実等を図っている。また、地震、台風等の自然災害に備え、生産設備及び情報・通信システムの安全性向上その他の対応策を講じている。しかし、これらの施策にかかわらず事故や災害による損害を完全に防止できる保証はない。これらの損害が発生すると、生産能力が低下し販売に大きな影響を与え、加えて事業体制の立直しのために多額の費用を要する場合がある。さらに、新型インフルエンザ等の感染症の大流行により、当社グループの事業活動が混乱する可能性がある。これらのことは、当社グループの財政状態及び経営成績に影響を及ぼす可能性がある。

(5) 公的規制による影響について

当社グループの事業活動は、当社グループが事業を行う各国及び地域の多様な規制に服する。このような規制には、投資、貿易、競争、知的財産権、税、為替及び環境・リサイクルに関する規制を含む。規制に関する重大な変更は、当社グループの事業活動を制限し、若しくはコストを増加させ、当社グループの経営成績に影響を及ぼす可能性がある。

(6) 為替相場の変動による影響について

当社グループは、取引先及び取引地域が世界各地にわたっているため、為替相場の変動リスクにさらされている資産及び負債を保有している。主に米ドルをはじめとする現地通貨建ての製品の輸出及び原材料の輸入を行っていることから、為替相場の変動は、当社グループの経営成績に影響を及ぼす可能性がある。米ドルをはじめとする他の通貨に対する円高は、国内から海外市場に輸出される製品の価格競争力を弱め、一方、円安は、海外から輸入する原材料価格を上昇させ、それぞれ収益に影響を及ぼす可能性がある。当社グループでは、為替相場の変動のリスクを軽減するための施策を実行しているが、為替相場の変動による経営成績への影響を完全に回避できる保証はない。

(7) 財務上のリスクについて

当社グループは、株式等の有価証券を保有しており、これらの有価証券の価格の下落は、当社グループの財政状態及び経営成績に影響を及ぼす可能性がある。また、当社グループは、資本市場から長期の資金調達を行っており、金利の変動や信用リスクによる影響を受ける可能性がある。

(8) 事業再構築について

当社グループは、経営の効率化と競争力の強化のため、不採算事業からの撤退、子会社や関連会社の売却・再編、製造拠点と販売網の再編及び人員の適正化等による事業の再構築を継続して行っている。これらの施策に関連して、当社グループの財政状態及び経営成績に影響を及ぼす費用が生じる可能性がある。各国政府の規制、雇用問題及び当社グループが売却を検討している事業の売却先不在等によって、事業再構築の計画が適時に実行できない可能性もある。また、当社グループが事業再構築の実施により、当初の目的の全部又は一部を達成できる保証はない。

(9) 企業買収、合併事業及び戦略的提携について

当社グループは、各事業分野において、新技術や新製品の開発及び競争力の強化のため、外部企業の買収、事業の合併及び戦略的提携を実施することがある。このような施策は、事業遂行、技術、製品及び人事上の統合において時間と費用がかかる複雑な問題を含んでおり、適切な計画の下で実行がなされない場合には、当社グループの事業に影響を及ぼす可能性がある。事業提携の成果は、当社グループがコントロールできない提携先の決定や能力又は市場の動向によって影響される。また、統合に関する費用や買収事業の再構築に関する費用等の買収関連の費用が当社グループに発生する可能性がある。さらに、当社グループが買収事業の統合に成功し、若しくは当該施策を通じて当初の目的の全部又は一部を達成することに成功する保証はない。

(10) 取引先の信用不安について

当社グループは、国内外の様々な取引先を有しており、取引先の財政状態の悪化や経営破綻等が生じた場合、当社グループの財政状態及び経営成績に影響を及ぼす可能性がある。

(11) 親会社との関係について

当社の親会社である(株)日立製作所は傘下に多数の関係会社を擁し、複数のセグメントにわたって、製品の製造及び販売・サービスに至る幅広い事業活動を展開しており、当社は高機能材料セグメントの一部を担っている。また、本有価証券報告書提出日現在、当社取締役10名のうち1名は同社の役員等を兼任しており、同社とは技術協力、人的協力及び製品の供給等においても密接な関係がある。当社は、上場会社として、全てのステークホルダーとのコミュニケーションを深め、当社グループの強みを生かした自律性と緊張感のある経営を実践することを基本方針としているが、当社グループの事業展開等は、同社の経営戦略等の影響を受ける可能性がある。

(12) 急速な技術革新について

当社グループの事業分野においては、新しい技術が急速に発展している。先端技術の開発に加えて、これを継続的に、迅速かつ優れた費用効率で製品及びサービスに適用することは、競争力を維持するために不可欠である。このような製品及びサービスを生み出すためには、研究開発に対する多大な努力が必要となるが、当社グループの研究開発が常に成功する保証はない。当社グループの先端技術の開発又は製品・サービスへの適用が予定どおり進展しなかった場合は、関連する当社グループの事業の経営成績に影響を及ぼす可能性がある。

(13) 製品の品質と責任について

当社グループの製品及びサービスは、高度な技術や複雑な技術を利用したものが増えており、また、原材料や部品等を外部の供給者から調達していることにより、品質保証へのコントロールは複雑化している。当社グループの製品及びサービスに欠陥等の問題が生じた場合には、当該問題から生じた損害について当社グループが責任を負う可能性があるとともに、当社グループの製品及びサービスの品質への信頼や経営成績に影響を及ぼす可能性がある。

(14) 訴訟その他の法的手続について

当社グループは、事業を遂行する上で、取引先や第三者から訴訟等が提起され、又は規制当局より法的手続がとられるリスクを有している。これらにより、当社グループに対して巨額かつ予想困難な損害賠償の請求がなされた場合又は事業遂行上の制限が加えられた場合、当社グループの財政状態及び経営成績に影響を及ぼす可能性がある。

(15) 主要原材料価格の変動による影響について

当社グループの製品は、石油化学製品を原材料としているものが多く、その仕入価格は原油価格の変動の影響を受けることがある。また、鉛、銅及びレアアース等その他の原材料市況の変動や産出国の輸出規制により、原材料の調達価格が上昇し、あるいは必要量の調達が困難となり、当社グループの経営成績に影響を及ぼす可能性がある。

(16) 優秀な人材の採用、確保及び育成について

当社グループが競争力を維持するためには、経営又は技術に関する能力に優れた人材を採用、確保し、育成することが重要であると考えている。しかしながら、優秀な人材の採用及び確保に関する競争は激化している。当社グループがこのような優秀な人材の採用、確保及び育成に成功する保証はない。

(17) 退職給付債務について

当社グループは、数理計算によって算出される多額の退職給付費用及び債務を負担している。この算出においては、死亡率、脱退率、退職率、給与の変更、割引率、年金資産の期待収益率等の見積りが前提になっている。この見積りは、人員の状況、現在の市況及び将来の金利動向等の基礎となる要素に基づき、合理的であると考えているが、実際の結果と合致する保証はない。例えば、割引率の低下は、数理上の退職給付債務の増加をもたら

す。このように前提条件の変化は、当社グループの財政状態及び経営成績に影響を及ぼす可能性がある。

(18) 知的財産権について

当社グループは、事業を遂行する上で、製品、製品のデザイン及び製造過程等に関する知的財産権を利用して

いる。当社グループは、多数の知的財産権を保有するとともにライセンスを供与しており、必要又は有効と認め

る場合には、第三者の知的財産権を使用するために相手方からライセンスを取得する。それらの権利の保護、維

持若しくは取得が予定どおり行われなかった場合又は第三者による当社グループの知的財産権の侵害を完全に防

止できなかった場合は、当社グループの事業遂行や競争力に影響を及ぼす可能性がある。また、知的財産権に関

する訴訟において当社グループが当事者となる可能性があり、その結果、費用が発生し、当社グループの財政状

態及び経営成績に影響を及ぼす可能性がある。

(19) 原材料、部品及びサービスの供給者への依存について

当社グループの生産活動は、供給者が時宜に合った方法により適切な品質及び量の原材料、部品及びサービス

を当社グループに供給する能力に依存している。供給者が他の顧客を有し、需要過剰の状況において、あるいは

事故、災害等の発生、環境規制に起因する供給停止等により、全ての顧客の要求を満たすための十分な能力を有

しない可能性もある。当社グループは、原則として、複数の供給元と取引を行い、供給に関連する問題の発生を

回避するため供給者と緊密な関係を築くよう努めているが、供給不足や納入の遅延等の供給に関連する問題を完

全に回避できる保証はない。このような問題が発生した場合、当社グループの事業に影響を及ぼす可能性がある

。

(20) 情報の漏洩について

当社グループは、技術、営業、その他事業に関する営業秘密並びに多数の他企業及び個人の情報を有してい

る。当社グループは、情報管理に万全を期しているが、予期せぬ事態により情報が流出し、第三者がこれを不正

に取得、使用する可能性がある。当社グループの営業秘密が不正に外部に流出した場合、当社グループの事業に

影響を与えるおそれがある。また、他企業及び個人の情報が外部に流出した場合、被害を受けた企業及び個人に

対して損害賠償責任を負うとともに、当社グループの事業やイメージに影響を与えるおそれがある。これらのこ

とは、当社グループの財政状態及び経営成績に影響を及ぼす可能性がある。

(21) 情報システムについて

当社グループの事業活動において、情報システムの利用とその重要性は増大している。天変地異や人為的な原

因によって情報システムの機能に支障が生じた場合、当社グループの事業活動、財政状態及び経営成績に影響

を及ぼす可能性がある。

(22) 環境問題について

各種の化学物質等を取り扱う当社グループは、環境基本法、大気汚染防止法及び水質汚濁防止法等の環境法令

を遵守している。有害物質等が社外に流出しないように万全の対策をとっているが、万一流出した場合には、社

会的信用の失墜、補償・対策費用の支出又は生産停止等の事態が発生する。また、将来の法規制の厳格化や環境

に対する社会の関心の一層の高まりにより、過去の事業活動も含め、過失の有無にかかわらず、当社グループは

法的・社会的責任を負う可能性がある。これらのことは、当社グループの財政状態及び経営成績に影響を及ぼす

可能性がある。

3【経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】

文中における将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において判断したものである。

(業績等の概要)

(1) 業績

当連結会計年度の世界経済は、米国においては景気が堅調に推移したものの、欧州、中国及び他の新興国においては伸び悩んだ。日本経済も、輸出の失速の影響を受け景気は足踏み状態となった。

このような経営環境において、当社グループは、持続的成長を可能とする強靱な事業基盤を構築するため、2018年度を最終年度とする2018中期経営計画の下、「戦い方の変革によるトップシェア事業の育成」、「オープン・イノベーションを中心とした事業化の加速」を方針に掲げ、新たな価値創造の実現に向け、「ニッチ&クラスター型事業戦略」の効果創出、オープン・イノベーションを活用した新製品・新事業立ち上げ等の施策に取り組んできた。

以上の諸施策を実施した結果、当連結会計年度の売上収益は半導体回路平坦化用研磨材料、リチウムイオン電池用カーボン負極材等の需要増やM&Aにより、6,810億円(前年度比1.8%増)となった。一方、利益については、物量増や継続的な原価低減等の増益要因があったものの、スマートフォン向け製品の伸び悩み等による構成の悪化や、再生医療事業の立ち上げなどによる固定費の増加、さらに昨年発覚した当社製品における不適切な検査等に関して発生した費用等の減益要因により、営業利益は364億円(前年度比21.3%減)、親会社株主に帰属する当期利益は287億円(前年度比20.9%減)となった。

機能材料セグメント

電子材料

半導体用エポキシ封止材は、中国市場での家電等の民生機器向けの売上が減少し、前年度実績を下回った。

半導体用ダイボンディング材料は、スマートフォン向けの売上が減少したことにより、前年度実績を下回った。

半導体回路平坦化用研磨材料は、3次元構造のNAND型フラッシュメモリーの需要増により、前年度実績を上回った。

電気絶縁用ワニスは、自動車向けの売上が第3四半期までは好調に推移したが、第4四半期に至り急速な市況悪化の影響で減少に転じたため、前年度実績並みとなった。

無機材料

リチウムイオン電池用カーボン負極材は、環境対応自動車向けの売上が増加したことにより、前年度実績を上回った。

樹脂材料

機能性樹脂は、食品包装用樹脂の売上が堅調に推移したものの、スマートフォン用接着剤の売上が減少し、前年度実績を下回った。

ディスプレイ用回路接続フィルムは、スマートフォン向けの売上が減少したことにより、前年度実績を下回った。

タッチパネル周辺材料は、一部顧客の需要が減少したことにより、前年度実績を下回った。

粘着フィルムは、液晶ディスプレイ表面保護用フィルムの売上が減少したことにより、前年度実績を下回った。

配線板材料

銅張積層板は、ICTインフラ向け基板の売上が増加したものの、家電等の民生機器向けの売上が減少したことにより、前年度実績を下回った。

感光性フィルムは、スマートフォン向けの売上が減少したことにより、前年度実績を下回った。

この結果、当セグメントの売上収益は2,928億円(前連結会計年度比1.4%減)、セグメント損益は369億円(同21.3%減)となった。

先端部品・システムセグメント

自動車部品

樹脂成形品は、前年度第2四半期にドイツ連邦共和国のISOLITE GmbHを連結子会社化したことにより、前年度実績を上回った。

摩擦材は、銅含有量を極めて抑えた製品等の新規案件の拡大があったものの、北米・中国向けの売上が減少したことにより、前年度実績並みとなった。

粉末冶金製品は、北米・中国向けの売上が減少したことにより、前年度実績を下回った。

蓄電デバイス・システム

車両用電池は、前年度第2四半期にタイ王国のHitachi Chemical Storage Battery (Thailand) Public Company Limited (旧 Thai Storage Battery Public Company Limited) を連結子会社化したことにより、売上が増加したが、イタリア共和国での自動車販売低迷の影響を受け、前年度実績並みとなった。

産業用電池・システムは、海外向けの無停電電源装置用電池の売上が増加したことにより、前年度実績を上回った。

キャパシタは、第4四半期から産業機器向けの売上が減少したことにより、前年度実績並みとなった。

電子部品

配線板は、モジュール基板の新製品の立ち上げがあったものの、産業機器向けの売上が減少したことにより、前年度実績並みとなった。

その他

診断薬・装置は、前年度第4四半期に協和メデックス(株)を連結子会社化したことにより、前年度実績を上回った。

この結果、当セグメントの売上収益は3,882億円(前連結会計年度比4.3%増)、セグメント損益は5億円の損失(前連結会計年度のセグメント損益は6億円の損失)となった。

(2) キャッシュ・フロー

当連結会計年度末における現金及び現金同等物は、前連結会計年度末から173億円増加し、1,013億円となった。

営業活動によるキャッシュ・フロー

営業活動によるキャッシュ・フローは、運転資本の改善等から、前連結会計年度実績と比較して422億円多い、772億円の収入となった。

投資活動によるキャッシュ・フロー

投資活動によるキャッシュ・フローは、子会社株式の取得による支出が減少したこと等から、前連結会計年度実績と比較して404億円少ない、474億円の支出となった。

財務活動によるキャッシュ・フロー

財務活動によるキャッシュ・フローは、長期借入れによる収入が減少したこと等から、前連結会計年度実績と比較して416億円多い、127億円の支出となった。

(生産、受注及び販売の状況)

当社グループの生産・販売品目は広範囲かつ多種多様であり、同種の製品であっても、その容量、構造、形式等は必ずしも一様ではなく、また受注生産形態をとらない製品も多く、セグメントごとに生産規模及び受注規模を金額あるいは数量で示すことはしていない。

このため、生産、受注及び販売の状況については、(業績等の概要)におけるセグメント業績に関連付けて示している。

(経営者の視点による経営成績等の状況に関する分析・検討内容)

(1) 重要な会計方針及び見積り

当社グループの連結財務諸表は、IFRSに基づき作成されている。この連結財務諸表の作成に当たり、過去の実績や状況を踏まえ合理的と判断される前提に基づき、継続的に見積り及び予測を実施している。しかし、これらには特有の不確実性があるため、実際の結果とは異なる場合がある。

個々の項目については「第5 経理の状況 1 連結財務諸表等 (1) 連結財務諸表 連結財務諸表注記 3 主要な会計方針についての概要」に記載のとおりである。

(2) 財政状態の分析

キャッシュ・フローの分析

「第2 事業の状況 3 経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析 (業績等の概要) (2) キャッシュ・フロー」に記載のとおりである。

資産及び負債・資本の分析

イ. 資産

当連結会計年度末の資産合計は、前連結会計年度末から75億円増加し7,087億円となった。
有形固定資産が増加したこと等によるものである。

ロ. 負債

当連結会計年度末の負債合計は、前連結会計年度末から131億円減少し2,790億円となった。
買入債務の減少や、社債及び借入金が増加したこと等によるものである。

ハ. 資本

当連結会計年度末の資本合計は、前連結会計年度末から206億円増加し4,296億円となった。
当期利益の計上により利益剰余金が増加したこと等によるものである。

(3) 当連結会計年度の経営成績の分析

売上収益

当連結会計年度の売上収益は、前連結会計年度から118億円(1.8%)増加し6,810億円となった。各区分の概況は下記のとおりである。

イ. 機能材料セグメント

当区分の売上収益は、前連結会計年度から42億円(1.4%)減少し2,928億円となり、総売上収益に対する比率は1.4ポイント減少し43.0%となった。

ロ. 先端部品・システムセグメント

当区分の売上収益は、前連結会計年度から160億円(4.3%)増加し3,882億円となり、総売上収益に対する比率は1.4ポイント増加し57.0%となった。

売上原価、販売費及び一般管理費

売上原価は、前連結会計年度から133億円(2.7%)増加し5,088億円となり、売上収益に対する比率は0.7ポイント減少し74.7%となった。また、販売費及び一般管理費は、前連結会計年度から66億円(5.7%)増加し1,236億円となり、売上収益に対する比率は0.7ポイント減少し18.1%となった。研究開発費は、前連結会計年度から18億円(5.7%)増加し326億円となり、売上収益に対する比率は0.2ポイント増加し4.8%となった。

営業利益

営業利益は、前連結会計年度から99億円(21.3%)減少し364億円となり、売上収益に対する比率は1.6ポイント減少し5.3%となった。

区別では、機能材料セグメントのセグメント損益は、前連結会計年度から100億円(21.3%)減少し369億円、同区分の売上収益に対する比率は3.2ポイント減少し12.6%となった。先端部品・システムセグメントのセグメント損益は、前連結会計年度から1億円改善し5億円となった。

親会社株主に帰属する当期利益

法人所得税費用は、前連結会計年度から8億円(6.5%)減少し110億円となり、税引前当期利益に対する比率(税負担率)は、3.1ポイント増加し27.3%となった。

これらの結果、親会社株主に帰属する当期利益は、前連結会計年度から76億円(20.9%)減少し287億円となった。

(4) 経営指標について

当社グループは、2018年度を最終年度とする中期経営計画において、営業利益率 11%、ROIC 15%、ROE 12%を目標値としている。

当連結会計年度の利益については、物量増や継続的な原価低減等の増益要因があったものの、スマートフォン向け製品の伸び悩み等による構成の悪化や、再生医療事業の立ち上げなどによる固定費の増加、さらに昨年発売した当社製品における不適切な検査等に関して発生した費用等の減益要因により、営業利益、税引前当期利益、当期利益、親会社株主に帰属する当期利益ともに前連結会計年度から減少した。

この結果、当連結会計年度の営業利益率は5.3%、ROICは8.3%、ROEは7.0%となった。

(5) 経営成績に重要な影響を与える要因について

今後の経済見通しについては、米国の通商政策、英国のEU離脱問題など、世界経済への影響が懸念される不確定要因があり、先行きは不透明な状況にある。

(6) 経営戦略の現状と見通し

当社グループは、不適切な検査等についての反省及び2018中期経営計画の成果・反省を踏まえ、この度2021年度を最終年度とする2021中期経営計画を策定した。2021年度までの3年間で「経営・事業の質を高めるステージ」と位置づけ、「グローバルでのガバナンスの強化」、「高収益基盤の確立」を基本方針として取り組んでいく。

(7) 経営者の問題認識と今後の方針について

当社グループの経営陣は、現在の事業環境及び入手可能な情報に基づき最善の経営方針を立案するよう努めている。上記(5)及び(6)の問題認識の下、下記の方針により事業を遂行することとしている。

グローバルでのガバナンスの強化

高収益基盤の確立

サステナビリティへの取り組み

(経営成績等の状況の概要に係る主要な項目における差異に関する情報)

並行開示

IFRSにより作成した連結財務諸表と、日本基準により作成した場合との主要な差異は以下のとおりである。

(のれんの償却)

日本基準ではのれんはその投資効果の及ぶ期間で償却するが、IFRSにおいては2011年10月1日以降、のれんの償却を行っていない。

このため当連結会計年度の販売費及び一般管理費は日本基準と比較して概ね50億円程度少なくなっているものと見積もられる。

4【経営上の重要な契約等】

(1) 持分取得契約

当社は、2019年1月31日開催の取締役会において、Apceth GmbH & Co. KGとの間で、Apceth Biopharma GmbHの持分100.0%を当社が取得する契約を締結することを決議し、同日付で持分取得契約を締結した。

なお、詳細は、「第5 経理の状況 1 連結財務諸表等 (1) 連結財務諸表 連結財務諸表注記 31 後発事象」に記載のとおりである。

(2) 物流業務委託基本契約

| 契約会社名 | 相手方の名称 | 契約内容 | 契約期間 |
|---------------------------|----------------------------------|----------------------------|---|
| 日立化成テクノサービス(株) (連結子会社) | 日立物流ファインネクスト(株)(日本)及び(株)日立物流(日本) | 物流業務(運送、保管及びそれらに付随する業務)の委託 | 自 2014年10月1日 至 2019年9月30日 (その後は1年ごとの自動更新) |

(3) 技術供与契約

| 契約会社名 | 相手方の名称 | 契約内容 | 契約期間 |
|-----------------|------------------------------|--------------------------------|---|
| 日立化成(株) (当社) | HUNG-A FORMING CO., LTD.(韓国) | インナーパネルを除くバックドアモジュールに関する技術実施許諾 | 自 2013年3月11日 至 2029年9月30日 (その後は1年ごとの自動更新) |

(4) 知的財産権等譲受契約

| 契約会社名 | 相手方の名称 | 契約内容 | 契約期間 |
|-----------------|-------------------|-------------------------------|------|
| 日立化成(株) (当社) | Plant PV Inc.(米国) | 太陽電池用電極ペーストに関する知的財産権及びノウハウの取得 | |

(5) エンジニアリングサービス契約

| 契約会社名 | 相手方の名称 | 契約内容 | 契約期間 |
|-----------------|------------------------------|------------------------------|---------------------------------------|
| 日立化成(株) (当社) | Decoster Industries Inc.(米国) | 樹脂リフトゲイトドアに関するエンジニアリングサービス契約 | 自 2012年12月6日 至 契約製品を使用する対象車種の生産終了時 |

(6) ブランド価値使用契約

| 契約会社名 | 相手方の名称 | 契約内容 | 契約期間 |
|-----------------|-------------------|-------------------------------------|--|
| 日立化成(株) (当社) | (株)日立製作所(親会社(日本)) | 日立ブランドに関する使用权の取得(当社グループ会社への再使用許諾権付) | 自 2010年4月1日 至 2015年3月31日 (その後は1年ごとの自動更新) |

5【研究開発活動】

当社グループの研究開発は、技術革新に対応した新製品の創出と新規市場の開拓等を目的として、当社の次世代事業のコア技術となる「基盤技術開発」を担う部門と全ての事業部門の「新製品開発」に注力する部門が、当社グループ会社の研究開発部門との密接な連携の下に進めている。なお、Hitachi Chemical Company America, Ltd. は、バイオテクノロジーに関する研究を行っている。また、日立化成 - 上海交通大学研究開発センターでは、合成技術を活用して機能材料に関する研究を行っている。

当連結会計年度の研究開発費は326億円である。

当連結会計年度におけるセグメント別の研究成果及び研究開発費は次のとおりである。

機能材料

当セグメントの主要製品である電子材料、無機材料、樹脂材料、配線板材料に関する研究開発を進めている。一例としては、半導体デバイスの微細な回路形成を実現する半導体回路平坦化用研磨材料、高解像度ディスプレイ用量子ドットフィルム等を開発している。当セグメントの研究開発費は218億円である。

先端部品・システム

当セグメントの主要製品である自動車部品、蓄電デバイス・システム、電子部品等に関する研究開発を進めている。一例としては、銅含有量を極めて抑えたディスクブレーキパッド等を開発している。当セグメントの研究開発費は108億円である。

第3【設備の状況】

1【設備投資等の概要】

主として次世代新製品の開発設備の導入、需要の拡大が見込まれる製品の生産能力の積極的な増強のほか、顧客のニーズによりタイムリーに対応するための評価設備の導入を行うなど、総額525億円の設備投資を実施した。

機能材料では、国内における半導体実装材料・プロセスの研究開発設備導入、台湾における半導体回路平坦化用研磨材料の生産能力増強、マレーシアにおける感光性フィルムを用いて形成された顧客製品の評価設備導入等、総額205億円の設備投資を実施した。

先端部品・システムでは、ベトナム社会主義共和国における産業用電池の生産能力増強等、総額320億円の設備投資を実施した。

また、当連結会計年度において重要な設備の除却、売却等はない。

2【主要な設備の状況】

主要な設備は以下のとおりである。金額には消費税及び地方消費税は含まれていない。

(1) 提出会社

2019年3月31日現在

| 事業所名 (所在地) | 報告セグメント | 設備の内容 | 帳簿価額 | | | | | 従業員数 (人) |
|-------------------|--------------------|-----------------|----------------------|----------------------|-----------------------------------|----------------|-------------|-------------|
| | | | 土地 (百万円) (面積㎡) | 建物及び 構築物 (百万円) | 機械装置、 運搬具及び 工具器具備品 (百万円) | 建設仮勘定 (百万円) | 合計 (百万円) | |
| 山崎事業所 (茨城県日立市) | 機能材料、先端部 品・システム | 半導体用材料 製造設備他 | 892 (453,283) | 11,086 | 10,684 | 1,074 | 23,736 | 1,001 |
| 下館事業所 (茨城県筑西市) | 機能材料、先端部 品・システム | 配線板用材料 製造設備他 | 4,535 (677,404) | 7,590 | 10,120 | 270 | 22,515 | 1,633 |
| 松戸事業所 (千葉県松戸市) | 先端部品・システ ム | 粉末冶金製品 製造設備他 | 1,895 (158,314) | 2,399 | 6,065 | 898 | 11,257 | 724 |
| 五井事業所 (千葉県市原市) | 機能材料 | 半導体用材料 製造設備他 | 2,175 (304,193) | 3,513 | 4,337 | 118 | 10,143 | 511 |
| 埼玉事業所 (埼玉県深谷市) | 先端部品・システ ム | 蓄電池製造設備他 | 385 (123,530) | 1,546 | 2,193 | 430 | 4,554 | 386 |
| 名張事業所 (三重県名張市) | 先端部品・システ ム | 蓄電池製造設備他 | 321 (108,978) | 1,179 | 2,501 | 25 | 4,026 | 351 |
| 彦根事業所 (滋賀県彦根市) | 機能材料、先端部 品・システム | 樹脂製品 製造設備他 | 342 (83,168) | 1,140 | 1,888 | 50 | 3,420 | 261 |

(2) 国内子会社

2019年3月31日現在

| 会社名 | 事業所名 (所在地) | 報告 セグメント | 設備の内容 | 帳簿価額 | | | | | 従業員数 (人) |
|---------------------------------|-----------------------|---------------|------------------------|----------------------|----------------------|-----------------------------------|----------------|-------------|-------------|
| | | | | 土地 (百万円) (面積㎡) | 建物及び 構築物 (百万円) | 機械装置、 運搬具及び 工具器具備品 (百万円) | 建設仮勘定 (百万円) | 合計 (百万円) | |
| 日本ブレー キ工業(株) | 本社・工場 (茨城県筑西 市) | 先端部品・ システム | 摩擦材 製造設備他 | - (-) [14,316] | 1,202 | 2,049 | 127 | 3,378 | 147 |
| 日立化成 オートモ ティブプロ ダクツ(株) | 本社・工場 (福岡県田川 市) | 先端部品・ システム | 自動車用樹 脂成形品製 造設備他 | 223 (114,196) | 800 | 2,313 | 57 | 3,393 | 265 |

(注) 日本ブレーキ工業(株)は当社下館事業所より土地を賃借しており、その面積は[]で外書きしている。

(3) 在外子会社

2019年3月31日現在

| 会社名 | 事業所名 (所在地) | 報告 セグメント | 設備の内容 | 帳簿価額 | | | | | 従業員数 (人) |
|---|----------------------|---------------|------------------------------|------------------------------|----------------------|-----------------------------------|----------------|-------------|-------------|
| | | | | 土地 (百万円) (面積㎡) | 建物及び 構築物 (百万円) | 機械装置、 運搬具及び 工具器具備品 (百万円) | 建設仮勘定 (百万円) | 合計 (百万円) | |
| 日立化成工業 (蘇州)有限公司 | 本社・工場 (中国) | 機能材料 | 配線板用感 光性フィル ム製造設備 他 | - (-) [65,063] | 2,324 | 3,830 | 79 | 6,233 | 535 |
| 日立化成工業 (南通)化工有 限公司 | 本社・工場 (中国) | 機能材料 | 機能性樹脂 材料製造設 備他 | - (-) [100,004] | 1,576 | 2,230 | 153 | 3,959 | 155 |
| 日立化成能 源科技有限 公司 | 本社・工場 (台湾) | 先端部品・ システム | 鉛蓄電池 製造設備他 | 1,039 (60,390) | 765 | 2,652 | 938 | 5,394 | 696 |
| Hitachi Chemical (Johor) Sdn. Bhd. | 本社・工場 (マレーシ ア) | 機能材料 | 配線板用感 光性フィル ム製造設備 他 | - (-) [120,137] | 1,693 | 2,385 | 156 | 4,234 | 337 |
| Hitachi Chemical Asia (Thailand) Co., Ltd. | 本社・工場 (タイ) | 先端部品・ システム | 粉末冶金製 品製造設備 他 | 838 (179,282) [22,700] | 2,038 | 4,739 | 393 | 8,008 | 1,291 |
| Hitachi Chemical Automotive Products (Thailand) Company Limited | 本社・工場 (タイ) | 先端部品・ システム | 自動車用樹 脂成形品製 造設備他 | 788 (110,959) | 1,457 | 3,486 | 874 | 6,605 | 593 |
| Hitachi Chemical Storage Battery (Thailand) Public Company Limited | 本社・工場 (タイ) | 先端部品・ システム | 鉛蓄電池 製造設備他 | 702 (147,830) | 787 | 1,232 | 515 | 3,236 | 1,009 |
| Hitachi Powdered Metals (USA), Inc. | 本社・工場 (米国) | 先端部品・ システム | 粉末冶金製 品製造設備 他 | 8 (121,406) | 1,466 | 3,935 | 781 | 6,190 | 253 |
| ISOLITE GmbH | 本社・工場 (ドイツ) | 先端部品・ システム | 断熱部品 製造設備他 | - (-) [66,046] | 1,139 | 4,237 | 274 | 5,650 | 254 |
| FIAMM Energy Technology S.p.A. | 本社・工場 (イタリア) | 先端部品・ システム | 鉛蓄電池 製造設備他 | 1,377 (211,924) | 3,908 | 4,435 | 235 | 9,955 | 892 |

(注) 日立化成工業(蘇州)有限公司、日立化成工業(南通)化工有限公司、Hitachi Chemical (Johor) Sdn. Bhd.、Hitachi Chemical Asia (Thailand) Co., Ltd.、ISOLITE GmbHは土地を賃借しており、その面積は[]で外書きしている。

3【設備の新設、除却等の計画】

当社グループの設備投資計画については、市場動向、事業構造、投資効率等を総合的に勘案のうえ策定している。
また、各子会社の重要な設備投資計画については当社に報告されている。
なお、当連結会計年度末現在における重要な設備の新設、改修の計画はない。

第4【提出会社の状況】

1【株式等の状況】

(1)【株式の総数等】

【株式の総数】

| 種類 | 発行可能株式総数(株) |
|------|-------------|
| 普通株式 | 800,000,000 |
| 計 | 800,000,000 |

【発行済株式】

| 種類 | 事業年度末現在発行数(株) (2019年3月31日) | 提出日現在発行数(株) (2019年6月21日) | 上場金融商品取引所 名又は登録認可金融 商品取引業協会名 | 内容 |
|------|-------------------------------|-----------------------------|------------------------------------|---|
| 普通株式 | 208,364,913 | 208,364,913 | 東京証券取引所 市場第一部 | 権利内容に何ら限定 のない当社における 標準となる株式であ り、単元株式数は 100株である。 |
| 計 | 208,364,913 | 208,364,913 | | |

(2)【新株予約権等の状況】

【ストックオプション制度の内容】

該当事項なし

【ライツプランの内容】

該当事項なし

【その他の新株予約権等の状況】

該当事項なし

(3)【行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等】

該当事項なし

(4)【発行済株式総数、資本金等の推移】

| 年月日 | 発行済株式 総数増減数 (株) | 発行済株式 総数残高 (株) | 資本金増減額 (千円) | 資本金残高 (千円) | 資本準備金 増減額 (千円) | 資本準備金 残高 (千円) |
|---------------------------------------|-----------------------|----------------------|----------------|---------------|----------------------|---------------------|
| 第66期 (自 2014年4月1日 至 2015年3月31日) | | 208,364,913 | | 15,454,363 | | 32,861,522 |
| 第67期 (自 2015年4月1日 至 2016年3月31日) | | 208,364,913 | | 15,454,363 | | 32,861,522 |
| 第68期 (自 2016年4月1日 至 2017年3月31日) | | 208,364,913 | | 15,454,363 | | 32,861,522 |
| 第69期 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日) | | 208,364,913 | | 15,454,363 | | 32,861,522 |
| 第70期 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日) | | 208,364,913 | | 15,454,363 | | 32,861,522 |

(5)【所有者別状況】

2019年3月31日現在

| 区分 | 株式の状況(1単元の株式数 100株) | | | | | | | 単元未満 株式の状況 (株) | |
|-----------------|---------------------|---------|--------------|------------|---------|-------|-----------|----------------------|---------|
| | 政府及び 地方公共 団体 | 金融機関 | 金融商品 取引業者 | その他の 法人 | 外国法人等 | | 個人 その他 | | 計 |
| | | | | | 個人以外 | 個人 | | | |
| 株主数 (人) | | 50 | 40 | 237 | 489 | 12 | 22,134 | 22,962 | |
| 所有株式数 (単元) | | 265,313 | 49,385 | 1,087,672 | 501,935 | 68 | 177,224 | 2,081,597 | 205,213 |
| 所有株式数 の割合(%) | | 12.746 | 2.372 | 52.252 | 24.113 | 0.003 | 8.514 | 100.00 | |

(注) 自己株式143,345株は、「個人その他」に1,433単元及び「単元未満株式の状況」に45株含めて記載している。

(6)【大株主の状況】

2019年3月31日現在

| 氏名又は名称 | 住所 | 所有株式数 (千株) | 発行済株式 (自己株式を除く。)の総数に 対する所有株式 数の割合(%) |
|---|--|---------------|---|
| (株)日立製作所 | 東京都千代田区丸の内一丁目6番6号 | 106,699 | 51.24 |
| ゴールドマン・サックス・アンド・カンパニー レギュラーアカウント (常任代理人 ゴールドマン・サックス証券(株)) | 200 WEST STREET NEW YORK, NY, USA (東京都港区六本木六丁目10番1号) | 8,863 | 4.26 |
| 日本トラスティ・サービス信託銀行(株)(信託口) | 東京都中央区晴海一丁目8番11号 | 7,566 | 3.63 |
| ステート ストリート バンク アンド トラスト カンパニー 510312 (常任代理人 (株)みずほ銀行決済営業部) | P.O. BOX 351 BOSTON MASSACHUSETTS 02101 U.S.A. (東京都港区港南二丁目15番1号) | 3,539 | 1.70 |
| ステート ストリート バンク アンド トラスト カンパニー 510311 (常任代理人 (株)みずほ銀行決済営業部) | P.O. BOX 351 BOSTON MASSACHUSETTS 02101 U.S.A. (東京都港区港南二丁目15番1号) | 3,398 | 1.63 |
| 日本マスタートラスト信託銀行(株)(信託口) | 東京都港区浜松町二丁目11番3号 | 3,324 | 1.60 |
| 日立化成グループ持株会 | 東京都千代田区丸の内一丁目9番2号 | 2,255 | 1.08 |
| ゴールドマンサックスインターナショナル (常任代理人 ゴールドマン・サックス証券(株)) | 133 FLEET STREET LONDON EC4A 2BB U.K (東京都港区六本木六丁目10番1号) | 2,189 | 1.05 |
| 日本生命保険(相) (常任代理人 日本マスタートラスト信託銀行(株)) | 東京都千代田区丸の内一丁目6番6号 (東京都港区浜松町二丁目11番3号) | 2,093 | 1.01 |
| 日本トラスティ・サービス信託銀行(株)(信託口7) | 東京都中央区晴海一丁目8番11号 | 1,919 | 0.92 |
| 計 | | 141,850 | 68.12 |

(7)【議決権の状況】
【発行済株式】

2019年3月31日現在

| 区分 | 株式数(株) | 議決権の数(個) | 内容 |
|----------------|------------------|-----------|-----------|
| 無議決権株式 | | | |
| 議決権制限株式(自己株式等) | | | - |
| 議決権制限株式(その他) | | | |
| 完全議決権株式(自己株式等) | 普通株式 143,300 | | 単元株式数100株 |
| 完全議決権株式(その他) | 普通株式 208,016,400 | 2,080,164 | 単元株式数100株 |
| 単元未満株式 | 普通株式 205,213 | | |
| 発行済株式総数 | 208,364,913 | | |
| 総株主の議決権 | | 2,080,164 | |

【自己株式等】

2019年3月31日現在

| 所有者の氏名 又は名称 | 所有者の住所 | 自己名義 所有株式数 (株) | 他人名義 所有株式数 (株) | 所有株式数 の合計 (株) | 発行済株式 総数に対する 所有株式数 の割合(%) |
|----------------|-------------------|----------------------|----------------------|---------------------|------------------------------------|
| 日立化成(株) | 東京都千代田区丸の内一丁目9番2号 | 143,300 | | 143,300 | 0.07 |
| 計 | | 143,300 | | 143,300 | 0.07 |

2【自己株式の取得等の状況】

【株式の種類等】 会社法第155条第7号に該当する普通株式の取得

(1)【株主総会決議による取得の状況】

該当事項なし

(2)【取締役会決議による取得の状況】

該当事項なし

(3)【株主総会決議又は取締役会決議に基づかないものの内容】

| 区分 | 株式数(株) | 価額の総額(円) |
|-----------------|--------|-----------|
| 当事業年度における取得自己株式 | 2,527 | 5,234,742 |
| 当期間における取得自己株式 | 783 | 2,184,995 |

(注) 当期間における取得自己株式には、2019年6月1日から本有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取りによる株式は含まれていない。

(4)【取得自己株式の処理状況及び保有状況】

| 区分 | 当事業年度 | | 当期間 | |
|---------------------------------|---------|----------------|---------|----------------|
| | 株式数(株) | 処分価額の総額 (円) | 株式数(株) | 処分価額の総額 (円) |
| 引き受ける者の募集を行った 取得自己株式 | | | | |
| 消却の処分を行った取得自己株式 | | | | |
| 合併、株式交換、会社分割に係る 移転を行った取得自己株式 | | | | |
| その他 (単元未満株式の売渡請求による売渡) | 90 | 152,526 | | |
| 保有自己株式数 | 143,345 | | 144,128 | |

- (注) 1. 当期間における処理自己株式には、2019年6月1日から本有価証券報告書提出日までの単元未満株式の売渡による株式は含まれていない。
2. 当期間における保有自己株式数には、2019年6月1日から本有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取り及び売渡による株式は含まれていない。

3【配当政策】

当社は、経営環境、業績、将来の事業展開、配当性向、並びに適切な内部留保額等を総合的に勘案し、株主への利益配分を決定する。

株主への利益配分については、配当の安定的な成長を基本とする。内部留保資金については、高成長が見込める高付加価値新製品の研究開発及びグローバル供給体制の構築に加え、事業の運営基盤強化及び成長拡大に投資するとともに、強靱な財務体質の確立に向け有効に活用する。

自己株式の取得については、配当を補完する株主への利益還元策として、配当方針と整合的な範囲において機動的に実施する。

当社は、「毎年3月末日及び9月末日の最終の株主名簿に記載又は記録された株主又は登録株式質権者に対して剰余金の配当をすることができる」また、「基準日を定めて剰余金の配当をすることができる」旨を定款に定めており、中間配当と期末配当の年2回の剰余金の配当を行うことを基本方針としている。

これらの剰余金の配当の決定機関は、取締役会である。

当事業年度の剰余金の配当については、上記方針に基づき下記のとおり決定し、この結果、当事業年度の配当性向は56.0%となった。

| 決議年月日 | 配当金の総額(百万円) | 1株当たり配当額(円) |
|-----------------------|-------------|-------------|
| 2018年10月22日 取締役会決議 | 6,247 | 30 |
| 2019年5月31日 取締役会決議 | 6,247 | 30 |

4【コーポレート・ガバナンスの状況等】

(1)【コーポレート・ガバナンスの概要】

コーポレート・ガバナンスに関する基本的な考え方

当社は、コーポレートガバナンスの基本方針として「日立化成コーポレートガバナンス・ガイドライン」を定め、株主をはじめとするあらゆるステークホルダーの利益に資する経営を実践する。

同ガイドラインの下、業務執行機能と監督機能とを分離した「指名委員会等設置会社」の特長を最大限に生かし、執行役社長を中心とする業務執行体制により機動性、専門性の高い意思決定に基づく経営を実行するとともに、取締役会は独立性と客観性を兼ね備えた経営監督機能を発揮する。

企業統治の体制

イ．企業統治の体制の概要

(イ) 会社の機関の内容

a．当社は2003年6月に「委員会等設置会社(現 指名委員会等設置会社)」に移行した。その理由は、業務執行の決定権限を取締役会から執行役に大幅に委譲することにより業務執行機能と監督機能を分離し、迅速で責任が明確な経営を可能にするとともに、取締役会の傘下に社外取締役を中心とした指名・報酬・監査の3委員会を設置することにより取締役会の監督機能を強化して、客観性と透明性の高い経営を実現するためである。

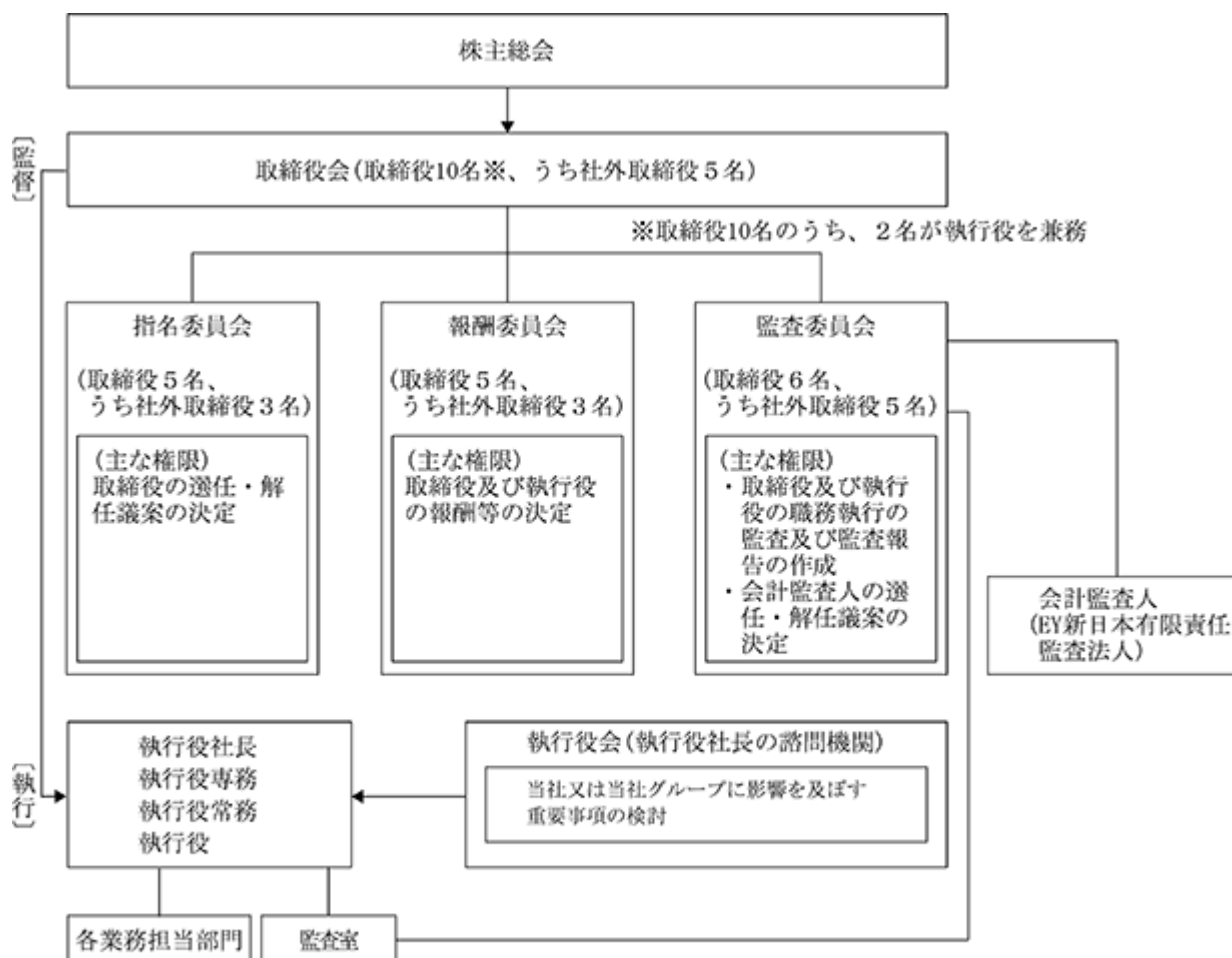
取締役会の構成員は、田中一行、ジョージ・オルコット、猿丸雅之、新宅祐太郎、リチャード・ダイク、松田千恵子、北松義仁、丸山寿、森田守及び山下祐行の10名で、うちジョージ・オルコット、猿丸雅之、新宅祐太郎、リチャード・ダイク及び松田千恵子の5名が社外取締役であり、丸山寿及び山下祐行の2名が執行役を兼務している。

指名委員会の構成員は、委員長 田中一行、委員 猿丸雅之、委員 新宅祐太郎、委員 松田千恵子及び委員 森田守の5名である。

報酬委員会の構成員は、委員長 丸山寿、委員 猿丸雅之、委員 新宅祐太郎、委員 松田千恵子及び委員 森田守の5名である。

監査委員会の構成員は、委員長 松田千恵子、委員 ジョージ・オルコット、委員 猿丸雅之、委員 新宅祐太郎、委員 リチャード・ダイク及び委員 北松義仁の6名である。

当社の業務執行・経営の監督の仕組み(各委員会の概要を含む。)は、次のとおりである。



- b. 当社は、当社の経営実態に詳しく、当社の重点課題に関連する分野に精通している経営者、専門家等を社外取締役として選任している。社外取締役のためのみの専従スタッフは置かないが、取締役会及び各委員会が円滑に運営されるよう、取締役を補佐する専従スタッフを置いている。なお、社外取締役をサポートする目的で、取締役会の決議により監査委員会の職務を補助すべき取締役を選定できていることとしている。また、取締役会の開催に先立ち、その資料を7日前を目処として事前配布するとともに、関係する取締役及び執行役が適宜事前説明を行っている。
- c. 当社は、業務執行機能と監督機能の分離を一層確実なものにするため、取締役会議長を務める取締役会長を執行役非兼務とするとともに、執行役兼務取締役の数を必要最小限にとどめている。また、監査委員会の職務を補助すべき取締役も執行役非兼務とする。
- d. 当社グループ会社に対し取締役及び監査役を当社から派遣することにより、グループとして一体感のある経営を実行するとともに、グループ会社への監督機能の充実を図っている。

ロ. 企業統治の体制を採用する理由

- (イ) 当社は、健全で透明性が高く、市場の変化に即応できる経営体制の確立を経営上の最優先課題の一つに掲げており、その一環として「委員会等設置会社(現 指名委員会等設置会社)」に移行することにより、業務執行機能と監督機能を分離するとともに、取締役会の監督機能を強化して、客観性と透明性の高い経営の実現が可能となると考えたためである。これにより執行役の意思決定により執行できる業務範囲が拡大し、業務執行の迅速化が実現している。
- (ロ) 会社が任意に設置する機関としては、執行役社長の業務執行の決定のための諮問機関として、原則として毎月2回開催する執行役会を置いている。この制度を採用した理由は、当社又は当社グループに影響を及ぼす重要事項につき、執行役社長が正確かつ迅速な判断を下すためには、執行役全員の知見を集約し、議論することが必要であると判断したためであり、現在執行役会は所期の目的を十分に果たしている。

ハ. 内部統制システムの整備の状況

(イ) 整備状況

会社法の定めにもとづき、「執行役の職務の執行が法令及び定款に適合することを確保するための体制その他当社の業務並びに当社及びその子会社から成る企業集団の業務の適正を確保するために必要な当社における体制」を取締役会で決定し、これを整備している。

その具体的な内容は、以下のとおりである。

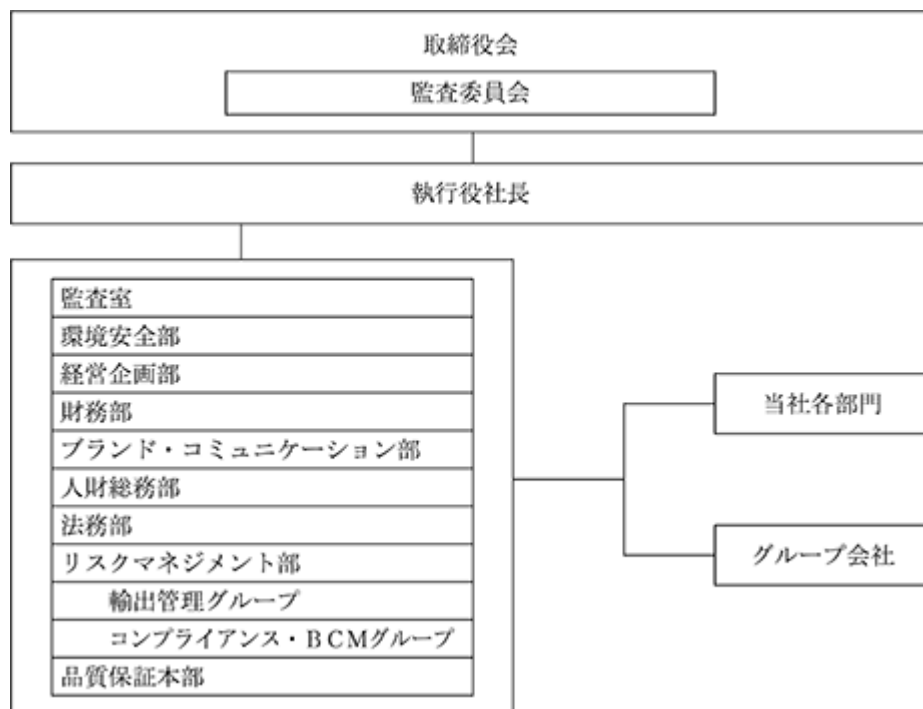
- a. 当社グループにおける体制の整備に関する基本方針
日立化成グループの業務の適正を確保するため、当社における体制を基本として、子会社に対して、各社の規模等に応じた体制の整備を行わせる。また、子会社における体制の整備の状況を確認するため、子会社への取締役及び監査役の派遣並びに子会社の各部署への定期的な監査等を行う。
- b. 当社の執行役の職務の執行に係る情報の保存及び管理に関する体制
 - ・執行役の職務の執行に係る情報の保存及び管理については、「文書規則」、「文書保存廃棄規則」、「機密情報管理規則」等の関連規則に定める。
 - ・監査委員会は、必要ある都度、上記の情報の開示・提供を受けることができる。
- c. 当社及び子会社の損失の危険の管理に関する規程その他の体制
 - ・「日立化成リスク対策活動実施要領」により、事業活動を妨げる要因となるリスクについて、カテゴリーごとにその未然防止と緊急時の適切な対応について定めるとともに、製品事故、コンプライアンス、環境、災害、情報セキュリティ、財務等に係る個別のリスク管理については、「製品事故管理規程」、「グループ環境・CSR会議規則」、「安全保障輸出管理規則」、「情報セキュリティマネジメント総則」等の関連規則に定めるとともに、子会社に対しても、各社の規模等に応じて当社に準じた規程の整備を行わせる。
 - ・事業活動に伴うリスクの未然防止と緊急時の対応については、関係部門が必要に応じ研修、マニュアルの作成、配布等により教育を行うとともに、子会社に対しても、各社の規模等に応じて当社に準じた教育を行わせる。
 - ・万一、災害等突発性のリスクが現実化した場合、「日立化成リスク対策活動実施要領」に基づき、リスク対策本部の設置、アドバイザーとしての専門家の招聘等により迅速に対応するとともに、子会社に対しても、各社の規模等に応じて当社に準じた体制の整備を行わせる。
- d. 当社の執行役並びに子会社の取締役の職務の執行が効率的に行われることを確保するための体制
 - ・執行役の職務に係る重要事項を効率的かつ十分な検討の下に決定するため、「執行役会規則」に基づき執行役全員により構成される執行役会を設ける。
 - ・「執行役の分掌業務規則」により各執行役の分掌を定めるとともに、各会社規則により個別の業務執行方法等を定める。
 - ・事業目標の明確化とその達成を図るため、全社及び事業部門並びに子会社の中長期計画、予算及び業績管理を定期的実施する。なお、当該管理に当たっては、ITを積極的に活用したシステムを用いる。

- ・ 当社の執行役及び子会社の取締役の職務の執行が効率的に行われているかを検証するため、内部監査に関する規則を定め、当社及び子会社の各部署を対象に監査室及び関係部門による内部監査を行う。
- ・ 子会社に取締役及び監査役を派遣する。
- e. 当社の執行役及び使用人並びに子会社の取締役及び使用人の職務の執行が法令及び定款に適合することを確保するための体制
 - ・ 当社の執行役及び使用人並びに子会社の取締役及び使用人が法令及び定款に適合する行動をとるための規範として、当社において「日立化成グループ行動規範」を制定し、子会社においても当社に準じた規程の整備を行わせる。
 - ・ 市民社会の秩序や安全に脅威を与える反社会的勢力による経営活動への関与やこれによる被害を防止するため、反社会的勢力との直接又は間接の取引を行わないことはもとより、接触や要求についてもこれを拒否する。また、こうした方針を遵守するため、必要な会社規則を制定するとともに、対応統括部署や不当要求防止責任者を設置するなど、反社会的勢力の排除のための仕組みを構築する。
 - ・ 法令及び企業倫理の遵守に関する枠組みとして「日立化成グループ・グローバル・コンプライアンス・プログラム総則」を定めるとともに、これを具体化させるための社内規則(「贈収賄防止に関する規則」、「競争法遵守に関する規則」、「インサイダー情報管理及びインサイダー取引防止に関する規則」、「反社会的取引の防止に関する規則」、「機密情報管理規則」、「個人情報保護方針」等)や各種業務規程を整備し、社内情報共有システムを用いて規則の周知徹底を図る。また、子会社においても当社に準じた規程及び体制の整備を行わせる。
 - ・ コンプライアンスに係る教育、指導及び監査を徹底するため、コンプライアンス担当部門を設置する。
 - ・ 日立化成グループの品質保証体制を強化するため、当社及び子会社の各品質保証部門の全体統制を行う品質保証担当部門を本社に設置する。
 - ・ 当社及び子会社の使用人が利用できるコンプライアンス、企業倫理上の問題に関する内部通報制度を設け、通報を受けた場合、コンプライアンス担当部門、関係部門及び弁護士が速やかにその内容に関する事実調査を行う。
 - ・ 当社の執行役及び使用人並びに子会社の取締役及び使用人の職務の執行が法令及び定款に適合していることを検証するため、監査室等による内部監査を行い、その結果を定期的に監査委員会に報告する。なお、必要ある場合、監査委員会より監査室等に対し指示を行う。
- f. 子会社の取締役の職務の執行に係る事項の当社への報告に関する体制
 - 子会社に係る業務上の重要事項について、当社執行役会での審議の対象とする。
- g. その他の当社並びにその親会社及び子会社から成る企業集団における業務の適正を確保するための体制
 - ・ 親会社の提示する業務運営に係る価値観、行動基準等を当社及び子会社まで含む企業集団全体で共有する。
 - ・ 当社及び子会社から成る当社グループの企業価値最大化を目的として、グループ連結経営の基本方針を定める。
 - ・ 親会社と親会社以外の株主の利益が実質的に相反するおそれのある親会社との取引その他の施策を実施する場合、取締役会の決議を得る。当該決議の客観的公正性を担保するため、当社取締役会に少なくとも2名以上の親会社から独立した社外取締役を置く。
 - ・ 当社が親会社又は子会社と行う取引については、価格その他の条件面において、特に公正になされるよう留意する。
 - ・ 輸出管理、環境安全管理、営業秘密・個人情報の管理等重要な業務に関しては親会社の定める規則を参考に、当社及び子会社がそれぞれ規則を制定し運用する。また、これら規則の遵守につき必要な教育を実施する。
 - ・ 当社の中長期計画及び予算を作成し、その達成状況及び業績を親会社に適切に伝達するとともに、これらの事項に関し子会社から報告を受ける。
 - ・ 財務報告の信頼性確保、業務の効率化の推進及び業務の法令・定款適合性確保等の目的で、親会社、当社及び子会社間において我が国の財務報告に係る内部統制の評価及び監査の基準等に準拠した内部統制システムを整備、運用し、その有効性の評価結果を外部に開示する。
 - ・ 定期的に親会社の監査部門による監査を受査するとともに、当社監査委員会、監査室及び関係部門も当社及び子会社に対する定期的な監査を実施する。
 - ・ 当社関係部門がその役割に応じて子会社の経営指導を行い、当社諸施策の周知、情報提供、業務上の助言等を行う。
 - ・ 執行役及び使用人の職務の執行が法令及び定款に適合することの監視の目的で親会社、当社及び当社子会社の使用人が親会社の取締役、担当部門及び弁護士に通報できる制度と、当社及び当社子会社の使用人が当社担当部門及び弁護士に通報できる制度とを設ける。また、当社子会社には内部通報制度

を設けるよう指導する。

二．リスク管理体制の整備の状況

(イ) 当社及び当社グループのリスク管理体制は次のとおりである。



(ロ) 当社は、「日立化成リスク対策活動実施要領」を作成し、この中で、対象となるリスクの内容、全役員・従業員のリスク対策に関する役割、有事に設置するリスク対策本部のメンバー及び活動内容並びにリスク発生時の連絡基準等を定め、万一の事態に備えている。一方、リスク管理体制の状況を確認する目的で、当社各部門及びグループ会社に対し、監査室、リスクマネジメント部が関連部門とともに必要に応じて監査を行い、リスク発生の未然防止と発生した場合の対策について確認を行っている。また、各部門に自己点検の実施も義務付けている。

(ハ) 当社は、監査室、環境安全部、経営企画部、財務部、ブランド・コミュニケーション部、人財総務部、法務部、リスクマネジメント部の下部組織である輸出管理グループ及びコンプライアンス・BCMグループ並びに品質保証本部を設置し、当社及びグループ会社のリスク管理を行っている。リスク管理全体の取纏めはリスクマネジメント部が担当している。このほか、各部門・グループ会社にリスク対策責任者を置き、この責任者が監査室及びリスクマネジメント部と連携してリスク対策に当たっている。

ホ．責任限定契約の内容の概要

当社と取締役(業務執行取締役等であるものを除く。)は、当社定款及び会社法第427条第1項の規定に基づき、会社法第423条第1項の規定による責任を限定する契約を締結している。

当該契約に基づく責任の限度額は、1,200万円又は会社法第425条第1項に定める最低責任限度額のいずれか高い額としている。

ヘ．取締役及び執行役の責任免除

当社は、「会社法第426条第1項の規定により、取締役会の決議を以て会社法第423条第1項の規定による取締役(取締役であった者を含む。)の責任を法令の限度において免除することができる」旨及び「会社法第426条第1項の規定により、取締役会の決議を以て会社法第423条第1項の規定による執行役(執行役であった者を含む。)の責任を法令の限度において免除することができる」旨を定款に定めている。これは、取締役及び執行役が職務を遂行するに当たり、その能力を十分に発揮して、期待される役割を果たしうる環境を整備することを目的とする。

ト．取締役の定数

「取締役は、15名以内とする」旨を定款に定めている。

チ．取締役の選任の決議要件

当社は取締役の選任決議について、「議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の過半数を以て行う」旨及び「累積投票によらない」旨を定款に定めている。

リ．剰余金の配当等の決定機関

当社は、剰余金の配当等を「会社法第459条第1項各号に掲げる事項については、法令に別段の定めのある場合を除き、株主総会の決議によらず取締役会の決議により定める」旨を定款に定めている。これは、剰余金の配当等を取締役会の権限とすることにより、株主への機動的な利益還元を行うことを目的とする。

ヌ．株主総会の特別決議要件

当社は、「会社法第309条第2項に定める株主総会の決議は、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の3分の2以上に当る多数を以て行う」旨を定款に定めている。これは、株主総会における特別決議の定足数を緩和することにより、株主総会の円滑な運営を行うこと

を目的とする。

(2) 【役員の状況】

役員一覧

男性22名 女性2名（役員のうち女性の比率8%）

(1) 取締役

| 役職名 | 氏名 | 生年月日 | 略歴 | 任期 | 所有株式数 (千株) |
|----------------|-------|----------------|--|-------|---------------|
| 取締役会長 指名委員長 | 田中 一行 | 1953年4月 29日 | 1977年4月 当社入社 2005年4月 当社執行役(2006年3月退任) 2006年4月 (株)日立メディアエレクトロニクス 専務取締役 6月 同社代表取締役 取締役社長(2008年3月退任) 2008年4月 当社執行役常務 2009年4月 当社代表執行役 執行役社長 6月 当社取締役 2016年4月 当社取締役会長(現任) 5月 合成樹脂工業協会会長(2018年5月退任) 6月 (株)日立製作所 取締役 | (注) 2 | 30 |

| 役職名 | 氏名 | 生年月日 | 略歴 | 任期 | 所有 株式数 (千株) |
|-------------|----------------|----------------|--|-------|-------------------|
| 取締役 監査委員 | ジョージ・ オルコット | 1955年 5月 7日 | 1986年7月 S.G. Warburg & Co., Ltd.入社 1991年11月 同社取締役 1993年9月 S.G. Warburg Securities London エクイティーキャピタルマーケッ トグループ エグゼクティブディレ クター 1997年4月 SBC Warburg 東京支店長 1998年4月 長銀UBSプリンソン・アセット・マ ネジメント 副社長 1999年2月 UBSアセットマネジメント(日本)社 長 日本UBSプリンソングループ 社長 2000年6月 UBS Warburg 東京 マネージング ディレクター エクイティキャピタ ルマーケットグループ担当 2005年3月 ケンブリッジ大学ジャッジ経営大 学院(Judge Business School)FME ティーチング・フェロー 2008年3月 同大学院シニア・フェロー 6月 日本板硝子(株)社外取締役 2010年4月 NKSJホールディングス(株)社外取 締役 9月 東京大学先端科学技術研究セン ター特任教授 2014年4月 慶應義塾大学 商学部特別招聘教授 (現任) 6月 当社社外取締役(現任) (株)デンソー 社外取締役(現任) 2015年6月 第一生命保険(株)(現 第一生命 ホールディングス(株))社外取締役 (現任) 2016年12月 JPMorgan Japanese Investment Trust plc ノン・エグゼクティブ ディレクター(現任) | (注) 2 | 2 |

| 役職名 | 氏名 | 生年月日 | 略歴 | 任期 | 所有株式数 (千株) |
|-----------------------------|-------|----------------|---|------|---------------|
| 取締役 指名委員 監査委員 報酬委員 | 猿丸 雅之 | 1951年6月 26日 | 1975年3月 吉田工業(株)(現 YKK(株))入社 1999年6月 同社常務 ファスニング事業本部 ファスナー事業部 グローバルマー ケティンググループ長 2003年4月 同社上席常務 ファスニング事業本 部ファスナー事業部長 2007年10月 同社上席常務 ファスニング事業本 部長 2008年4月 同社副社長 ファスニング事業本部 長 6月 同社取締役 副社長 ファスニング 事業本部長 2011年6月 同社代表取締役社長 2017年4月 同社代表取締役副会長 6月 当社社外取締役(現任) 2018年6月 YKK(株)代表取締役会長(現任) | (注)2 | 0 |
| 取締役 指名委員 監査委員 報酬委員 | 新宅祐太郎 | 1955年9月 19日 | 1979年4月 東亜燃料工業(株)(現 JXTGエネ ルギー(株))入社 1999年1月 テルモ(株)入社 2005年6月 同社執行役員 2006年6月 同社取締役執行役員 心臓血管グ ループ長 2007年6月 同社取締役上席執行役員 研究開発 センター・知的財産統轄部・法務 室管掌 2009年6月 同社取締役常務執行役員 経営企画 室長、人事部・経理部管掌 2010年6月 同社代表取締役社長(2017年3月退 任) 2017年4月 同社取締役顧問 6月 同社顧問 参天製薬(株)社外取締役(現任) (株)J-オイルミルズ 社外取締役 (現任) 2018年3月 (株)クボタ 社外取締役(現任) 4月 一橋大学大学院経営管理研究科客 員教授 2019年4月 同大学院経営管理研究科特任教授 (現任) 6月 当社社外取締役(現任) | (注)2 | |

| 役職名 | 氏名 | 生年月日 | 略歴 | 任期 | 所有株式数(千株) |
|------------------------------|-----------|-------------|---|------|-----------|
| 取締役 監査委員 | リチャード・ダイク | 1945年4月16日 | 1975年6月 ハーバード大学助教授 1976年9月 米国オハイオ州立大学助教授 12月 米国オハイオ州政府東京駐在事務所長 1978年8月 日本ゼネラルエレクトリック(株)特殊材料事業部北太平洋地域販売部長 1982年12月 テラダイン(株)代表取締役 1988年9月 Teradyne, Inc. 副社長 1999年3月 ティーシーエスジャパン(株)代表取締役(2009年2月退任) 2008年6月 アルファナテクノロジー(株)社外取締役 9月 同社社外取締役 取締役会長 2009年2月 テスト技術研究所(株)代表取締役(現任) 6月 (株)セミコンダクタポータル 社外取締役(現任) 2013年3月 Levitronix Japan(株)代表取締役(2014年7月退任) 6月 日本産業パートナーズ(株)社外取締役(現任) 2016年6月 当社社外取締役(現任) | (注)2 | 1 |
| 取締役 監査委員長 指名委員 報酬委員 | 松田千恵子 | 1964年11月18日 | 1987年4月 (株)日本長期信用銀行入行 1998年10月 ムーディーズジャパン(株)入社 2001年9月 (株)コーポレートディレクション入社 2002年11月 日本CF0協会主任研究委員(現任) 2006年5月 マトリックス(株)代表取締役(2011年3月退任) 10月 ブーズ・アンド・カンパニー(株)入社(2011年3月退職) 2011年4月 首都大学東京 社会科学研究所(現経営学研究科)(大学院)教授(現任) 同大学 都市教養学部(現 経済経営学部)教授(現任) 2012年6月 エステー(株)社外取締役 サトーホールディングス(株)社外監査役 2013年6月 当社社外取締役(現任) 2014年6月 イオンフィナンシャルサービス(株)社外取締役 2015年6月 フォスター電機(株)社外取締役(現任) 2016年3月 キリンホールディングス(株)社外監査役(現任) 6月 サトーホールディングス(株)社外取締役(現任) | (注)2 | |

| 役職名 | 氏名 | 生年月日 | 略歴 | 任期 | 所有株式数 (千株) |
|--------------|-------|----------------|--|-------|---------------|
| 取締役 監査委員 | 北松 義仁 | 1956年10月 8日 | 1980年4月 (株)日立製作所入社 2013年4月 同社執行役常務(財務統括本部長 兼 Smart Transformation Project 強化本部間接業務改革プロジェクト トリーダ)(2015年3月退任) 2015年4月 日立工機(株)(現 工機ホールディ ングス(株))入社 6月 同社執行役専務(コーポレート統括 本部長) 2016年4月 同社代表執行役 執行役副社長 (コーポレート統括本部長 兼 構造 改革推進本部長)(2017年3月退任) 2017年4月 当社囑託 6月 当社取締役(現任) | (注) 2 | |
| 取締役 報酬委員長 | 丸山 寿 | 1961年3月 8日 | 1983年4月 当社入社 2011年4月 当社執行役 2015年4月 当社執行役常務 2016年4月 当社代表執行役 執行役社長(現 任) 6月 当社取締役(現任) 2018年4月 当社CEO(現任) | (注) 2 | 13 |

| 役職名 | 氏名 | 生年月日 | 略歴 | 任期 | 所有株式数(千株) |
|---------------------|-------|----------------|---|-------|-----------|
| 取締役 指名委員 報酬委員 | 森田 守 | 1959年4月 12日 | 1983年4月 (株)日立製作所入社 2013年4月 (株)日立産機システム取締役(現任) 2015年4月 Hitachi Asia Ltd. 取締役(2018年3月退任) 2016年4月 (株)日立総合計画研究所 取締役(現任) (株)日立製作所 執行役常務(戦略企画本部長) 2017年4月 同社執行役常務(戦略企画本部長兼 投融資戦略本部副本部長 兼 未来投資本部副本部長)(現任) 2019年4月 (株)日立インダストリアルプロダクツ 取締役(現任) 6月 当社取締役(現任) | (注) 2 | |
| 取締役 | 山下 祐行 | 1959年8月 12日 | 1982年4月 当社入社 2015年4月 当社執行役 日立化成(中国)投資有限公司 董事長 兼 総経理(2017年3月退任) 2017年4月 当社執行役常務 2019年4月 当社代表執行役 執行役専務 兼 C R O(現任) 6月 当社取締役(現任) | (注) 2 | 4 |
| 計 | | | | | 52 |

- (注) 1. 取締役 ジョージ・オルコット、猿丸雅之、新宅祐太郎、リチャード・ダイク及び松田千恵子の5名は社外取締役である。
2. 「取締役の任期は、選任後1年以内に終了する事業年度のうち最終のものに関する定時株主総会終結の時までとする」旨を定款に定めている。

(2) 執行役

| 役職名 | 氏名 | 生年月日 | 略歴 | 任期 | 所有株式数(千株) |
|---------------------------------------|------|---------------|------------------|-----|-----------|
| 代表執行役 執行役社長 兼 C E O すべての執行業務の総括 | 丸山 寿 | 1961年3月 8日 | 「(1) 取締役」に記載のとおり | (注) | 13 |

| 役職名 | 氏名 | 生年月日 | 略歴 | 任期 | 所有株式数(千株) |
|--|-------|-------------|---|-----|-----------|
| 代表執行役 執行役専務 兼 CRO 情報通信事業(電子部品事業を含む。)及びリスクマネジメントの総括 | 山下 祐行 | 1959年8月12日 | 「(1)取締役」に記載のとおり | (注) | 4 |
| 執行役常務 新事業創出(基盤技術の開発及び知的財産を含む。)の総括 | 片寄 光雄 | 1963年1月16日 | 1987年4月 当社入社 2015年4月 当社執行役 2019年4月 当社執行役常務(現任) | (注) | |
| 執行役常務 兼 CFO 財務及びブランド・コミュニケーションの総括 | 豊嶋 光由 | 1958年10月4日 | 1981年4月 (株)日立製作所入社 2018年3月 当社嘱託 2018年4月 当社執行役常務兼 CFO(現任) | (注) | 3 |
| 執行役常務 エネルギー事業の総括 | 中川 操 | 1959年1月15日 | 1981年4月 当社入社 2010年4月 当社執行役 2016年4月 当社執行役常務(現任) | (注) | 2 |
| 執行役常務 営業の総括 | 藤田 茂 | 1961年11月29日 | 1987年4月 当社入社 2013年4月 Hitachi Chemical Asia-Pacific Pte. Ltd. 代表取締役社長 2017年4月 当社執行役 2019年4月 当社執行役常務(現任) | (注) | |
| 執行役常務 モビリティ事業(樹脂及び蓄電摺動材料事業を含む。)の総括 | 森嶋 浩之 | 1960年12月20日 | 1986年4月 当社入社 2015年4月 当社執行役 2017年4月 当社執行役常務(現任) | (注) | 4 |
| 執行役 エネルギー事業の担当 | 石井 義人 | 1968年1月1日 | 1992年4月 当社入社 2017年4月 (株)日立パワーソリューションズ 代表取締役 取締役社長(2019年3月退任) 2019年4月 当社執行役(現任) | (注) | 3 |
| 執行役 モビリティ事業(樹脂及び蓄電摺動材料事業を含む。)の担当 | 今井 のり | 1972年9月11日 | 1995年4月 当社入社 2019年4月 当社執行役(現任) | (注) | 0 |
| 執行役 モノづくり及び構造改革の総括 | 五箇 栄 | 1959年8月30日 | 1984年4月 当社入社 2017年4月 当社執行役(現任) | (注) | 9 |
| 執行役 環境安全、人事、法務の総括及びリスクマネジメントの担当 | 高松 明彦 | 1963年2月5日 | 1985年4月 当社入社 2019年4月 当社執行役(現任) | (注) | 4 |
| 執行役 中国事業の総括 | 武井 裕之 | 1959年12月11日 | 1982年4月 当社入社 2014年4月 日立化成商事(株)代表取締役社長 2015年4月 当社執行役(現任) 2017年4月 日立化成(中国)投資有限公司 董事長 兼 総経理(現任) 2017年4月 日立化成工業(上海)有限公司 董事長 兼 総経理(現任) | (注) | 4 |

| 役職名 | 氏名 | 生年月日 | 略歴 | 任期 | 所有株式数(千株) |
|------------------------------|-------|-----------------|--|-----|-----------|
| 執行役 情報通信事業(電子部品事業を含む。)の担当 | 埜 明德 | 1960年 8月 13日 | 1983年 4月 当社入社 2018年 4月 当社執行役(現任) | (注) | 2 |
| 執行役 兼 C Q O 品質保証の総括 | 平野 卓也 | 1963年 5月 8日 | 1989年 1月 当社入社 2012年 4月 日立化成工業(蘇州)有限公司 董事長 兼 総 経理 2017年 4月 当社執行役(現任) 2018年12月 当社C Q O(現任) | (注) | |
| 執行役 経営企画の総括 | 吉田 寛 | 1959年 4月 3日 | 1983年 4月 当社入社 2016年 4月 当社執行役(現任) | (注) | 2 |
| 執行役 ライフサイエンス事業の総括 | 吉田 誠人 | 1961年 5月 9日 | 1987年 4月 当社入社 2015年 4月 当社執行役(現任) 2018年 1月 協和メデックス(株)代 表取締役 取締役会長 (現任) | (注) | 1 |
| 計 | | | | | 55 |

(注) 「執行役の任期は、選任後1年以内に終了する事業年度の末日までとする」旨を定款に定めている。

社外取締役

イ．社外取締役の員数及び社外取締役と当社との人的関係、資本的関係又は取引関係その他の利害関係
 当社の社外取締役は5名である。

各社外取締役との間に、後述．ロ(ロ)で独立性の判断として記載した事項に該当する人的関係、取引関係等はなく、また、その他特別の利害関係もない。

ロ．社外取締役が当社の企業統治において果たす機能及び役割並びに当該社外取締役を選任するための当社からの独立性に関する基準又は方針の内容

(イ) 当社の社外取締役は、いずれも客観性と透明性の高い経営の実現をめざし、経営者としての経験と見識に基づき、又は金融・証券、人事・総務、経営学及び会計・財務等、それぞれ精通する分野の視点から、当社から独立した立場で、当社経営の適法性、妥当性及び効率性を確保するため、取締役会又は監査委員会で適宜質問、意見等の発言を行っている。

(ロ) 当社は、健全で透明性が高い経営体制の確立を経営上の最優先課題の一つに掲げており、指名委員会が定めた候補者決定の基準において、社外取締役の当社からの独立性を最重要項目の一つとして規定している。

指名委員会は、以下の事項に該当しない場合、当該社外取締役に独立性があると判断する。

- a．当該社外取締役の2親等以内の近親者が、現在又は過去3年において、当社又は当社の親会社若しくは子会社の業務執行取締役又は執行役として在職していた場合
- b．当該社外取締役が、現在、業務執行取締役、執行役又は従業員として在職している会社が、製品や役務の提供の対価として当社から支払いを受け、又は当社に対して支払いを行っている場合に、その取引金額が、過去3事業年度のうちいずれかの1事業年度当たり、いずれかの会社の連結売上高の2%を超える場合
- c．当該社外取締役が、過去3事業年度のうちいずれかの1事業年度当たり、法律、会計若しくは税務の専門家又はコンサルタントとして、当社から直接的に1,000万円を超える報酬(当社取締役としての報酬を除く。)を受けている場合
- d．当該社外取締役が、業務を執行する役員を務めている非営利団体に対する当社からの寄付金が、過去3事業年度のうちいずれかの1事業年度当たり、1,000万円を超えかつ当該団体の総収入又は経常収益の2%を超える場合

八．社外取締役の選任状況に関する考え方

(イ) 社外取締役の選任理由は、以下のとおりである。

a. ジョージ・オルコット氏

グローバル経営における人材育成及びコーポレート・ガバナンス関係の豊富な専門知識並びに経営者として培われた幅広い見識を有している。これらを日立グループから独立した立場で、執行役等の職務の執行を監督してもらうことにより、取締役会の機能強化が期待されるため、社外取締役として選任した。

b. 猿丸雅之氏

国際的な企業経営者としての豊富な経験と幅広い見識を有している。これらを日立グループから独立した立場で、執行役等の職務の執行を監督してもらうことにより、取締役会の機能強化が期待されるため、社外取締役として選任した。

c. 新宅祐太郎氏

医療関係の豊富な専門知識及び国際的な企業経営者として培われた豊富な経験と幅広い見識を有している。これらを日立グループから独立した立場で、執行役等の職務の執行を監督してもらうことにより、取締役会の機能強化が期待されるため、社外取締役として選任した。

d. リチャード・ダイク氏

半導体関係の豊富な専門知識及び経営者として培われた幅広い見識を有している。これらを日立グループから独立した立場で、執行役等の職務の執行を監督してもらうことにより、取締役会の機能強化が期待されるため、社外取締役として選任した。

e. 松田千恵子氏

経営学及び会計・財務関係の豊富な専門知識並びに大学教授及び経営者として培われた幅広い見識を有している。これらを日立グループから独立した立場で、執行役等の職務の執行を監督してもらうことにより、取締役会の機能強化が期待されるため、社外取締役として選任した。

(ロ) 当社としては、上記のように当社の社外取締役は企業統治においてその機能及び役割を果たしており、その独立性も確保されていると考えているが、今後ともより良い企業統治体制構築のため、社外取締役の選任に当たっては十分な配慮を行う所存である。

二．社外取締役による監督と内部監査、監査委員会による監査及び会計監査との相互連携並びに内部統制部門との関係

上記いずれの監査についても、その内容、結果等を適宜取締役会又は監査委員会に報告しており、社外取締役は、当社経営の適法性、妥当性及び効率性を確保するため、これに対し適宜質問、意見等の発言を行うことにより、これら監査との連携を図りつつ、当社経営の監督を行っている。また、当社はこれら監査の内容並びに社外取締役の質問、意見等を内部統制部門にフィードバックすることにより、当社内部統制システムの一層のレベルアップを図っているが、その詳細については「(3)監査の状況 内部監査の状況 八．」に記載のとおりである。

(3) 【監査の状況】

監査委員会の状況

監査委員会は、監査委員6名及びそのスタッフとして部長相当職以下4名を置いている。なお、監査委員会の独立性を確保するため、監査委員会スタッフは、執行役から独立した専従者としており、監査委員会を補助すべき取締役も執行役を兼務しないこととしている。監査委員 ジョージ・オルコット氏は、学識経験者及び経営者として、財務及び会計に関する相当程度の知見を有している。監査委員 松田千恵子氏は、大学教授及び経営者として、財務及び会計に関する相当程度の知見を有している。また、監査委員 北松義仁氏は、長年にわたり経理・財務関係の業務に携わってきており、財務及び会計に関する相当程度の知見を有している。

内部監査の状況

イ. 当社は、内部監査組織として監査室を設置している。監査室には、15名の専従スタッフを置いている。
ロ. 内部監査、監査委員会監査及び会計監査の相互連携については、当社は内部監査組織として監査室を設置しており、監査室は監査委員会との連携の下、内部監査を実施している。具体的には、監査計画については監査室と監査委員会が事前に協議するとともに、監査結果については、監査室が監査委員会に定期的に報告を行っているほか、監査委員会の必要に応じ、監査室に対し報告を求めている。また、会計監査人は定期的に監査委員会に出席し、監査計画の立案並びに年度及び各四半期の会計監査結果を監査委員会に報告しているほか、監査委員会が必要に応じ会計監査人の意見を求めることにより会計監査の状況把握に努めている。

ハ. 当社は、内部統制を司る機能を監査室に持たせている。上記監査は内部統制システムも対象としているため、その結果を内部統制システムのレベルアップに役立てている。また、監査室は、監査の内容を取締役会又は監査委員会等で報告し、取締役又は監査委員の指導、助言を得るなどの方法等によっても、内部統制システムのレベルアップを図っている。

また、内部統制においては、財務部門、人事総務部門等もその推進に重要な役割を果たしているが、上記監査はこれらの部門についてもそれぞれ定期的に行われており、監査後はその結果を各部門にフィードバックす

ることにより、内部統制システムの一層のレベルアップを図っている。

会計監査の状況

イ．当社の監査業務を執行した公認会計士の氏名等は次のとおりである。

| 氏名 | 所属する監査法人名 | 監査業務に係る補助者の構成(名) |
|-----------------------------|---------------|---------------------|
| 指定有限責任社員 業務執行社員 葛貫 誠司 | EY新日本有限責任監査法人 | 公認会計士15、会計士試験合格者等31 |
| 指定有限責任社員 業務執行社員 櫻山 豪 | | |

ロ．監査法人の選定と理由

監査委員会は、「会計監査人が会社法第340条第1項各号に定める事由に該当すると認められ、速やかに解任する必要があると判断した場合、監査委員の全員の同意によって会計監査人を解任する」また、「会計監査人が職務を適切に遂行することが困難と認められるなど、会計監査人を変更すべきと判断される場合には、監査委員会は、株主総会に提出する会計監査人の解任又は不再任に関する議案の内容を決定する」旨を会計監査人の解任又は不再任の決定の方針として定めている。

監査委員会は、監査委員会が定める会計監査人の評価基準に則り、会計監査人の独立性、品質管理の状況、職務遂行体制の適切性及び会計監査の実施状況等を把握し、会計監査人の職務の妥当性及び相当性の評価を行った結果、上記の会計監査人の解任又は不再任の決定の方針に該当する解任事由等はなく、今後も、監査法人としての適正な職務遂行の実施が確保出来るものと判断した。

これにより、監査委員会は、EY新日本有限責任監査法人を解任又は再任しないことに関する議案を株主総会には付議しないことを確認した。

ハ．監査委員会による監査法人の評価

監査委員会は、監査法人を適切に評価するための基準を策定し、主体的に会計監査人の独立性、品質管理の状況、職務遂行体制の適切性及び当年度の会計監査の実施状況等を把握し、会計監査人の職務の妥当性及び相当性の評価を行った。

監査報酬の内容等

「企業内容等の開示に関する内閣府令の一部を改正する内閣府令」(平成31年1月31日 内閣府令第3号)による改正後の「企業内容等の開示に関する内閣府令」第二号様式記載上の注意(56)d(f) から の規定に関する経過措置を適用している。

(監査公認会計士等に対する報酬の内容)

| 区分 | 前連結会計年度 | | 当連結会計年度 | |
|-------|-------------------|------------------|-------------------|------------------|
| | 監査証明業務に基づく報酬(百万円) | 非監査業務に基づく報酬(百万円) | 監査証明業務に基づく報酬(百万円) | 非監査業務に基づく報酬(百万円) |
| 提出会社 | 80 | 5 | 90 | 9 |
| 連結子会社 | 8 | 2 | 8 | 1 |
| 計 | 88 | 7 | 98 | 10 |

(その他重要な報酬の内容)

(前連結会計年度)

当社の一部の海外子会社は、当社の監査公認会計士等と同一のネットワークに属しているアーンスト・アンド・ヤングに対して、監査証明業務に係る報酬を支払っている。

(当連結会計年度)

当社の一部の海外子会社は、当社の監査公認会計士等と同一のネットワークに属しているアーンスト・アンド・ヤングに対して、監査証明業務に係る報酬を支払っている。

(監査公認会計士等の提出会社に対する非監査業務の内容)

(前連結会計年度)

当社は、監査公認会計士等に対して、社債の発行に係るコンフォートレターの作成業務及び競争当局への財務情報提出に伴う確認業務に報酬を支払っている。

(当連結会計年度)

当社は、監査公認会計士等に対して、コンプライアンスに関する調査業務に報酬を支払っている。

(監査報酬の決定方針)

当社の監査公認会計士等に対する監査報酬については、監査時間等に基づき決定している。

(監査委員会が会計監査人の報酬等に同意した理由)

監査委員会は、過年度の監査計画と監査実績等を確認の上、当連結会計年度の監査時間及び監査報酬額の見積りの妥当性を検討した結果、会計監査人の報酬等につき会社法第399条第1項の同意を行っている。

(4) 【役員の報酬等】

イ．役員報酬等の額又はその算定方法の決定に関する方針に係る事項

(イ) 基本方針

- a．取締役及び執行役の報酬は、多様で優秀な人材を確保するため、同業他社及び他業種同規模他社との比較において競争力のある水準とする。
- b．執行役については、業績との連動性を高め、短期のみならず中長期的な企業価値向上をめざした経営を動機づける。

(ロ) 執行役(取締役兼務者を含む。)の報酬

- a．執行役の報酬は、固定報酬及び業績連動報酬から構成される。(イ)に定める基本方針に基づき、国内の大手企業が参加する報酬調査結果を参考に、妥当性の検証を行った上で、執行役の役位ごとの標準報酬額を定め、その内訳を概ね70%(固定報酬)対30%(業績連動報酬)となるよう設定する。なお、執行役社長については、より業績連動報酬の割合を大きくし、内訳を概ね60%対40%となるよう設定する。
- b．業績連動報酬は、全社業績に応じて変動する業績連動報酬(以下「全社業績分」という。)及び担当業務を踏まえて設定した個人目標の達成度合の評価に基づいて変動する個人業績に係る業績連動報酬(以下「個人業績分」という。)から構成され、その内訳を80%(全社業績分)対20%(個人業績分)とする。
- c．全社業績分の指標については、2018中期経営計画の目標達成に向けて執行役が一体となって努力することを動機づけるため、全執行役について、2018中期経営計画における業績指標である営業利益及び売上収益伸長率を選択している。2018中期経営計画における目標値は、営業利益率11%、売上収益のCAGR(年平均成長率)7~8%増(対2015年度)であり、実績値はそれぞれ5.3%及び7.6%(対2015年度)である。

個人業績分は、事業の持続的成長に向けた中長期的な経営課題への対応等の成果を反映するものであり、指標に依拠しない定性評価を行っている。

- d．業績連動報酬の個人別の支給額は、役位ごとに定めた標準報酬額に業績連動報酬に関する上記の各比率を適用して全社業績分及び個人業績分に按分し、それぞれに以下によって求めた支給率を乗じて、合算する。

・全社業績分に係る支給率

営業利益及び売上収益伸長率の目標に対するそれぞれの達成度合に応じて、支給率を0~200%の範囲内で比例的に決定し、評価ウェイト(70%(営業利益)、30%(売上収益伸長率))を適用して全社業績分にかかる支給率とする。

・個人業績分に係る支給率

担当業務を踏まえた個人目標に対する達成度合の評価を実施し、0~200%の範囲内で支給率を決定する。

(ハ) 取締役の報酬

取締役の報酬は、固定報酬及び期末手当から構成される。固定報酬及び期末手当は、国内の大手企業が参加する報酬調査結果を参考に、妥当性の検証を行った上で、原則として、各人の役割と責任の重さを考慮して決定する。

(ニ) 報酬決定のプロセス

当社は会社法に定める指名委員会等設置会社であるため、報酬委員会が、報酬等の額の決定に関する方針及び個別報酬額等を決定する。

当事業年度に係る報酬等の額について、報酬委員会は、2018年1月に報酬の水準の検証を含む取締役及び執行役の報酬等の額の決定に関する方針、2018年3月に執行役の個人別固定報酬の額、2018年6月に取締役の個人別固定報酬の額、2019年5月に取締役の期末手当及び執行役の業績連動報酬額を決議した。なお、2018年11月には、当社製品の一部において不適切な検査等が行われていた事実が判明し、これを真摯に受け止め、関係役員の固定報酬の減額を決議した。

ロ．役員区分ごとの報酬等の総額、報酬等の種類別の総額及び対象となる役員の員数

| 役員区分 | 報酬等の総額 (百万円) | 報酬等の種類別の総額(百万円) | | | 対象となる 役員の員数 (人) |
|--------------------|-----------------|-----------------|-----------------|-------|-----------------------|
| | | 月額基本報酬 | 業績連動報酬・ 期末手当 | 退任慰労金 | |
| 取締役 (社外取締役を除く。) | 102 | 89 | 13 | | 7 |
| 執行役 | 543 | 373 | 170 | | 15 |
| 社外取締役 | 84 | 73 | 11 | | 5 |

(注) 1．報酬等の額は、百万円未満の端数を四捨五入している。

2．執行役兼務取締役の報酬等の額は、取締役としての報酬等と執行役としての報酬等を区分した上で、それぞれの報酬等の額に加算して表示している。

3．取締役(社外取締役を除く。)7名中2名が執行役を兼務している。

八．報酬等の総額が1億円以上である者の報酬等の総額等
該当事項なし

(5) 【株式の保有状況】

投資株式の区分の基準及び考え方

当社は、専ら株式の価値の変動又は株式に係る配当によって利益を受けることを目的とする場合を「純投資目的」と、それ以外の場合を「純投資以外の目的」と定義している。

保有目的が純投資目的以外の目的である投資株式

a. 保有方針及び保有の合理性を検証する方法並びに個別銘柄の保有の適否に関する取締役会等における検証の内容

- ・当社は、事業運営の観点で株式の保有目的があると判断した場合及び継続保有が企業価値の向上に寄与すると判断した場合に、他社の株式を保有する。ただし、純投資目的での株式の保有は行わない。
- ・他社株式の取得については、取締役会付議基準、業務執行に関する決裁規則等に従い決定機関となる取締役会又は執行役が前項の要件を十分確認のうえ、当該取得の可否を決定する。
- ・執行役社長は、保有株式について保有のねらい及び合理性を執行役員会での審議を経て定期的に確認する。
- ・当社は、前項の審議・確認の結果、保有のねらい及び合理性を欠くと判断した保有株式について、適切な時期に縮減する。

b. 銘柄数及び貸借対照表計上額

| | 銘柄数 (銘柄) | 貸借対照表計上額の 合計額(百万円) |
|------------|-------------|-----------------------|
| 非上場株式 | 25 | 968 |
| 非上場株式以外の株式 | 10 | 6,955 |

(当事業年度において株式数が増加した銘柄)

| | 銘柄数 (銘柄) | 株式数の増加に係る取得 価額の合計額(百万円) | 株式数の増加の理由 |
|------------|-------------|----------------------------|-------------------------------|
| 非上場株式 | 1 | 152 | 持分法非適用関連会社から投資有価証券に科目を変更したため。 |
| 非上場株式以外の株式 | 0 | | |

(当事業年度において株式数が減少した銘柄)

| | 銘柄数 (銘柄) | 株式数の減少に係る売却 価額の合計額(百万円) |
|------------|-------------|----------------------------|
| 非上場株式 | 2 | 0 |
| 非上場株式以外の株式 | 3 | 586 |

c. 特定投資株式及びみなし保有株式の銘柄ごとの株式数、貸借対照表計上額等に関する情報

特定投資株式

| 銘柄 | 当事業年度 | 前事業年度 | 保有目的、定量的な保有効果 及び株式数が増加した理由 | 当社の株式の保有の有無 |
|--------------------|-----------|-----------|-------------------------------|-------------|
| | 株式数(株) | 株式数(株) | | |
| 東京応化工業(株) | 1,069,500 | 1,069,500 | 円滑な関係維持のため。 | 無 |
| | 3,230 | 4,080 | | |
| Biocartis Group NV | 1,417,346 | 1,417,346 | 業界動向等の情報収集のため。 | 無 |
| | 2,013 | 2,257 | | |
| 日東紡績(株) | 541,200 | 541,200 | 円滑な関係維持のため。 | 有 |
| | 1,072 | 1,221 | | |
| イビデン(株) | 250,000 | 250,000 | 円滑な関係維持のため。 | 無 |
| | 421 | 396 | | |

| | | | | |
|-------------|--------|---------|-------------|---|
| 中国塗料(株) | 65,000 | 65,000 | 円滑な関係維持のため。 | 無 |
| | 64 | 68 | | |
| 大日本塗料(株) | 48,400 | 48,400 | 円滑な関係維持のため。 | 無 |
| | 54 | 75 | | |
| (株)ニイタカ | 26,450 | 26,450 | 円滑な関係維持のため。 | 無 |
| | 40 | 48 | | |
| イサム塗料(株) | 9,168 | 9,168 | 円滑な関係維持のため。 | 有 |
| | 34 | 36 | | |
| 尾家産業(株) | 18,865 | 18,865 | 円滑な関係維持のため。 | 無 |
| | 25 | 24 | | |
| (株)高速 | 3,194 | 3,194 | 円滑な関係維持のため。 | 無 |
| | 4 | 4 | | |
| (株)カイノス | | 490,880 | 円滑な関係維持のため。 | 無 |
| | | 344 | | |
| 日本シイエムケイ(株) | | 62,400 | 円滑な関係維持のため。 | 有 |
| | | 52 | | |
| (株)サトー商会 | | 5,000 | 円滑な関係維持のため。 | 無 |
| | | 8 | | |

- (注) 1. 貸借対照表計上額の上位銘柄を選定する段階で、特定投資株式とみなし保有株式を合算していない。
 2. 「-」は、当該銘柄を保有していないことを示している。
 3. 定量的な保有効果については記載が困難である。保有の合理性は、上記aに記載のとおり、執行役社長が、保有株式について保有のねらい及び合理性を執行役会での審議を経て定期的に確認している。

みなし保有株式

| 銘柄 | 当事業年度 | 前事業年度 | 保有目的、定量的な保有効果 及び株式数が増加した理由 | 当社の株式の保有の有無 |
|-------------|-------------------|-------------------|-------------------------------|-------------|
| | 株式数(株) | 株式数(株) | | |
| | 貸借対照表計上額 (百万円) | 貸借対照表計上額 (百万円) | | |
| 日本シイエムケイ(株) | 500,000 | 887,600 | 議決権を保有している。 | 有 |
| | 328 | 746 | | |

保有目的が純投資目的である投資株式

該当事項なし

当事業年度中に投資株式の保有目的を純投資目的から純投資目的以外の目的に変更したもの

該当事項なし

当事業年度中に投資株式の保有目的を純投資目的以外の目的から純投資目的に変更したもの

該当事項なし

第5【経理の状況】

1．連結財務諸表及び財務諸表の作成方法について

(1) 当社の連結財務諸表は、「連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」(昭和51年大蔵省令第28号)第93条の規定により、国際財務報告基準(以下「IFRS」という。)に準拠して作成している。

(2) 当社の財務諸表は、「財務諸表等の用語、様式及び作成方法に関する規則」(昭和38年大蔵省令第59号。以下「財務諸表等規則」という。)に基づいて作成している。

なお、当社は、特例財務諸表提出会社に該当し、財務諸表等規則第127条の規定により財務諸表を作成している。

2．監査証明について

当社は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、連結会計年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)の連結財務諸表及び事業年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)の財務諸表について、EY新日本有限責任監査法人による監査を受けている。

なお、新日本有限責任監査法人は、2018年7月1日をもって、EY新日本有限責任監査法人に名称を変更している。

3．連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組み及びIFRSに基づいて連結財務諸表等を適正に作成することができる体制の整備について

当社は、連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みを行っている。具体的には、国際会計基準審議会、金融庁及び会計専門家等が提供する情報の継続的な入手、並びに公益財団法人財務会計基準機構への加入等、会計基準等の内容を適切に把握し、会計基準等の変更等についての的確に対応することができる体制を整備している。

1【連結財務諸表等】

(1)【連結財務諸表】

【連結財政状態計算書】

(単位：百万円)

| 項目 | 注記 | 前連結会計年度 (2018年3月31日) | 当連結会計年度 (2019年3月31日) |
|-----------------|----------|-------------------------|-------------------------|
| 資産の部 | | | |
| 流動資産 | | | |
| 現金及び現金同等物 | 26 | 84,037 | 101,292 |
| 売上債権 | 7 | 156,504 | 139,579 |
| 棚卸資産 | 9 | 85,410 | 87,604 |
| その他の金融資産 | 13・28 | 22,350 | 20,549 |
| その他の流動資産 | | 4,782 | 4,549 |
| 流動資産合計 | | 353,083 | 353,573 |
| 非流動資産 | | | |
| 有形固定資産 | 11 | 210,210 | 221,729 |
| 無形資産 | 6・12 | 76,495 | 71,979 |
| 退職給付に係る資産 | 18 | 13,489 | 15,651 |
| 繰延税金資産 | 14 | 15,187 | 14,987 |
| 持分法で会計処理されている投資 | 10 | 6,495 | 6,990 |
| その他の金融資産 | 13・28 | 18,083 | 16,545 |
| その他の非流動資産 | | 8,121 | 7,205 |
| 非流動資産合計 | | 348,080 | 355,086 |
| 資産合計 | | 701,163 | 708,659 |
| 負債の部 | | | |
| 流動負債 | | | |
| 買入債務 | 15・28 | 85,293 | 80,215 |
| 社債及び借入金 | 16・26・28 | 42,951 | 41,901 |
| 未払費用 | | 27,945 | 28,991 |
| 未払法人所得税 | | 4,204 | 4,747 |
| その他の金融負債 | 8・13・28 | 21,095 | 18,630 |
| その他の流動負債 | | 5,737 | 3,606 |
| 流動負債合計 | | 187,225 | 178,090 |
| 非流動負債 | | | |
| 社債及び借入金 | 16・26・28 | 53,493 | 53,174 |
| 退職給付に係る負債 | 18 | 17,237 | 17,581 |
| 引当金 | 17 | 1,737 | 1,861 |
| その他の金融負債 | 8・13・28 | 24,363 | 19,917 |
| その他の非流動負債 | 14 | 8,049 | 8,415 |
| 非流動負債合計 | | 104,879 | 100,948 |
| 負債合計 | | 292,104 | 279,038 |
| 資本の部 | | | |
| 資本金 | 19 | 15,454 | 15,454 |
| 資本剰余金 | 19 | - | 4,130 |
| 自己株式 | 19 | 246 | 251 |
| 利益剰余金 | 19 | 367,999 | 384,472 |
| その他の包括利益累計額 | 19 | 17,176 | 16,290 |
| 親会社株主持分合計 | | 400,383 | 420,095 |
| 非支配持分 | | 8,676 | 9,526 |
| 資本合計 | | 409,059 | 429,621 |
| 負債及び資本合計 | | 701,163 | 708,659 |

【連結損益計算書及び連結包括利益計算書】

【連結損益計算書】

(単位：百万円)

| 項目 | 注記 | 前連結会計年度 | 当連結会計年度 |
|------------------------|----------|-------------------------------|-------------------------------|
| | | (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日) | (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日) |
| 売上収益 | 5 | 669,234 | 681,025 |
| 売上原価 | 11・12・18 | 495,557 | 508,814 |
| 売上総利益 | | 173,677 | 172,211 |
| 販売費及び一般管理費 | 11・12・18 | 116,947 | 123,589 |
| その他の収益 | 22 | 5,768 | 3,397 |
| その他の費用 | 22 | 16,279 | 15,666 |
| 営業利益 | | 46,219 | 36,353 |
| 金融収益 | 24 | 1,160 | 2,108 |
| 金融費用 | 24 | 2,386 | 1,651 |
| 持分法による投資損益 | 10 | 3,948 | 3,690 |
| 税引前当期利益 | | 48,941 | 40,500 |
| 法人所得税費用 | 14 | 11,820 | 11,049 |
| 当期利益 | | 37,121 | 29,451 |
| 当期利益の帰属 | | | |
| 親会社株主持分 | | 36,324 | 28,723 |
| 非支配持分 | | 797 | 728 |
| 親会社株主に帰属する1株当たり当期利益(円) | | | |
| 基本的1株当たり当期利益 | 25 | 174.45 | 137.94 |
| 希薄化後1株当たり当期利益 | | - | - |

【連結包括利益計算書】

(単位：百万円)

| 項目 | 注記 | 前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日) | 当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日) |
|-----------------------------|-------|--|--|
| 当期利益 | | 37,121 | 29,451 |
| その他の包括利益 | | | |
| 純損益に振り替えられることのない項目 | | | |
| FVTOCIの金融資産の公正価値の純変動額 | 20 | 690 | 846 |
| 確定給付制度の再測定 | 18・20 | 1,478 | 782 |
| 合計 | | 2,168 | 64 |
| 純損益に振り替えられる可能性のある項目 | | | |
| 在外営業活動体の換算差額 | 20 | 2,168 | 979 |
| キャッシュ・フロー・ヘッジの公正価値の 純変動額 | 20 | 181 | 298 |
| 持分法によるその他の包括利益 | 10・20 | 212 | 287 |
| 合計 | | 1,775 | 990 |
| その他の包括利益合計 | | 3,943 | 1,054 |
| 当期包括利益 | | 41,064 | 28,397 |
| 当期包括利益の帰属 | | | |
| 親会社株主持分 | | 39,953 | 27,699 |
| 非支配持分 | | 1,111 | 698 |

【連結持分変動計算書】

前連結会計年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

(単位：百万円)

| 項目 | 注記 | 親会社株主持分 | | | | | |
|----------------------------|----|---------|-------|------|---------|-----------------|----------------|
| | | 資本金 | 資本剰余金 | 自己株式 | 利益剰余金 | その他の包括利益累計額 | |
| | | | | | | FVTOCIの 金融資産 | 確定給付制度の 再測定 |
| 当期首残高 | | 15,454 | - | 234 | 345,827 | 2,752 | 6,229 |
| 当期利益 | | | | | 36,324 | | |
| その他の包括利益 | 20 | | | | | 690 | 1,467 |
| 当期包括利益合計 | | - | - | - | 36,324 | 690 | 1,467 |
| 配当金 | 21 | | | | 12,494 | | |
| 自己株式の取得 | | | | 12 | | | |
| 自己株式の処分 | | | 0 | 0 | | | |
| 企業結合による変動 | 6 | | | | | | |
| 非支配持分の取得 | 19 | | 25 | | | | |
| 利益剰余金から資本剰余金 への振替 | 19 | | 2,065 | | 2,065 | | |
| その他の包括利益累計額から 利益剰余金への振替 | 13 | | | | 407 | 407 | |
| その他の増減 | | | 2,040 | | | | |
| 所有者との取引額等合計 | | - | - | 12 | 14,152 | 407 | - |
| 当期末残高 | | 15,454 | - | 246 | 367,999 | 3,035 | 7,696 |

| 項目 | 注記 | 親会社株主持分 | | | | 非支配持分 | 資本合計 |
|----------------------------|----|------------------|-------------------|--------|---------|-------|---------|
| | | その他の包括利益累計額 | | | 合計 | | |
| | | 在外営業活動体 の換算差額 | キャッシュ・ フロー・ヘッジ | 合計 | | | |
| 当期首残高 | | 4,852 | 121 | 13,954 | 375,001 | 6,437 | 381,438 |
| 当期利益 | | | | | 36,324 | 797 | 37,121 |
| その他の包括利益 | 20 | 1,670 | 198 | 3,629 | 3,629 | 314 | 3,943 |
| 当期包括利益合計 | | 1,670 | 198 | 3,629 | 39,953 | 1,111 | 41,064 |
| 配当金 | 21 | | | | 12,494 | 152 | 12,646 |
| 自己株式の取得 | | | | | 12 | | 12 |
| 自己株式の処分 | | | | | 0 | | 0 |
| 企業結合による変動 | 6 | | | | - | 1,839 | 1,839 |
| 非支配持分の取得 | 19 | | | | 25 | 113 | 138 |
| 利益剰余金から資本剰余金 への振替 | 19 | | | | - | | - |
| その他の包括利益累計額から 利益剰余金への振替 | 13 | | | 407 | - | | - |
| その他の増減 | | | | | 2,040 | 446 | 2,486 |
| 所有者との取引額等合計 | | - | - | 407 | 14,571 | 1,128 | 13,443 |
| 当期末残高 | | 6,522 | 77 | 17,176 | 400,383 | 8,676 | 409,059 |

当連結会計年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

(単位：百万円)

| 項目 | 注記 | 親会社株主持分 | | | | | |
|----------------------------|----|---------|-------|------|---------|-----------------|----------------|
| | | 資本金 | 資本剰余金 | 自己株式 | 利益剰余金 | その他の包括利益累計額 | |
| | | | | | | FVTOCIの 金融資産 | 確定給付制度の 再測定 |
| 当期首残高 | | 15,454 | - | 246 | 367,999 | 3,035 | 7,696 |
| 会計方針の変更による 累積的影響額 | | | | | 7 | | |
| 会計方針の変更を反映した 当期首残高 | 3 | 15,454 | - | 246 | 368,006 | 3,035 | 7,696 |
| 当期利益 | | | | | 28,723 | | |
| その他の包括利益 | 20 | | | | | 846 | 783 |
| 当期包括利益合計 | | - | - | - | 28,723 | 846 | 783 |
| 配当金 | 21 | | | | 12,493 | | |
| 自己株式の取得 | | | | 5 | | | |
| 自己株式の処分 | | | 0 | 0 | | | |
| 企業結合による変動 | 6 | | | | | | |
| 非支配持分の取得 | 19 | | | | | | |
| 利益剰余金から資本剰余金 への振替 | 19 | | | | | | |
| その他の包括利益累計額から 利益剰余金への振替 | 13 | | | | 236 | 236 | |
| その他の増減 | | | 4,130 | | | | |
| 所有者との取引額等合計 | | - | 4,130 | 5 | 12,257 | 236 | - |
| 当期末残高 | | 15,454 | 4,130 | 251 | 384,472 | 1,953 | 8,479 |

| 項目 | 注記 | 親会社株主持分 | | | | 合計 | 非支配持分 | 資本合計 |
|----------------------------|----|------------------|-------------------|--------|---------|-------|---------|------|
| | | その他の包括利益累計額 | | | 合計 | | | |
| | | 在外営業活動体 の換算差額 | キャッシュ・ フロー・ヘッジ | 合計 | | | | |
| 当期首残高 | | 6,522 | 77 | 17,176 | 400,383 | 8,676 | 409,059 | |
| 会計方針の変更による 累積的影響額 | | | | | 7 | | 7 | |
| 会計方針の変更を反映した 当期首残高 | 3 | 6,522 | 77 | 17,176 | 400,390 | 8,676 | 409,066 | |
| 当期利益 | | | | | 28,723 | 728 | 29,451 | |
| その他の包括利益 | 20 | 655 | 306 | 1,024 | 1,024 | 30 | 1,054 | |
| 当期包括利益合計 | | 655 | 306 | 1,024 | 27,699 | 698 | 28,397 | |
| 配当金 | 21 | | | | 12,493 | 178 | 12,671 | |
| 自己株式の取得 | | | | | 5 | | 5 | |
| 自己株式の処分 | | | | | 0 | | 0 | |
| 企業結合による変動 | 6 | | | | - | 57 | 57 | |
| 非支配持分の取得 | 19 | | | | - | | - | |
| 利益剰余金から資本剰余金 への振替 | 19 | | | | - | | - | |
| その他の包括利益累計額から 利益剰余金への振替 | 13 | | | 236 | - | | - | |
| その他の増減 | | | 374 | 374 | 4,504 | 387 | 4,891 | |
| 所有者との取引額等合計 | | - | 374 | 138 | 7,994 | 152 | 7,842 | |
| 当期末残高 | | 5,867 | 9 | 16,290 | 420,095 | 9,526 | 429,621 | |

【連結キャッシュ・フロー計算書】

(単位：百万円)

| 項目 | 注記 | 前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日) | 当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日) |
|-------------------------|----|--|--|
| 営業活動によるキャッシュ・フロー | | | |
| 当期利益 | | 37,121 | 29,451 |
| 減価償却費及び償却費 | | 34,721 | 37,760 |
| 法人所得税費用 | | 11,820 | 11,049 |
| 減損損失 | | 306 | 5,266 |
| 受取利息及び受取配当金 | | 1,052 | 1,216 |
| 支払利息 | | 1,537 | 1,510 |
| 持分法による投資損益（は益） | | 3,948 | 3,690 |
| 売上債権の増減額（は増加） | | 14,681 | 16,169 |
| 未収入金の増減額（は増加） | | 1,846 | 1,256 |
| 棚卸資産の増減額（は増加） | | 8,938 | 2,889 |
| 買入債務の増減額（は減少） | | 530 | 4,589 |
| 退職給付に係る資産及び負債の増減額 | | 747 | 602 |
| その他 | | 5,632 | 2,510 |
| 小計 | | 51,823 | 84,453 |
| 利息及び配当金の受取額 | | 4,919 | 4,633 |
| 利息の支払額 | | 1,374 | 1,557 |
| 法人所得税の支払額 | | 20,452 | 10,370 |
| 営業活動によるキャッシュ・フロー | | 34,916 | 77,159 |
| 投資活動によるキャッシュ・フロー | | | |
| 有形固定資産の取得による支出 | | 42,454 | 48,821 |
| 有形固定資産の売却による収入 | | 1,152 | 832 |
| 有価証券等の売却及び償還による収入 | | 1,910 | 746 |
| 子会社株式の取得による支出 | 6 | 33,863 | - |
| 持分法で会計処理されている投資の取得による支出 | | 8,061 | - |
| 有価証券等の取得による支出 | | 970 | 367 |
| その他 | | 5,516 | 213 |
| 投資活動によるキャッシュ・フロー | | 87,802 | 47,397 |
| 財務活動によるキャッシュ・フロー | | | |
| 短期借入金の純増減額（は減少） | 26 | 12,142 | 1,628 |
| 長期借入れによる収入 | 26 | 26,389 | 2,686 |
| 長期借入金の返済による支出 | 26 | 16,102 | 4,523 |
| 社債の発行による収入 | 26 | 19,906 | - |
| 配当金の支払額 | | 12,494 | 12,493 |
| 非支配持分株主への配当金の支払額 | | 152 | 178 |
| その他 | | 757 | 216 |
| 財務活動によるキャッシュ・フロー | | 28,932 | 12,664 |
| 現金及び現金同等物に係る換算差額 | | 342 | 157 |
| 現金及び現金同等物の増減額（は減少） | | 23,612 | 17,255 |
| 現金及び現金同等物の期首残高 | 26 | 107,649 | 84,037 |
| 現金及び現金同等物の期末残高 | 26 | 84,037 | 101,292 |

【連結財務諸表注記】

1. 報告企業

日立化成株式会社(以下、当社)は日本国に所在する株式会社であり、東京証券取引所に株式を上場している。

当社の登記している本社及び主要な事業所の住所は当社のホームページ(URL <https://www.hitachi-chem.co.jp>)で開示している。

当社及び子会社(以下、当社グループ)の連結財務諸表は2019年3月31日を期末日とし、当社グループ並びにその関連会社及び共同支配企業に対する持分により構成されている。当社グループは、機能材料及び先端部品・システムの製造・加工及び販売を主たる事業としている。

2. 作成の基礎

(1) 準拠する会計基準

当社は、「連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」(昭和51年大蔵省令第28号)第1条の2に掲げる「指定国際会計基準特定会社」の要件を満たしていることから、同第93条の規定により、国際会計基準審議会によって公表されたIFRSに準拠して連結財務諸表を作成している。

また、連結財務諸表は2019年6月21日に当社執行役社長により承認されている。

(2) 測定的基础

当社グループの連結財務諸表は、公正価値で測定するデリバティブ金融商品、純損益を通じて公正価値で測定する(以下、FVTPL)金融資産及びFVTPLの金融負債、その他の包括利益を通じて公正価値で測定する(以下、FVTOCI)金融資産、確定給付制度に係る資産又は負債等を除き、取得原価を基礎として作成している。

(3) 表示通貨

表示通貨は当社の機能通貨である日本円としており、百万円未満は四捨五入している。

(4) 見積り及び判断の利用

連結財務諸表の作成に当たっては、資産、負債、収益及び費用の報告額に影響を及ぼす会計方針の適用、判断、見積り及び仮定の設定を行っている。

見積り及びその基礎となる仮定は継続して見直しており、その見積りの変更による影響は、見積りを変更した会計期間及びその影響を受ける将来の会計期間において認識される。また、実際の業績はこれらの見積りとは異なる場合がある。

連結財務諸表上で認識する金額に重要な影響を与える会計方針の適用に関する判断については、以下の注記に記載している。

・注3.(1)連結の基礎

・注3.(5)金融商品、注28.金融商品及び関連する開示

翌連結会計年度において重要な修正をもたらす可能性のある仮定及び見積りの不確実性に関しては、以下の注記に記載している。

・注3.(10)非金融資産の減損、注12.無形資産、注23.主要な減損損失

・注3.(12)退職後給付、注18.従業員給付

・注3.(13)引当金、注17.引当金、注30.コミットメント及び偶発事象

・注3.(15)法人所得税、注14.繰延税金及び法人所得税費用

(5) 表示方法の変更

(連結キャッシュ・フロー計算書関係)

従来、「その他」に表示していた「営業活動によるキャッシュ・フロー」の「減損損失」は、金額の重要性が増したため、当連結会計年度より独立掲記している。この表示方法の変更を反映させるため、前連結会計年度の連結財務諸表の組替えを行っている。

この結果、前連結会計年度の連結キャッシュ・フロー計算書において、「営業活動によるキャッシュ・フロー」に表示していた「その他」 5,326百万円は、「減損損失」306百万円、「その他」 5,632百万円として組み替えている。

3. 主要な会計方針についての概要

(1) 連結の基礎

子会社

子会社とは、当社グループにより支配されている企業をいう。

支配とは、当社グループがその会社の財務及び経営の方針を決定する能力を有している状態をいう。

当社グループは、投資先に対する支配を獲得した日から連結を開始し、支配を喪失した場合にはその日に連結を終了している。子会社が適用する会計方針が当社の会計方針と異なる場合には、必要に応じて当該子会社の財務諸表に調整を行っている。当社グループ内の債権債務残高、取引高及び当社グループ内取引によって発生した未実現損益は、連結財務諸表の作成に際して消去している。

日立化成工業(東莞)有限公司等一部の子会社の報告期間の末日は12月31日である。それらの子会社については、親会社の報告期間の末日である3月31日現在の財務諸表を作成して連結している。その他の子会社の報告期間の末日は親会社の報告期間の末日と一致している。

子会社に対する支配の喪失を伴わない持分変動については資本取引として会計処理している。持分変動に伴い生じる非支配持分の調整額と対価の公正価値との差額は資本に直接認識し、親会社株主に帰属させている。

一方、持分変動の結果、当社グループが子会社の支配を喪失した場合には、支配の喪失から生じた利得又は損失は純損益で認識している。

関連会社及び共同支配企業

関連会社とは、当社グループがその財務及び経営の方針に対して重要な影響力を有するが支配はしていない企業をいう。当社グループが他の企業の議決権の20%以上50%以下を保有する場合、当社グループは当該他の企業に対して重要な影響力を有していると推定される。なお、当社グループが保有する議決権が20%未満であっても、役員のパイプラインや取引により重要な影響力を有していると判断される場合には関連会社を含めることとしている。

共同支配企業とは、契約上の取り決めにより当社グループを含む複数の当事者が共同して支配しており、関連性のある活動に関する意思決定に際して、支配を共有する当事者の一致した合意を必要とする企業をいう。

当社グループは、関連会社及び共同支配企業への投資について重要な影響力又は共同支配を獲得した日から持分法の適用を開始し、それらを喪失した場合には持分法の適用を終了している。

(2) 企業結合

企業結合の会計処理は取得法によっており、取得の対価は被取得企業の支配と交換に譲渡した資産及び当社グループが以前から保有していた持分(取得日の公正価値)の合計として測定される。また、取得関連費用は発生時に費用処理している。

取得の対価と非支配持分の合計額が被支配企業の純資産の公正価値を上回る場合はその差額をのれんとして計上し、下回る場合にはその差額は直ちに純損益として認識している。

当社グループは、IFRS第1号の免除規定を適用し、2011年10月1日より前に発生した企業結合について、IFRS第3号「企業結合」(以下、IFRS第3号)を遡及適用しないことを選択している。従って、2011年10月1日より前の取得により生じたのれんは従前の会計基準(日本基準)に基づいて認識していた2011年10月1日時点の金額を引継ぎ、これに減損テストの結果を反映した価額で連結財政状態計算書に計上している。

(3) 現金及び現金同等物

現金及び現金同等物は、手許現金、随時引き出し可能な預金及び取得日から3ヵ月以内に償還期限の到来する、容易に換金可能で価値変動のリスクが低い短期投資からなっている。

(4) 外貨換算

機能通貨及び表示通貨

当社グループの各企業の個別財務諸表は、それぞれの機能通貨で作成している。また、当社グループの連結財務諸表は、当社の機能通貨である日本円で表示している。

外貨建取引

外貨建の取引は、取引日における直物為替相場又はそれに近似するレートにより機能通貨に換算している。期末日における外貨建貨幣性資産及び負債は、期末日の為替レートで機能通貨に再換算している。当該換算及び決済により生じる換算差額は純損益として認識している。ただし、FVTOCIの金融資産及びキャッシュ・フロー・ヘッジから生じる換算差額については、その他の包括利益として認識している。

在外営業活動体

在外営業活動体の資産及び負債は期末日の為替レートにより、収益及び費用項目は期中平均為替レートにより日本円に換算している。この在外営業活動体の財務諸表の換算により生じる換算差額は、その他の包括利益として認識している。

(5) 金融商品

当社グループは、金融商品に係る会計処理について、IFRS第9号「金融商品」(2014年7月改訂)(以下、IFRS第9号)を適用している。

デリバティブ以外の金融資産

デリバティブ以外の金融資産はその当初認識時に償却原価で測定する金融資産、FVTPLの金融資産及びFVTOCIの金融資産に分類している。売上債権及びその他の債権は発生日に当初認識し、その他の全ての金融資産は取引日に当初認識している。

(a) 償却原価で測定する金融資産

以下の要件をいずれも満たす金融資産は償却原価で測定する金融資産に分類している。

- ・ 契約上のキャッシュ・フローを回収することを目的として保有している。
- ・ 契約条件により、元本及び元本残高に対する利息の支払いのキャッシュ・フローのみが特定の日に生じる。

償却原価で測定する金融資産は、当初認識時に、当該金融資産の公正価値に取得費用を加算した金額で測定している。また、当初認識後は実効金利法による償却原価で測定している。

(b) FVTPLの金融資産

売買目的で保有する資本性金融資産及び償却原価で測定する金融資産に分類されない負債性金融資産はFVTPLの金融資産としている。FVTPLの金融資産は当初認識時に公正価値で測定し、当該金融資産の取得費用は発生時に純損益として認識している。また、当初認識後は公正価値で測定し、その事後的な変動を純損益として認識している。

(c) FVTOCIの金融資産

売買目的以外で保有する資本性金融資産はFVTOCIの金融資産としている。FVTOCIの金融資産は、当初認識時に、当該金融資産の公正価値に取得費用を加算した金額で測定している。また、当初認識後は公正価値で測定し、その事後的な変動をその他の包括利益として認識している。FVTOCIの金融資産の認識を中止した場合には、その他の包括利益累計額を利益剰余金に振り替えている。なお、FVTOCIの金融資産からの配当については純損益として認識している。

(d) 金融資産の認識の中止

金融資産から生じるキャッシュ・フローに対する契約上の権利が消滅した場合又は金融資産から生じるキャッシュ・フローを受け取る契約上の権利を譲渡し、当該金融資産の所有に係るリスクと経済価値を実質的に全て移転した場合には、当該金融資産の認識を中止している。

金融資産の減損

売上債権及びその他の債権に関する予想信用損失に係る貸倒引当金については、信用リスクが当初認識以降に著しく増大しているか否かに応じて、少なくとも四半期毎に減損の客観的な証拠があるかどうかを検討している。当該金融資産について、信用リスクが当初認識後に著しく増大している場合には、金融資産の予想残存期間の全期間の予想信用損失に等しい金額で貸倒引当金を測定している。信用リスクが当初認識以降に著しく増大していない場合には、期末日後12ヶ月以内に生じる予想信用損失に等しい金額で貸倒引当金を測定している。ただし、売上債権については、常に全期間の予想信用損失に等しい金額で貸倒引当金を測定している。

信用リスクの著しい増大の有無は、債務不履行発生リスクの変化に基づいて判断しており、債務不履行とは、債務者による契約上のキャッシュ・フローの支払いに重大な問題が生じ、金融資産の全体又は一部を回収するという合理的な予想を有していない状態と定義している。債務不履行発生リスクに変化があるかどうかの判断においては、主に外部信用格付け、期日経過の情報等を考慮している。

予想信用損失は、金融資産に関して契約上支払われるキャッシュ・フロー総額と、受取りが見込まれる将来キャッシュ・フロー総額との差額の割引現在価値を発生確率により加重平均して測定する。支払遅延の存在、支払期日の延長、外部信用調査機関による否定的評価、債務超過等悪化した財政状況や経営成績の評価を含む、一つまたは複数の事象が発生している場合には、信用減損が生じた金融資産として個別の評価を行い、主に過去の貸倒実績や将来の回収可能額等に基づき予想信用損失を測定している。信用減損が生じていない金融資産については、主に過去の貸倒実績に必要に応じて現在及び将来の経済状況等を踏まえて調整した引当率等に基づく集合的評価により予想信用損失を測定している。

売上債権及びその他の債権に関する予想信用損失については、帳簿価額を直接減額せず、貸倒引当金を計上している。予想信用損失の変動額は減損損失として純損益に認識しており、連結損益計算書の「販売費及び一般管理費」に含まれる。なお、金融資産について、全ての回収手段がなくなり、回収可能性がほぼ尽きたと考えられる時点で、金融資産の全体又は一部を回収するという合理的な予想を有していないと判断し、直接償却している。

デリバティブ以外の金融負債

デリバティブ以外の金融負債は、主に償却原価で測定する金融負債に分類している。発行した負債証券についてはその発行日に当初認識し、その他の金融負債は取引日に当初認識している。

当社グループは、デリバティブ以外の金融負債として、社債及び借入金、買入債務等を有しており、公正価値から取引費用(発行費用等)を控除した金額で当初認識し、当初認識後は実効金利法を用いた償却原価により測定している。

金融負債が消滅した場合、つまり契約上の義務が履行されるか、債務が免責、取消又は失効となった場合には、その金融負債の認識を中止している。

デリバティブ及びヘッジ会計

当社グループでは、為替変動リスク及び材料の価格変動リスクをヘッジするために、為替予約取引、通貨オプション取引、通貨スワップ取引及びコモディティスワップ取引等のデリバティブ取引を行っている。

ヘッジ手段とヘッジ対象の関係、リスク管理の目的及び戦略については、ヘッジ開始時点において文書化している。また、ヘッジ手段がヘッジ対象の公正価値やキャッシュ・フローの変動に対して相殺効果があると見込まれるかどうかをヘッジ対象期間中継続的に評価している。

これら全てのデリバティブは公正価値で当初認識し、当初認識後も公正価値で測定しており、その変動はヘッジ会計の適用の種類に応じて以下のとおり処理している。

(a) 公正価値ヘッジ

公正価値ヘッジとは、既に認識された資産又は負債、若しくは未認識の確定約定の公正価値の変動に対するヘッジであり、ヘッジの効果が有効である限り、公正価値ヘッジとして指定したデリバティブの公正価値の変動は、ヘッジ対象の公正価値の変動とともに純損益として認識している。

(b) キャッシュ・フロー・ヘッジ

キャッシュ・フロー・ヘッジとは主に予定取引のヘッジであり、ヘッジの効果が有効である限り、キャッシュ・フロー・ヘッジとして指定したデリバティブの公正価値の変動は、その他の包括利益として認識している。その他の包括利益として認識した金額は、ヘッジ対象である取引が純損益に影響を与える時点で純損益に振り替えている。ヘッジ対象が棚卸資産等の非金融資産の場合においては、その他の包括利益として認識した金額は資産の取得原価の調整として処理している。ヘッジ会計の要件を満たさない場合、ヘッジ手段が失効、売却、終結又は行使された場合並びにヘッジ指定を取り消した場合にはヘッジ会計の適用を中止している。また、予定取引の発生が見込まれなくなった場合、その他の包括利益として認識していた金額は即時に純損益に振り替えている。

(c) ヘッジ会計が適用されていないデリバティブ取引

ヘッジ会計の要件を満たさないデリバティブ取引の公正価値の変動は純損益として認識している。

金融資産と金融負債の相殺

金融資産と金融負債は、認識した金額を相殺する法的に強制力のある権利が存在し、かつ、純額で決済する場合又は資産と負債を同時に決済する意図がある場合にのみ相殺され、連結財政状態計算書において純額で表示している。

(会計方針の変更)

当社グループは、従来IFRS第9号「金融商品」(2009年11月公表、2010年10月改訂)を適用していたが、当連結会計年度の期首よりIFRS第9号「金融商品」(2014年7月改訂)を適用している。IFRS第9号「金融商品」(2014年7月改訂)は、ヘッジ会計、金融商品の分類及び測定を改訂し、金融資産の予想信用損失減損モデルを導入する基準書である。

IFRS第9号「金融商品」(2014年7月改訂)の適用については、経過措置を適用し、適用開始の累積的影響を当連結会計年度の利益剰余金期首残高の修正として認識している。

本基準書の適用による当社グループの財政状態及び経営成績に与える影響は軽微である。

(6) 棚卸資産

棚卸資産は取得原価と正味実現可能価額のいずれか低い方の金額で評価している。棚卸資産の取得原価は、主として移動平均法に基づいて算定している。また、正味実現可能価額とは、通常の営業過程における予想売価から、完成に要する見積原価及び販売に要する見積費用を控除したものをいう。

(7) 有形固定資産

有形固定資産の測定については原価モデルを採用し、取得原価から減価償却累計額及び減損損失累計額を控除した価額をもって計上している。

取得原価には、資産の取得に直接関連する費用、将来の解体、除去及び原状回復費用を含めている。

有形固定資産は、それぞれの見積耐用年数にわたって、定額法により減価償却を行っている。主要な有形固定資産の見積耐用年数は以下のとおりである。

- ・建物及び構築物 2年から60年
- ・機械装置、運搬具及び工具器具備品 2年から20年

なお、見積耐用年数及び減価償却方法等は各年度末に見直しを行い、変更があった場合は、会計上の見積りの変更として将来に向かって適用している。

(8) 無形資産

のれん

当初認識時におけるのれんの測定方法は「(2) 企業結合」に記載している。当初認識後は、取得原価から減損損失累計額を控除した価額をもって計上している。

その他の無形資産

無形資産の測定については原価モデルを採用し、取得原価から償却累計額及び減損損失累計額を控除した価額をもって計上している。個別に取得した無形資産は、当初認識に際し取得原価で測定しており、企業結合で取得した無形資産の取得原価は、取得日現在における公正価値で測定している。

耐用年数を確定できる無形資産は、それぞれの見積耐用年数にわたって、定額法により償却を行っている。主要な無形資産の見積耐用年数は以下のとおりである。

- ・ 自社利用ソフトウェア 主として5年
- ・ マーケティング関連無形資産 5年から20年
- ・ 顧客関連無形資産 2年から21年
- ・ 技術関連無形資産 8年から13年

なお、耐用年数を確定できる無形資産の見積耐用年数及び償却方法等は各年度末に見直しを行い、変更があった場合は、会計上の見積りの変更として将来に向かって適用している。

(9) リース(借手)

リース契約開始時において、その契約にリースが含まれているか否かを契約の実質により判断している。

ファイナンス・リース

契約上、資産の所有に伴うリスクと経済価値を実質的に全て借手に移転するリースは、ファイナンス・リースとして分類している。

リース資産及びリース債務は、公正価値又は最低支払リース料総額の現在価値のいずれか低い金額で当初認識している。

リース資産については、所有権移転が確実である場合は当該資産の見積耐用年数、それ以外の場合は当該リース資産の見積耐用年数又はリース期間のうちいずれか短い方の期間にわたって減価償却している。

オペレーティング・リース

ファイナンス・リース以外のリースはオペレーティング・リースとして分類しており、支払リース料はリース期間にわたって定額法により認識している。

(10) 非金融資産の減損

四半期毎に減損の兆候の有無の判定を行い、減損の兆候がある場合、減損テストを実施している。なお、のれん及び耐用年数を確定できない無形資産については、減損の兆候の有無にかかわらず、毎年、同じ時期に減損テストを実施している。

減損テストは、資産又は資金生成単位ごとに回収可能価額を見積り、帳簿価額と比較することによって行っている。資金生成単位は、他の資産又は資産グループから概ね独立したキャッシュ・インフローを生み出す最小の資産グループとしている。

回収可能価額は、資産又は資金生成単位の処分費用控除後の公正価値と使用価値のいずれが高い金額をいう。使用価値の算定において、税引前の見積将来キャッシュ・フローは、貨幣の時間価値及び当該資産の固有のリスクを反映した税引前の割引率を用いて現在価値に割り引いている。資産又は資金生成単位の回収可能価額が帳簿価額を下回る場合には、その資産について減損損失を認識している。

のれん以外の資産に関しては、過年度に認識された減損損失について、損失の減少又は消滅の可能性を示す兆候が認められる場合、当該資産又は資金生成単位を対象に回収可能価額の見積りを行う。その結果、見積られた回収可能価額が帳簿価額を超える場合には、過年度に減損損失が認識されなかったと仮定した場合に計算される、減価償却費(又は償却費)控除後の帳簿価額を上限として減損損失の戻し入れを行う。

(11) 売却目的で保有する資産

継続的な使用ではなく、主に売却により回収が見込まれる非流動資産又は処分グループのうち、現在の状態で直ちに売却することが可能であり、かつ、売却の可能性が非常に高い場合には、売却目的で保有する資産として分類している。

売却目的で保有する資産は、減価償却又は償却を行わず、帳簿価額と売却費用控除後の公正価値のいずれか低い方の金額で測定している。

(12) 退職後給付

確定給付制度

当社及び一部の子会社は確定給付制度として、確定給付企業年金制度及び退職一時金制度を採用している。確定給付制度については、確定給付制度債務の現在価値から制度資産の公正価値を控除した純額を連結財政状態計算書で資産又は負債として認識している。確定給付制度債務の現在価値は予測単位積増方式により算定しており、割引率は確定給付制度債務と概ね同じ満期を有する優良社債の利回りを使用している。

確定給付資産又は負債の純額の再測定差額は、発生した期にその他の包括利益で認識している。また、過去勤務費用は発生した期に純損益として認識している。

確定拠出制度

当社及び一部の子会社は確定拠出年金制度を採用している。確定拠出年金制度は、雇用主が一定額の掛金を他の独立した企業に拠出し、その拠出額以上の支払について法的又は推定的債務を負わない退職後給付制度である。確定拠出年金制度への拠出は、従業員が勤務を提供した期間に費用処理している。

(13) 引当金

過去の事象の結果として、法的債務又は推定的債務を有しており、当該債務を決済するために経済的資源の流出が生じる可能性が高く、かつ、当該債務の金額の合理的な見積りが可能である場合に引当金を計上している。

なお、債務の決済までの期間が長期となると想定され、貨幣の時間的価値が重要である場合には、決済時に予測される支出額の現在価値により引当金を測定している。現在価値の算出には、貨幣の時間的価値及び当該債務に固有のリスクを反映した税引前の割引率を使用している。

(14) 収益認識

当社グループは、以下の5ステップアプローチに基づき、収益を認識している。

- ステップ1：顧客との契約を識別する。
- ステップ2：契約における履行義務を識別する。
- ステップ3：取引価格を算定する。
- ステップ4：取引価格を契約における別個の履行義務へ配分する。
- ステップ5：履行義務を充足した時点で収益を認識する。

当社グループの製品は、顧客との契約に基づき、主に顧客に製品を販売し検収を受けた時点において履行義務が充足されることから、支配が移転した時点において収益を認識している。支払条件は一般的な条件であり、延払等の支払条件となっている取引で重要なものはない。取引価格の算定においては、顧客への約束した財又はサービスの移転と交換に企業が権利を得ると見込んでいる対価の金額で測定している。なお、約束した対価の金額に重大な金融要素は含まれていない。

当社グループは、本人又は代理人のいずれとして取引を行っているかを、顧客に財又はサービスを移転する前に特定された財又はサービスを支配しているかに基づき判断をしている。その結果、本人として取引を行っているとは判断された場合には、顧客から受け取る対価の総額で収益を表示し、代理人として取引を行っているとは判断された場合は、顧客から受領する対価の総額から第三者のために回収した金額を差し引いた純額で収益を表示している。

(会計方針の変更)

当社グループは、当連結会計年度の期首よりIFRS第15号「顧客との契約から生じる収益」を適用している。IFRS第15号は、収益認識に関する論点を取り扱うための包括的かつ堅牢なフレームワークを提供しており、5ステップアプローチに基づき、顧客との契約から生じる資産及び負債の変動により収益を測定し、財またはサービスに対する支配の移転をもって収益を認識する基準書である。

IFRS第15号の適用については、経過措置を適用し、適用開始の累積的影響を当連結会計年度の利益剰余金期首残高の修正として認識する方法を採用している。

本基準書の適用による当社グループの財政状態及び経営成績に与える影響は軽微である。

(15) 法人所得税

法人所得税費用は当期税金費用と繰延税金費用から構成され、その他の包括利益で認識する項目から生じる場合及び企業結合から生じる場合を除き、純損益で認識している。

当期税金費用は、税務当局に対する納付もしくは税務当局からの還付が予想される金額で測定され、税額の算定に使用する税率及び税法は、期末日までに制定もしくは実質的に制定されているものを適用している。

繰延税金資産及び負債は、資産及び負債の会計上の帳簿価額と税務基準額との一時差異に対して認識している。繰延税金資産は、将来減算一時差異等を利用できるだけの課税所得が生じる可能性が高いと判断した場合に限り認識している。なお、次の一時差異については、繰延税金資産又は負債を認識していない。

- ・ のれんの当初認識から生じる一時差異
- ・ 企業結合以外の取引で、かつ会計上及び税務上のいずれの損益にも影響を及ぼさない取引において生じる資産又は負債の当初認識による一時差異
- ・ 子会社に対する投資に係る将来加算一時差異のうち、当社が解消する時期をコントロールすることができるものであって、かつ、予測可能な期間に当該一時差異を取り崩さないことが確実であるもの
- ・ 子会社及び持分法適用会社に対する投資に係る将来減算一時差異のうち、予測可能な期間内に一時差異が解消しない可能性が高いもの、又は一時差異の使用対象となる課税所得を獲得できる可能性が低いもの

繰延税金資産及び負債は、その一時差異等が解消される時に適用されると予測される税率を使用して測定している。

同一の納税主体において認識された繰延税金資産と繰延税金負債は相殺している。

(16) 1株当たり利益

基本的1株当たり当期利益は、親会社株主に帰属する当期利益を、連結会計年度中の発行済普通株式の期中平均株式数により除して算出している。

(17) 未適用の新会計基準

連結財務諸表の承認日までに新設又は改訂が行われた主な公表済基準書及び解釈指針のうち、当連結会計年度末において未適用の主な基準書は、IFRS第16号「リース」(以下、IFRS第16号)である。

IFRS第16号は、リースの認識、測定、表示及び開示の原則を定めており、借手は原則として全てのリースを連結財政状態計算書に認識する単一のモデルにより会計処理することが求められる。IFRS第16号は2019年1月1日以後開始する事業年度から適用され、当社は2019年4月1日よりIFRS第16号を適用する。IFRS第16号の適用については、経過措置を適用し、適用開始の累積的影響を適用開始日に利益剰余金期首残高の修正として認識する方法を採用する。

当社のリースは、主に不動産の賃借であり、IFRS第16号の適用による翌連結会計年度の期首における連結財政状態計算書に与える影響は、主に使用权資産を認識することによる資産の増加約188億円、主にリース負債を認識することによる負債の増加約191億円及び利益剰余金期首残高の修正による資本の減少約3億円であり、連結損益計算書に与える影響は軽微である。また、連結キャッシュ・フロー計算書については、従来オペレーティング・リースのリース料の支払が営業活動に関するキャッシュ・フローに含まれていたのに対し、IFRS第16号の適用により、主に使用权資産の減価償却費に係る調整が営業活動に関するキャッシュ・フローに含まれ、リース負債の支払が財務活動に関するキャッシュ・フローに含まれることにより、従来の会計基準を適用した場合と比較して、営業活動に関するキャッシュ・フローが増加し、財務活動に関するキャッシュ・フローが減少する影響がある。

4. セグメント情報

(1) 報告セグメントの概要

当社グループの報告セグメントは、当社グループの構成単位のうち分離された財務情報が入手可能であり、取締役会が経営資源の配分の決定及び業績評価のために定期的に検討を行う対象としているものである。

当社グループは、材料から部材、さらに部品へと、製品の加工度に応じた括りによる組織体制の下で事業活動を展開していることから、製品の加工度別に、材料を「機能材料」、部材及び部品を「先端部品・システム」に分類し、これら2つを報告セグメントとしている。

「機能材料」事業では、電子材料、無機材料、樹脂材料、配線板材料等の製造・販売を行っており、「先端部品・システム」事業では、自動車部品、蓄電デバイス・システム、電子部品等の製造・販売を行っている。

(2) 報告セグメントの売上収益、損益及びその他の項目

事業セグメントの会計処理方法は、「注3. 主要な会計方針についての概要」における記載と概ね同一である。

報告セグメントの損益は、営業損益ベースの数値である。

セグメント間の売上収益は概ね市場実勢価格に基づいている。

前連結会計年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

(単位：百万円)

| 項目 | 報告セグメント | | | 調整額 (注) | 合計 |
|-------------|---------|---------------|---------|------------|---------|
| | 機能材料 | 先端部品・ システム | 計 | | |
| 売上収益 | | | | | |
| 外部顧客への売上収益 | 297,051 | 372,183 | 669,234 | - | 669,234 |
| セグメント間の売上収益 | 4,575 | 1,462 | 6,037 | 6,037 | - |
| 合計 | 301,626 | 373,645 | 675,271 | 6,037 | 669,234 |
| セグメント損益 | 46,836 | 612 | 46,224 | 5 | 46,219 |
| 金融収益 | - | - | - | - | 1,160 |
| 金融費用 | - | - | - | - | 2,386 |
| 持分法による投資損益 | - | - | - | - | 3,948 |
| 税引前当期利益 | - | - | - | - | 48,941 |
| その他の項目 | | | | | |
| 減価償却費及び償却費 | 15,364 | 19,357 | 34,721 | - | 34,721 |
| 減損損失 | 120 | 186 | 306 | - | 306 |
| 減損損失の戻入 | 62 | - | 62 | - | 62 |

(注) セグメント損益の調整額は、セグメント間取引消去額である。

当連結会計年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

(単位：百万円)

| 項目 | 報告セグメント | | | 調整額 (注) | 合計 |
|-------------|---------|---------------|---------|------------|---------|
| | 機能材料 | 先端部品・ システム | 計 | | |
| 売上収益 | | | | | |
| 外部顧客への売上収益 | 292,845 | 388,180 | 681,025 | - | 681,025 |
| セグメント間の売上収益 | 4,967 | 3,015 | 7,982 | 7,982 | - |
| 合計 | 297,812 | 391,195 | 689,007 | 7,982 | 681,025 |
| セグメント損益 | 36,858 | 504 | 36,354 | 1 | 36,353 |
| 金融収益 | - | - | - | - | 2,108 |
| 金融費用 | - | - | - | - | 1,651 |
| 持分法による投資損益 | - | - | - | - | 3,690 |
| 税引前当期利益 | - | - | - | - | 40,500 |
| その他の項目 | | | | | |
| 減価償却費及び償却費 | 16,271 | 21,489 | 37,760 | - | 37,760 |
| 減損損失 | 511 | 4,755 | 5,266 | - | 5,266 |

(注) セグメント損益の調整額は、セグメント間取引消去額である。

(3) 製品及びサービスに関する項目

(2) 報告セグメントの売上収益、損益及びその他の項目の中で同様の情報が開示されているため、記載を省略している。

(4) 地域別情報

外部顧客への売上収益の地域別内訳は以下のとおりである。

(単位：百万円)

| 項目 | 前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日) | 当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日) |
|---------|--|--|
| 日本 | 248,233 | 251,634 |
| アジア | 288,816 | 293,548 |
| (うち、中国) | (109,974) | (108,219) |
| その他の地域 | 132,185 | 135,843 |
| 合計 | 669,234 | 681,025 |

(注) 売上収益は顧客の所在地を基礎とし、国又は地域に分類している。

日本及び中国を除き、外部顧客向け売上収益が重要な単一の国及び地域はない。

有形固定資産及び無形資産の地域別内訳は以下のとおりである。

(単位：百万円)

| 項目 | 前連結会計年度 (2018年3月31日) | 当連結会計年度 (2019年3月31日) |
|---------|-------------------------|-------------------------|
| 日本 | 135,311 | 138,403 |
| アジア | 90,298 | 92,144 |
| (うち、中国) | (26,113) | (25,581) |
| その他の地域 | 61,096 | 63,161 |
| 合計 | 286,705 | 293,708 |

(5) 主要な顧客に関する情報

外部顧客への売上収益の10%以上を占める顧客はない。

5. 売上収益

(1) 収益の分解

当社グループの売上収益は、主に顧客との契約から認識された収益であり、当社グループの報告セグメントを主要な製品別に分解した場合の内訳は以下のとおりである。

(単位：百万円)

| 項目 | 当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日) |
|----------------|--|
| 機能材料セグメント | |
| 電子材料 | 92,481 |
| 無機材料 | 34,262 |
| 樹脂材料 | 58,523 |
| 配線板材料 | 79,958 |
| その他 | 27,621 |
| 小計 | 292,845 |
| 先端部品・システムセグメント | |
| 自動車部品 | 141,679 |
| 蓄電デバイス・システム | 180,163 |
| 電子部品 | 41,864 |
| その他 | 24,474 |
| 小計 | 388,180 |
| 合計 | 681,025 |

(注)グループ会社間の内部取引控除後の金額を表示している。

(2) 契約残高

顧客との契約から生じた売上債権及び契約負債の残高は以下のとおりである。

(単位：百万円)

| 項目 | 適用開始日 (2018年4月1日) | 当連結会計年度 (2019年3月31日) |
|------|----------------------|-------------------------|
| 売上債権 | 156,504 | 139,579 |
| 契約負債 | 1,686 | 661 |

当連結会計年度において認識された収益のうち、期首時点で契約負債に含まれていた金額に重要なものはない。

(3) 残存する履行義務に配分された取引価格

当社グループにおける、主な履行義務の当初予想期間は1年以内であるため、実務上の便法を適用し当該開示には含めていない。

(4) 顧客との契約の獲得又は履行のためのコスト

当社グループにおいて、顧客との契約の獲得又は履行のためのコストから認識した資産はない。

6. 企業結合

前連結会計年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

(PCT, LLC, a Caladrius Companyの取得)

企業結合の概要

(a) 被取得企業の名称及びその事業の内容

被取得企業の名称 PCT, LLC, a Caladrius Company

事業の内容 再生医療用細胞の受託製造

(b) 企業結合の主な理由

当社グループは、2018中期経営計画の中で、ライフサイエンス事業について、「材料技術及び診断薬事業を基に将来の基盤事業へ育成」することを基本方針とし、「遺伝子診断、再生医療事業へ新規に参入」することを重点施策としている。

今回のPCT, LLC, a Caladrius Companyの持分取得により、同社の持つブランド力、製造拠点、販売網等のリソースを当社グループに取り込むことで、欧米を含むグローバルで再生医療用細胞の受託製造事業を展開するため。

(c) 取得日

2017年5月19日

(d) 取得企業が被取得企業の支配を獲得した方法

現金を対価とする持分の取得

(e) 結合後企業の名称

取得日付でPCT Cell Therapy Services, LLCへと名称を変更し、2017年10月1日付でHitachi Chemical Advanced Therapeutics Solutions, LLCへと名称を変更している。

(f) 取得した議決権比率

取得日直前に所有していた議決権比率 19.9%

取得日に追加取得した議決権比率 80.1%

取得後の議決権比率 100.0%

(g) 取得企業を決定するに至った主な根拠

当社の連結子会社であるHitachi Chemical Company America, Ltd.が、現金を対価とする持分の取得により、PCT, LLC, a Caladrius Companyの議決権の過半数を取得したため。

取得の対価

(単位：百万円)

| 項目 | 金額 |
|-----------------------|--------|
| 現金及び現金同等物 | 8,828 |
| 取得日直前に保有していた資本持分の公正価値 | 2,173 |
| 合計 | 11,001 |

契約の一部として条件付対価が付されており、被取得企業の特定の業績指標の水準に応じて支払う契約であるが、当社グループは当該業績指標の水準を見積もった結果、条件付対価を認識していない。なお、条件付対価の上限額は5,000千USDである。

子会社株式の取得による支出は以下のとおりである。

(単位：百万円)

| 項目 | 金額 |
|-------------------|-------|
| 現金及び現金同等物による取得の対価 | 8,828 |
| 取得した子会社の現金及び現金同等物 | 521 |
| 子会社株式の取得による支出 | 8,307 |

取得関連費用

企業結合に係る取得関連費用として、前連結会計年度(2016年度)において株式取得に係る業務委託費用等144百万円を連結損益計算書の「その他の費用」に計上している。

段階取得に係る差益

取得日直前に保有していた被取得企業の資本持分を取得日における公正価値で再測定した結果、段階取得に係る差益119百万円を連結損益計算書の「その他の収益」に計上している。

取得した資産及び引き受けた負債

(単位：百万円)

| 項目 | 金額 |
|--------|-------|
| 流動資産 | |
| 売上債権 | 561 |
| その他 | 1,283 |
| 非流動資産 | |
| 有形固定資産 | 1,747 |
| 無形資産 | 2,186 |
| 繰延税金資産 | 2,634 |
| その他 | 18 |
| 資産合計 | 8,429 |
| 流動負債 | |
| 買入債務 | 226 |
| その他 | 1,084 |
| 非流動負債 | 513 |
| 負債合計 | 1,823 |
| 資本 | 6,606 |

取得により生じたのれん

(単位：百万円)

| 項目 | 金額 |
|--------------------------|--------|
| 取得の対価 | 11,001 |
| 当社グループが取得した識別可能な純資産の公正価値 | 6,606 |
| 取得により生じたのれん | 4,395 |

のれんは、今後期待される将来の超過収益力から発生したものである。認識されたのれんのうち、税務上損金算入が見込まれるものはない。

なお、条件付対価、取得した資産及び引き受けた負債、並びにのれんは第3四半期連結累計期間(2017年度)において公正価値評価及び取得原価の配分が完了していなかったため、暫定的な会計処理を行っていたが、当第4四半期連結会計期間(2017年度)に確定している。

当社グループへの業績に与える影響

連結損益計算書に計上されている取得日以降の被取得企業の「売上収益」は4,778百万円、「当期損失」は253百万円である。

(ISOLITE GmbHの取得)

企業結合の概要

(a) 被取得企業の名称及びその事業の内容

被取得企業の名称 ISOLITE GmbH

事業の内容 自動車・航空機・産業用途の断熱部品の製造・販売

(b) 企業結合の主な理由

当社グループは、2018中期経営計画の中で、自動車部材事業について、「グローバルトップサプライヤーになるための基盤強化」を基本方針とし、海外における開発・製造・営業拠点の拡充等に取り組んでいる。

今回のISOLITE GmbHの持分取得により、国内での既存の販売網を通じて同社の断熱部品を日本の自動車メーカーへ拡販するとともに、同社の有する欧州での販売網や製造拠点を活用して当社の自動車部材の欧州展開を加速するため。

(c) 取得日

2017年7月3日

(d) 取得企業が被取得企業の支配を獲得した方法

現金を対価とする持分の取得

(e) 結合後企業の名称

ISOLITE GmbH

(f) 取得した議決権比率

取得日直前に所有していた議決権比率 0.0%

取得後の議決権比率 100.0%

(g) 取得企業を決定するに至った主な根拠

現金を対価とする持分の取得により、当社がISOLITE GmbHの議決権の過半数を取得したため。

取得の対価

(単位：百万円)

| 項目 | 金額 |
|-----------|-------|
| 現金及び現金同等物 | 9,353 |

子会社株式の取得による支出は以下のとおりである。

(単位：百万円)

| 項目 | 金額 |
|-------------------|-------|
| 現金及び現金同等物による取得の対価 | 9,353 |
| 取得した子会社の現金及び現金同等物 | 229 |
| 子会社株式の取得による支出 | 9,124 |

取得関連費用

企業結合に係る取得関連費用として、株式取得に係る業務委託費用等253百万円を前連結会計年度(2016年度)の連結損益計算書及び当連結会計年度(2017年度)の連結損益計算書の「その他の費用」に計上している。

取得した資産及び引き受けた負債、非支配持分

(単位：百万円)

| 項目 | 金額 |
|--------|--------|
| 流動資産 | |
| 売上債権 | 2,058 |
| 棚卸資産 | 2,421 |
| その他 | 588 |
| 非流動資産 | |
| 有形固定資産 | 4,132 |
| 無形資産 | 6,561 |
| その他 | 3 |
| 資産合計 | 15,763 |
| 流動負債 | |
| 短期借入金 | 2,215 |
| その他 | 2,072 |
| 非流動負債 | |
| 繰延税金負債 | 1,902 |
| その他 | 2,100 |
| 負債合計 | 8,289 |
| 非支配持分 | 9 |
| 親会社持分 | 7,465 |

取得により生じたのれん

(単位：百万円)

| 項目 | 金額 |
|--------------------------|-------|
| 取得の対価 | 9,353 |
| 当社グループが取得した識別可能な純資産の公正価値 | 7,465 |
| 取得により生じたのれん | 1,888 |

のれんは、今後期待される将来の超過収益力から発生したものである。認識されたのれんのうち、税務上損金算入が見込まれるものはない。

なお、取得した資産及び引き受けた負債、並びにのれんは第2四半期連結会計期間(2017年度)において取得原価の配分が完了していなかったため、暫定的な会計処理を行っていたが、第3四半期連結会計期間(2017年度)に確定している。

当社グループへの業績に与える影響

被取得企業の取得日から2018年3月31日までの経営成績は重要性が乏しいため記載を省略している。

(Thai Storage Battery Public Company Limitedの取得)

企業結合の概要

(a) 被取得企業の名称及びその事業の内容

対象となる企業の名称 Thai Storage Battery Public Company Limited

事業の内容 鉛蓄電池の製造・販売

(b) 企業結合の主な理由

当社グループは、2018中期経営計画の中で、蓄電システム事業について、「規模の拡大によるグローバル市場での地位確立」を基本方針とし、製品力の強化、拠点拡充等に取り組んでいる。

今回のThai Storage Battery Public Company Limitedの株式取得により、同社の持つブランド力、製造拠点、販売網等を活用し、東南アジアにおける自動車用及び産業用鉛蓄電池事業の一層の強化、拡大を図るため。

(c) 取得日

2017年9月8日

(d) 取得企業が被取得企業の支配を獲得した方法

現金を対価とする株式の取得

(e) 結合後企業の名称

Thai Storage Battery Public Company Limited

なお、2019年1月3日付でHitachi Chemical Storage Battery (Thailand) Public Company Limitedへと名称を変更している。

(f) 取得した議決権比率

取得日直前に所有していた議決権比率 43.9%

取得日に追加取得した議決権比率 43.0%

取得後の議決権比率 86.9%

(g) 取得企業を決定するに至った主な根拠

当社及び当社の連結子会社であるSiam Magi Co., Ltd.が、現金を対価とする株式の取得により、Thai Storage Battery Public Company Limitedの議決権の過半数を取得したため。

取得の対価

(単位：百万円)

| 項目 | 金額 |
|-----------------------|--------|
| 現金及び現金同等物 | 7,835 |
| 取得日直前に保有していた資本持分の公正価値 | 8,162 |
| 合計 | 15,997 |

子会社株式の取得による支出は以下のとおりである。

(単位：百万円)

| 項目 | 金額 |
|-------------------|-------|
| 現金及び現金同等物による取得の対価 | 7,835 |
| 取得した子会社の現金及び現金同等物 | 748 |
| 子会社株式の取得による支出 | 7,087 |

取得関連費用

企業結合に係る取得関連費用として、株式取得に係る業務委託費用等343百万円を前連結会計年度(2016年度)の連結損益計算書及び当連結会計年度(2017年度)の連結損益計算書の「その他の費用」に計上している。

段階取得に係る差益

取得日直前に保有していた被取得企業の資本持分を取得日における公正価値で再測定した結果、段階取得に係る差益312百万円を連結損益計算書の「その他の収益」に計上している。

取得した資産及び引き受けた負債、非支配持分

(単位：百万円)

| 項目 | 金額 |
|--------|--------|
| 流動資産 | |
| 売上債権 | 1,747 |
| 棚卸資産 | 3,959 |
| その他 | 1,002 |
| 非流動資産 | |
| 有形固定資産 | 5,988 |
| 無形資産 | 5,661 |
| その他 | 1,062 |
| 資産合計 | 19,419 |
| 流動負債 | |
| 短期借入金 | 4,255 |
| その他 | 2,332 |
| 非流動負債 | 1,449 |
| 負債合計 | 8,036 |
| 非支配持分 | 122 |
| 親会社持分 | 11,261 |

取得により生じたのれん

(単位：百万円)

| 項目 | 金額 |
|--------------------------|--------|
| 取得の対価 | 15,997 |
| 非支配持分 | 1,483 |
| 当社グループが取得した識別可能な純資産の公正価値 | 11,261 |
| 取得により生じたのれん | 6,219 |

非支配持分は、被取得企業の識別可能な純資産の公正価値に対する非支配株主の持分割合で測定している。

のれんは、今後期待される将来の超過収益力及び既存事業とのシナジー効果から発生したものである。認識されたのれんのうち、税務上損金算入が見込まれるものはない。

なお、取得した資産及び引き受けた負債、並びにのれんは第1四半期連結会計期間(2018年度)において取得原価の配分が完了していなかったため、暫定的な会計処理を行っていたが、第2四半期連結会計期間(2018年度)に確定している。

また、「注23. 主要な減損損失」に記載のとおり、回収不能見込額について減損損失を計上している。

当社グループへの業績に与える影響

連結損益計算書に計上されている取得日以降の被取得企業の「売上収益」は9,900百万円、「当期損失」は987百万円である。

(協和メデックス株式会社の取得)

企業結合の概要

(a) 被取得企業の名称及びその事業の内容

被取得企業の名称 協和メデックス株式会社

事業の内容 体外診断用医薬品(診断薬)の開発・製造・販売

(b) 企業結合の主な理由

当社グループは、2018中期経営計画の中で、ライフサイエンス事業について「材料技術及び診断薬事業を基に将来の基盤事業へ育成」することを基本方針とし、事業基盤の強化に取り組んでいる。

今回の協和メデックス株式会社の株式取得により、同社の有する幅広い製品を取り入れ当社の診断薬事業の製品ラインナップの拡充を図り、併せて、当社グループの米国、欧州及び東南アジア等の販売網を活用して同社の製品をグローバルに展開するとともに、同社の国内販売網を活用した当社の診断薬の販売促進を通じ事業の拡大を進めるため。

(c) 取得日

2018年1月4日

(d) 取得企業が被取得企業の支配を獲得した方法

現金を対価とする株式の取得

(e) 結合後企業の名称

協和メデックス株式会社

(f) 取得した議決権比率

取得日直前に保有していた議決権比率 0.0%

取得後の議決権比率 66.6%

(g) 取得企業を決定するに至った主な根拠

現金を対価とする株式の取得により、当社が協和メデックス株式会社の議決権の過半数を取得したため。

取得の対価

(単位：百万円)

| 項目 | 金額 |
|-----------|--------|
| 現金及び現金同等物 | 10,161 |
| 長期未払金(注) | 5,097 |
| 合計 | 15,258 |

(注) 当期に子会社の非支配持分株主に付与している売建プット・オプションである。なお、行使期間は取得日より3年が経過した日から3ヶ月間である。

子会社株式の取得による支出は以下のとおりである。

(単位：百万円)

| 項目 | 金額 |
|-------------------|--------|
| 現金及び現金同等物による取得の対価 | 10,161 |
| 取得した子会社の現金及び現金同等物 | 1,325 |
| 子会社株式の取得による支出 | 8,836 |

取得関連費用

企業結合に係る取得関連費用として、株式取得に係る業務委託費用等182百万円を連結損益計算書(2017年度)の「その他の費用」に計上している。

取得した資産及び引き受けた負債

(単位：百万円)

| 項目 | 金額 |
|--------|--------|
| 流動資産 | |
| 売上債権 | 2,709 |
| 棚卸資産 | 3,146 |
| その他 | 1,440 |
| 非流動資産 | |
| 有形固定資産 | 3,136 |
| 無形資産 | 6,033 |
| その他 | 1,117 |
| 資産合計 | 17,581 |
| 流動負債 | |
| 短期借入金 | 5,800 |
| その他 | 2,364 |
| 非流動負債 | |
| 繰延税金負債 | 1,710 |
| その他 | 1,920 |
| 負債合計 | 11,794 |
| 資本 | 5,787 |

取得により生じたのれん

(単位：百万円)

| 項目 | 金額 |
|--------------------------|--------|
| 取得の対価(注) | 15,258 |
| 当社グループが取得した識別可能な純資産の公正価値 | 5,787 |
| 取得により生じたのれん | 9,471 |

(注) 子会社の非支配持分株主に付与している売建プット・オプションを含んでいる。当該プット・オプションは「長期未払金」として支払予定額で評価しており、非支配持分との差額はのれんとして処理している。

のれんは、今後期待される将来の超過収益力から発生したものである。認識されたのれんのうち、税務上損金算入が見込まれるものはない。

なお、当第4四半期連結会計期間(2017年度)において取得原価の配分が完了しており、取得した資産及び引き受けた負債、並びにのれんの金額は確定している。

当社グループへの業績に与える影響

被取得企業の取得日から2018年3月31日までの経営成績は重要性が乏しいため記載を省略している。

なお、PCT, LLC, a Caladrius Company、ISOLITE GmbH、Thai Storage Battery Public Company Limited及び協和メデックス株式会社の各社の企業結合が期首に行われたと仮定した場合の、当社グループの連結損益計算書の「売上収益」は688,766百万円、「当期利益」は36,130百万円である。なお、当該注記は監査証明を受けていない。

当連結会計年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

当連結会計年度において重要な企業結合はない。

7. 売上債権

(単位：百万円)

| 項目 | 前連結会計年度 (2018年3月31日) | 当連結会計年度 (2019年3月31日) |
|--------------|-------------------------|-------------------------|
| 売掛金 | 143,102 | 126,983 |
| 受取手形及び電子記録債権 | 14,297 | 13,448 |
| 貸倒引当金 | 895 | 852 |
| 合計 | 156,504 | 139,579 |

8. リース

(1) ファイナンス・リース(借手側)

機械装置等を中心とした設備を賃借している。

将来の最低支払リース料総額及びその現在価値は以下のとおりである。

(単位：百万円)

| 項目 | 前連結会計年度 (2018年3月31日) | | 当連結会計年度 (2019年3月31日) | |
|---------------------|-------------------------|-------------------------|-------------------------|-------------------------|
| | 最低支払 リース料総額 | 最低支払 リース料総額 の現在価値 | 最低支払 リース料総額 | 最低支払 リース料総額 の現在価値 |
| 1年以内 | 743 | 681 | 814 | 755 |
| 1年超5年以内 | 1,713 | 1,601 | 1,849 | 1,749 |
| 5年超 | 279 | 249 | 184 | 163 |
| 合計 | 2,735 | 2,531 | 2,847 | 2,667 |
| 金融費用等控除額 | 204 | - | 180 | - |
| 最低支払リース料総額の 現在価値 | 2,531 | 2,531 | 2,667 | 2,667 |

(2) オペレーティング・リース(借手側)

不動産、事務機器等を賃借しており、一部の契約には更新オプションやエスカレーション条項が付されている。

解約不能オペレーティング・リースに係る将来の最低支払リース料総額は以下のとおりである。

(単位：百万円)

| 項目 | 前連結会計年度 (2018年3月31日) | 当連結会計年度 (2019年3月31日) |
|---------|-------------------------|-------------------------|
| 1年以内 | 893 | 969 |
| 1年超5年以内 | 1,815 | 2,340 |
| 5年超 | 3,044 | 2,841 |
| 合計 | 5,752 | 6,150 |

費用として計上したオペレーティング・リース(解約可能なものを含む)の支払リース料は以下のとおりである。

(単位：百万円)

| 項目 | 前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日) | 当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日) |
|--------|--|--|
| 支払リース料 | 6,690 | 7,043 |

9. 棚卸資産

(単位：百万円)

| 項目 | 前連結会計年度 (2018年3月31日) | 当連結会計年度 (2019年3月31日) |
|-----|-------------------------|-------------------------|
| 製品 | 42,802 | 42,992 |
| 仕掛品 | 17,177 | 19,125 |
| 原材料 | 25,431 | 25,487 |
| 合計 | 85,410 | 87,604 |

前連結会計年度及び当連結会計年度において計上した棚卸資産の評価減の金額は、それぞれ743百万円、568百万円である。

10. 持分法で会計処理されている投資

個々に重要性がない共同支配企業及び関連会社に関する要約財務情報は以下のとおりである。なお、金額は当社グループの持分比率勘案後の合計値である。

(1) 共同支配企業

(単位：百万円)

| 項目 | 前連結会計年度 (2018年3月31日) | 当連結会計年度 (2019年3月31日) |
|---------|-------------------------|-------------------------|
| 投資の帳簿価額 | 6,495 | 6,990 |

(単位：百万円)

| 項目 | 前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日) | 当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日) |
|----------|--|--|
| 当期利益 | 4,233 | 3,690 |
| その他の包括利益 | 212 | 287 |
| 当期包括利益 | 4,021 | 3,977 |

(2) 関連会社

(単位：百万円)

| 項目 | 前連結会計年度 (2018年3月31日) | 当連結会計年度 (2019年3月31日) |
|---------|-------------------------|-------------------------|
| 投資の帳簿価額 | - | - |

(単位：百万円)

| 項目 | 前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日) | 当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日) |
|----------|--|--|
| 当期利益 | 285 | - |
| その他の包括利益 | - | - |
| 当期包括利益 | 285 | - |

11.有形固定資産

帳簿価額の増減は以下のとおりである。

(単位：百万円)

| 項目 | 土地 | 建物及び構築物 | 機械装置、運搬具及び工具器具備品 | 建設仮勘定 | 合計 |
|-------------------|--------|---------|------------------|--------|---------|
| 2017年4月1日時点の帳簿価額 | 21,335 | 60,893 | 89,524 | 14,881 | 186,633 |
| 新規取得 | 529 | 771 | 4,371 | 34,460 | 40,131 |
| 企業結合による取得 | 2,838 | 4,103 | 6,971 | 437 | 14,349 |
| 建設仮勘定からの振替 | - | 6,070 | 29,626 | 35,696 | - |
| 減価償却費 | - | 5,440 | 25,502 | - | 30,942 |
| 減損損失 | 53 | 102 | 151 | - | 306 |
| 減損損失の戻入 | - | 62 | - | - | 62 |
| 売却又は処分 | 283 | 363 | 453 | - | 1,099 |
| 為替換算差額 | 121 | 633 | 708 | 32 | 1,494 |
| その他 | 86 | 15 | 31 | 10 | 112 |
| 2018年3月31日時点の帳簿価額 | 24,401 | 66,642 | 105,063 | 14,104 | 210,210 |
| 新規取得 | 1 | 925 | 6,003 | 42,234 | 49,163 |
| 企業結合による取得 | - | - | - | - | - |
| 建設仮勘定からの振替 | - | 7,199 | 32,125 | 39,324 | - |
| 減価償却費 | - | 5,634 | 27,398 | - | 33,032 |
| 減損損失 | - | 416 | 2,420 | 65 | 2,901 |
| 減損損失の戻入 | - | - | - | - | - |
| 売却又は処分 | 363 | 232 | 471 | 97 | 1,163 |
| 為替換算差額 | 11 | 270 | 259 | 54 | 572 |
| その他 | 1 | 97 | 94 | 22 | 24 |
| 2019年3月31日時点の帳簿価額 | 24,049 | 68,311 | 112,549 | 16,820 | 221,729 |

減価償却費は、連結損益計算書の「売上原価」及び「販売費及び一般管理費」に計上している。減損損失は連結損益計算書の「その他の費用」に、減損損失の戻入は「その他の収益」に計上している。

有形固定資産に計上しているファイナンス・リース資産は主に「機械装置、運搬具及び工具器具備品」に含まれており、2017年4月1日、2018年3月31日及び2019年3月31日時点の帳簿価額はそれぞれ1,802百万円、3,185百万円及び4,156百万円である。

建設中の有形固定資産に関する支出額は、建設仮勘定として記載している。

取得原価、減価償却累計額及び減損損失累計額は以下のとおりである。

(単位：百万円)

| 項目 | 土地 | 建物及び構築物 | 機械装置、運搬具及び工具器具備品 | 建設仮勘定 | 合計 |
|------------------|--------|---------|------------------|--------|---------|
| 取得原価 | | | | | |
| 2017年4月1日 | 22,570 | 175,459 | 479,653 | 15,021 | 692,703 |
| 2018年3月31日 | 25,584 | 190,463 | 525,352 | 14,188 | 755,587 |
| 2019年3月31日 | 25,141 | 197,430 | 549,869 | 16,974 | 789,414 |
| 減価償却累計額及び減損損失累計額 | | | | | |
| 2017年4月1日 | 1,235 | 114,566 | 390,129 | 140 | 506,070 |
| 2018年3月31日 | 1,183 | 123,821 | 420,289 | 84 | 545,377 |
| 2019年3月31日 | 1,092 | 129,119 | 437,320 | 154 | 567,685 |

12. 無形資産

帳簿価額の増減は以下のとおりである。

(単位：百万円)

| 項目 | のれん | ソフトウェア | マーケティング関連無形資産 | 顧客関連無形資産 | 技術関連無形資産 | その他の無形資産 | 合計 |
|-------------------|--------|--------|---------------|----------|----------|----------|--------|
| 2017年4月1日時点の帳簿価額 | 12,030 | 3,518 | 10,837 | 2,919 | 675 | 3,708 | 33,687 |
| 新規取得 | - | 2,322 | - | - | - | 498 | 2,820 |
| 企業結合による取得 | 21,597 | 190 | 2,247 | 13,931 | 4,442 | 172 | 42,579 |
| 償却費 | - | 1,338 | 735 | 868 | 320 | 328 | 3,589 |
| 売却又は処分 | - | 8 | - | - | - | 1 | 9 |
| 為替換算差額 | 535 | 4 | 954 | 243 | 13 | 67 | 1,656 |
| その他 | - | 3 | - | - | - | 652 | 649 |
| 2018年3月31日時点の帳簿価額 | 34,162 | 4,691 | 13,303 | 16,225 | 4,784 | 3,330 | 76,495 |
| 新規取得 | - | 2,112 | - | - | - | 1,242 | 3,354 |
| 企業結合による取得 | 376 | - | 409 | 132 | - | - | 165 |
| 減損損失 | 2,309 | 7 | - | - | - | 2 | 2,318 |
| 償却費 | - | 1,671 | 755 | 1,149 | 542 | 532 | 4,649 |
| 売却又は処分 | - | 7 | - | - | - | 2 | 9 |
| 為替換算差額 | 71 | 6 | 440 | 171 | 27 | 13 | 728 |
| その他 | - | 32 | - | - | - | 33 | 1 |
| 2019年3月31日時点の帳簿価額 | 32,158 | 5,144 | 11,699 | 14,773 | 4,215 | 3,990 | 71,979 |

償却費は、連結損益計算書の「売上原価」及び「販売費及び一般管理費」に計上している。減損損失は連結損益計算書の「その他の費用」に計上している。

重要な自己創設無形資産及び耐用年数を確定できない重要な無形資産はない。

研究開発費は、連結損益計算書の「売上原価」及び「販売費及び一般管理費」に計上している。前連結会計年度及び当連結会計年度において費用として計上した研究開発費は、それぞれ30,839百万円、32,608百万円である。

無形資産に計上しているファイナンス・リース資産は「その他の無形資産」に含まれており、2017年4月1日、2018年3月31日及び2019年3月31日時点の帳簿価額はそれぞれ20百万円、37百万円及び27百万円である。

取得原価、償却累計額及び減損損失累計額は以下のとおりである。

(単位：百万円)

| 項目 | のれん | ソフトウェア | マーケティング 関連無形資産 | 顧客関連 無形資産 | 技術関連 無形資産 | その他の 無形資産 | 合計 |
|--------------------|--------|--------|-------------------|--------------|--------------|--------------|---------|
| 取得原価 | | | | | | | |
| 2017年4月1日 | 12,899 | 17,875 | 11,132 | 3,855 | 1,036 | 6,064 | 52,861 |
| 2018年3月31日 | 34,991 | 20,653 | 14,347 | 17,168 | 5,346 | 7,306 | 99,811 |
| 2019年3月31日 | 35,351 | 22,487 | 13,445 | 16,835 | 5,306 | 8,405 | 101,829 |
| 償却累計額及び 減損損失累計額 | | | | | | | |
| 2017年4月1日 | 869 | 14,357 | 295 | 936 | 361 | 2,356 | 19,174 |
| 2018年3月31日 | 829 | 15,962 | 1,044 | 943 | 562 | 3,976 | 23,316 |
| 2019年3月31日 | 3,193 | 17,343 | 1,746 | 2,062 | 1,091 | 4,415 | 29,850 |

企業結合により取得したのれんは、減損の兆候の有無にかかわらず毎期減損テストを実施している。
資金生成単位グループに配分された重要なのれんの帳簿価額は以下のとおりである。

(単位：百万円)

| 報告セグメント | 資金生成単位グループ | 前連結会計年度 (2018年3月31日) | 当連結会計年度 (2019年3月31日) |
|-----------|-------------------------|-------------------------|-------------------------|
| 先端部品・システム | 蓄電デバイス・システム事業 (イタリア) | 7,437 | 7,098 |
| | 蓄電デバイス・システム事業 (タイ) | - | 4,190 |
| | ライフサイエンス事業(米国) | 4,232 | 4,421 |
| | ライフサイエンス事業(日本) | 9,471 | 9,471 |

のれんが配分された資金生成単位グループの回収可能価額は使用価値により算定しており、使用価値は経営者により承認された事業計画を基礎とした税引前の将来キャッシュ・フローの見積額を、税引前の加重平均資本コストを基に算定した割引率で現在価値に割引いて算定している。事業計画は外部情報に基づき過去の経験を反映したものであり、計画期間は原則として5年を限度としているが、ライフサイエンス事業(米国)においては属する産業の特性等から、5年を超えた計画期間に基づき使用価値を算定している。事業計画期間後のキャッシュ・フローは、資金生成単位グループが属する市場の長期平均成長率の範囲内で見積った成長率をもとに算定している。なお、前連結会計年度において、Hitachi Chemical Storage Battery (Thailand) Public Company Limitedの取得により生じたのれんは、取得した資産及び引き受けた負債への取得原価の配分が完了していなかったため、資金生成単位グループ(蓄電デバイス・システム事業(タイ))へ配分していない。

各資金生成単位グループの使用価値の算定に使用した割引率は以下のとおりである。

(単位：%)

| 報告セグメント | 資金生成単位グループ | 前連結会計年度 (2018年3月31日) | 当連結会計年度 (2019年3月31日) |
|-----------|-------------------------|-------------------------|-------------------------|
| 先端部品・システム | 蓄電デバイス・システム事業 (イタリア) | 11.9 | 11.3 |
| | 蓄電デバイス・システム事業 (タイ) | - | 12.3 |
| | ライフサイエンス事業(米国) | 17.0 | 16.6 |
| | ライフサイエンス事業(日本) | 10.0 | 9.5 |

これらののれんについては、減損テストに用いた主要な仮定が合理的な範囲で変動があった場合にも、その使用価値が帳簿価額を下回る可能性は低いと判断している。

13. その他の金融資産及びその他の金融負債

(1) その他の金融資産

(単位：百万円)

| 項目 | 前連結会計年度 (2018年3月31日) | 当連結会計年度 (2019年3月31日) |
|---------------|-------------------------|-------------------------|
| 償却原価で測定する金融資産 | | |
| 差入敷金保証金 | 2,582 | 2,666 |
| 貸付金 | 4,477 | 2,248 |
| 未収入金 | 13,796 | 15,483 |
| その他 | 3,798 | 2,885 |
| FVTPLの金融資産 | | |
| デリバティブ | 450 | 133 |
| 有価証券等 | 1,543 | 1,696 |
| FVTOCIの金融資産 | | |
| 有価証券 | 13,787 | 11,983 |
| 合計 | 40,433 | 37,094 |
| 流動資産合計 | 22,350 | 20,549 |
| 非流動資産合計 | 18,083 | 16,545 |

FVTOCIの金融資産の主な銘柄の公正価値は以下のとおりである。

(単位：百万円)

| 前連結会計年度(2018年3月31日) | |
|----------------------|-------|
| 銘柄 | 金額 |
| 東京応化工業(株) | 4,080 |
| Biocartis Group NV | 2,257 |
| 日東紡績(株) | 1,221 |
| 南通海立電子有限公司 | 1,147 |
| (株)双洋 | 660 |
| イビデン(株) | 523 |
| 内蒙古海立電子材料有限公司 | 455 |
| (株)カイノス | 344 |
| IM Holdings II, Inc. | 322 |
| Silatronix, Inc. | 240 |

(単位：百万円)

| 当連結会計年度(2019年3月31日) | |
|---------------------|-------|
| 銘柄 | 金額 |
| 東京応化工業(株) | 3,230 |
| Biocartis Group NV | 2,013 |
| 南通海立電子有限公司 | 1,214 |
| 日東紡績(株) | 1,072 |
| (株)双洋 | 672 |
| イビデン(株) | 563 |
| 内蒙古海立電子材料有限公司 | 531 |
| (株)フジ機工 | 279 |
| 三国商事(株) | 242 |
| 八光電子工業(株) | 229 |

各連結会計年度に売却したFVTOCIの金融資産の売却日における公正価値及び売却に係る累積利得又は損失は以下のとおりである。なお、売却に係る累積利得又は損失(税引後)をその他の包括利益累計額から利益剰余金へ振り替えている。

(単位：百万円)

| 項目 | 前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日) | 当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日) |
|--------------------|--|--|
| 売却日における公正価値 | 1,026 | 586 |
| 売却に係る累積利得又は損失(税引前) | 593 | 473 |
| 売却に係る累積利得又は損失(税引後) | 407 | 329 |

(2) その他の金融負債

(単位：百万円)

| 項目 | 前連結会計年度 (2018年3月31日) | 当連結会計年度 (2019年3月31日) |
|---------------|-------------------------|-------------------------|
| 償却原価で測定する金融負債 | | |
| 未払金 | 17,748 | 15,093 |
| 預り金 | 2,637 | 2,707 |
| リース債務 | 2,531 | 2,667 |
| 長期未払金 | 5,097 | 5,097 |
| その他 | 88 | 314 |
| FVTPLの金融負債 | | |
| デリバティブ | 259 | 88 |
| その他(注) | 17,098 | 12,581 |
| 合計 | 45,458 | 38,547 |
| 流動負債合計 | 21,095 | 18,630 |
| 非流動負債合計 | 24,363 | 19,917 |

(注) 子会社の非支配持分株主に付与している売建プット・オプションに係る金融負債である。詳細は、「注19．資本及びその他の資本項目」に記載している。

14. 繰延税金及び法人所得税費用

法人所得税費用の内訳は以下のとおりである。

(単位：百万円)

| 項目 | 前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日) | 当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日) |
|-----------------------|--|--|
| 法人所得税費用 | | |
| 当期税金 | 11,711 | 10,531 |
| 繰延税金 | 109 | 518 |
| (繰延税金内訳) | | |
| 一時差異等の発生と解消 | 1,406 | 128 |
| 未認識の繰延税金資産の増減 | 2,455 | 646 |
| 税率の変更による繰延税金資産及び負債の調整 | 1,158 | - |
| 合計 | 11,820 | 11,049 |

(前連結会計年度)

2017年12月22日に米国において2018年1月1日以降の連邦法人税率を引き下げる税制改正法が成立したことに伴い、当連結会計年度の繰延税金資産及び繰延税金負債の計算に使用した法定実効税率は従来の35%から、改正後の連邦法人税21%を基礎とした法定実効税率に変更している。

法定実効税率と実際負担税率との調整は以下のとおりである。

| 項目 | 前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日) | 当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日) |
|-----------------------|--|--|
| 法定実効税率 | 30.7% | 30.5% |
| 交際費等永久に損金に算入されない項目 | 0.7 | 0.7 |
| 海外子会社の税率差異 | 4.1 | 5.0 |
| 研究開発費の税額控除 | 2.0 | 2.0 |
| 未認識の繰延税金資産の増減 | 5.0 | 1.6 |
| のれんの減損 | - | 1.7 |
| 税率の変更による繰延税金資産及び負債の調整 | 2.4 | - |
| その他(純額) | 1.5 | 0.2 |
| 実際負担税率 | 24.2% | 27.3% |

法定実効税率は、日本における法人税、住民税及び事業税に基づき、前連結会計年度は30.7%、当連結会計年度は30.5%を適用している。

繰延税金資産及び繰延税金負債の内訳並びに増減内容は以下のとおりである。

(前連結会計年度)

(単位：百万円)

| 項目 | 期首残高 (2017年 4月1日) | 純損益として 認識 | その他の 包括利益 として認識 | 企業結合 | 期末残高 (2018年 3月31日) |
|-------------|-------------------------|--------------|-----------------------|-------|--------------------------|
| 繰延税金資産 | | | | | |
| 退職給付に係る負債 | 5,305 | 134 | 65 | 465 | 5,701 |
| 未払賞与 | 2,955 | 41 | - | - | 2,996 |
| 減価償却費及び償却費 | 2,746 | 585 | - | 50 | 3,381 |
| 企業結合に係る無形資産 | 5,930 | 1,194 | - | 3,562 | 8,298 |
| その他 | 7,162 | 279 | 45 | 679 | 7,607 |
| 繰延税金資産総額 | 24,098 | 981 | 110 | 4,756 | 27,983 |
| 繰延税金負債 | | | | | |
| 退職給付に係る資産 | 3,155 | 100 | 1,052 | 137 | 4,444 |
| FVTOCIの金融資産 | 1,249 | - | 122 | 4 | 1,375 |
| 企業結合に係る無形資産 | 3,957 | 312 | - | 5,764 | 9,409 |
| その他 | 3,546 | 601 | 33 | 502 | 3,414 |
| 繰延税金負債総額 | 11,907 | 813 | 1,141 | 6,407 | 18,642 |
| 繰延税金資産純額 | 12,191 | 168 | 1,031 | 1,651 | 9,341 |

(当連結会計年度)

(単位：百万円)

| 項目 | 期首残高 (2018年 4月1日) | 純損益として 認識 | その他の 包括利益 として認識 | 企業結合 | 期末残高 (2019年 3月31日) |
|-------------|-------------------------|--------------|-----------------------|------|--------------------------|
| 繰延税金資産 | | | | | |
| 退職給付に係る負債 | 5,701 | 384 | 72 | - | 5,389 |
| 未払賞与 | 2,996 | 63 | - | - | 2,933 |
| 減価償却費及び償却費 | 3,381 | 297 | - | - | 3,084 |
| 企業結合に係る無形資産 | 8,298 | 1,710 | - | - | 6,588 |
| その他 | 7,607 | 1,912 | 12 | - | 9,507 |
| 繰延税金資産総額 | 27,983 | 542 | 60 | - | 27,501 |
| 繰延税金負債 | | | | | |
| 退職給付に係る資産 | 4,444 | 429 | 754 | - | 4,769 |
| FVTOCIの金融資産 | 1,375 | - | 513 | - | 862 |
| 企業結合に係る無形資産 | 9,409 | 1,095 | - | 108 | 8,206 |
| その他 | 3,414 | 1,567 | 133 | - | 4,848 |
| 繰延税金負債総額 | 18,642 | 43 | 108 | 108 | 18,685 |
| 繰延税金資産純額 | 9,341 | 585 | 48 | 108 | 8,816 |

子会社に対する投資に係る将来加算一時差異については、解消する時期をコントロールすることができ、かつ、予測可能な期間に当該一時差異を取り崩さないことが確実であることから、原則として繰延税金負債を認識していない。当該将来加算一時差異の金額は、前連結会計年度は93,846百万円、当連結会計年度は104,233百万円である。

当社グループは、予定される繰延税金負債の取崩、予測される将来課税所得及びタックスプランニングに基づき繰延税金資産の回収可能性を評価している。回収可能性の評価の結果、一部の将来減算一時差異、繰越欠損金及び繰越税額控除については繰延税金資産を認識していない。

繰延税金資産を認識していない将来減算一時差異、繰越欠損金及び繰越税額控除は以下のとおりである。

(単位：百万円)

| 項目 | 前連結会計年度 (2018年3月31日) | 当連結会計年度 (2019年3月31日) |
|----------|-------------------------|-------------------------|
| 将来減算一時差異 | 13,289 | 15,233 |
| 繰越欠損金 | 13,715 | 10,551 |
| 繰越税額控除 | 374 | 227 |
| 合計 | 27,378 | 26,011 |

繰延税金資産を認識していない繰越欠損金及び繰越税額控除の繰越期限は以下のとおりである。

(単位：百万円)

| 項目 | 前連結会計年度 (2018年3月31日) | 当連結会計年度 (2019年3月31日) |
|----------|-------------------------|-------------------------|
| 繰越欠損金 | | |
| 5年以内 | 9,459 | 7,424 |
| 5年超10年以内 | 3,726 | 2,726 |
| 10年超 | 530 | 401 |
| 合計 | 13,715 | 10,551 |
| 繰越税額控除 | | |
| 5年以内 | 292 | 139 |
| 5年超10年以内 | 82 | 88 |
| 合計 | 374 | 227 |

15. 買入債務

(単位：百万円)

| 項目 | 前連結会計年度 (2018年3月31日) | 当連結会計年度 (2019年3月31日) |
|--------------|-------------------------|-------------------------|
| 買掛金 | 79,205 | 74,349 |
| 支払手形及び電子記録債務 | 6,088 | 5,866 |
| 合計 | 85,293 | 80,215 |

16. 社債及び借入金

(単位：百万円)

| 項目 | 前連結会計年度 (2018年3月31日) | 当連結会計年度 (2019年3月31日) | 平均利率 (注) 1 | 返済期限 |
|----------------|-------------------------|-------------------------|---------------|-------------|
| 短期借入金 | 38,986 | 39,448 | 1.45% | - |
| 1年内に返済予定の長期借入金 | 3,965 | 2,453 | 0.83% | - |
| 社債 (注) 2 | 29,889 | 29,904 | - | - |
| 長期借入金 | 23,604 | 23,270 | 1.84% | 2020年～2025年 |
| 合計 | 96,444 | 95,075 | - | - |
| 流動負債合計 | 42,951 | 41,901 | - | - |
| 非流動負債合計 | 53,493 | 53,174 | - | - |

(注) 1. 平均利率については期末の利率を基に算出している。

2. 社債の銘柄別明細は以下のとおりである。

(単位：百万円)

| 発行会社名 | 銘柄 | 発行年月日 | 前連結会計年度 (2018年3月31日) | 当連結会計年度 (2019年3月31日) | 利率 | 担保 | 償還期限 |
|---------|---------------|----------------|-------------------------|-------------------------|-------|----|----------------|
| 日立化成(株) | 第9回 無担保社債 | 2012年 3月1日 | 9,979 | 9,985 | 1.19% | なし | 2022年 3月1日 |
| 日立化成(株) | 第10回 無担保社債 | 2017年 12月5日 | 19,910 | 19,919 | 0.38% | なし | 2027年 12月3日 |
| 合計 | - | - | 29,889 | 29,904 | - | - | - |

17. 引当金

内訳及び増減は以下のとおりである。

(単位：百万円)

| 項目 | 資産除去債務 |
|--------------|--------|
| 2018年4月1日残高 | 1,737 |
| 期中増加額(繰入) | 115 |
| 期中減少額(目的使用) | 4 |
| 期中減少額(戻入) | - |
| その他 | 13 |
| 2019年3月31日残高 | 1,861 |
| 流動負債 | - |
| 非流動負債 | 1,861 |

資産除去債務

事務所・敷地等の賃借契約に付随する原状回復義務や、有形固定資産撤去時に有害物質を除去する法的義務等を有する場合に、当該義務を履行するに際して必要となると見込まれる金額を引当金として計上している。

18. 従業員給付

(1) 退職給付制度の概要

当社及び一部の子会社は従業員の退職給付に備え、確定給付型の年金制度及び退職一時金制度、加えて確定拠出型の年金制度を設けている。

確定給付型の年金制度の主なものには確定給付企業年金法に基づく企業年金制度であり、当社には、企業年金制度を運営する日立化成企業年金基金(以下、「基金」)への掛金の拠出等の義務が課されている。基金は当社より独立した機関であり、積立金の運用については運用管理規定により定められている契約内容に基づき運用受託機関が行う。また、基金は運用に関する基本方針を作成するとともに、基本方針に整合した運用指針を作成し運用受託機関に交付すること等により積立金の運用を安全かつ効率的に行う義務を果たしている。当社及び一部の子会社は確定給付型の年金制度の一部について運用リスクを緩和し、制度を将来に亘って安定的に維持することを目的としてキャッシュバランスプラン制度を採用している。

退職一時金制度は退職者に対し一時金を支給するもので、給付は主に各従業員の職能資格に基づいて付与される職能ポイント累計により算定され、当社及び一部の子会社が直接退職者への支給義務を負っている。当社は退職一時金制度について退職給付に係る負債の圧縮及び従業員の退職給付についての十分な支払準備を行うことを目的として退職給付信託を設定している。

確定拠出型の年金制度は加入期間にわたり会社が掛金を拠出し、加入者自らが積立金の運用を行う制度である。給付は受託機関が行い、当社及び一部の子会社の義務は掛金の拠出に限定される。

なお、従業員の退職等に際して割増退職金を支払う場合がある。

(2) 確定給付制度

確定給付制度債務の現在価値及び制度資産の公正価値の変動は以下のとおりである。

(単位：百万円)

| 項目 | 前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日) | 当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日) |
|---------------------------|--|--|
| 確定給付制度債務の期首残高 | 93,731 | 97,382 |
| 勤務費用 | 4,096 | 4,411 |
| 利息費用 | 432 | 443 |
| 確定給付制度の再測定 | | |
| 人口統計上の仮定の変更により生じた数理計算上の差異 | 164 | 116 |
| 財務上の仮定の変更により生じた数理計算上の差異 | 295 | 126 |
| その他 | 58 | 438 |
| 給付支払額 | 5,495 | 5,685 |
| 過去勤務費用 | 36 | - |
| その他(注) | 4,181 | 89 |
| 確定給付制度債務の期末残高 | 97,382 | 96,034 |

(注) 前連結会計年度において発生した企業結合による影響額は、3,759百万円である。

(単位：百万円)

| 項目 | 前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日) | 当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日) |
|----------------|--|--|
| 制度資産の公正価値の期首残高 | 88,685 | 93,634 |
| 利息収益 | 425 | 439 |
| 確定給付制度の再測定 | | |
| 制度資産に係る収益 | 2,566 | 739 |
| 会社拠出額 | 3,108 | 3,047 |
| 給付支払額 | 3,723 | 3,738 |
| その他(注) | 2,573 | 17 |
| 制度資産の公正価値の期末残高 | 93,634 | 94,104 |

(注) 前連結会計年度において発生した企業結合による影響額は、2,270百万円である。

確定給付制度に関する連結財政状態計算書の計上額は以下のとおりである。

(単位：百万円)

| 項目 | 前連結会計年度 (2018年3月31日) | 当連結会計年度 (2019年3月31日) |
|----------------------|-------------------------|-------------------------|
| 確定給付制度債務の現在価値 | | |
| 確定給付型の年金制度に係る債務の現在価値 | 74,333 | 72,450 |
| 退職一時金制度に係る債務の現在価値 | 23,049 | 23,584 |
| 制度資産の公正価値 | | |
| 確定給付型の年金制度に係る資産の公正価値 | 86,684 | 87,140 |
| 退職一時金制度に係る資産の公正価値 | 6,950 | 6,964 |
| 合計 | 3,748 | 1,930 |
| 退職給付に係る資産 | 13,489 | 15,651 |
| 退職給付に係る負債 | 17,237 | 17,581 |

当社グループの制度資産の運用は、年金給付及び一時金給付の支払いを将来にわたり確実にを行うため、許容されるリスクのもとで必要とされる収益を長期的に確保し、健全な資産形成を図ることを目的としている。

運用の目的を達成するために、基金の成熟度合、資産の積立水準、財政上の許容範囲、当社グループのリスク負担能力及び株式市場・金融市場・為替相場の動向等を考慮し、中長期の観点から予測される収益率等を目標として設定している。当目標を安定的に達成するために、資産の収益率の予測、標準偏差、資産間の相関係数等を考慮し、資産構成割合を決定している。運用の基本方針、資産構成割合は必要に応じて見直しを行う。

制度資産の公正価値の内訳は以下のとおりである。

(単位：百万円)

| 項目 | 前連結会計年度(2018年3月31日) | | |
|----------|------------------------------|--------------------------------------|--------|
| | 活発な市場における 公表市場価格が あるもの | 活発な市場における 公表市場価格が ないもの (注)1 | 合計 |
| 債券(国内) | - | 37,542 | 37,542 |
| 債券(海外) | 369 | 18,853 | 19,222 |
| 株式(国内) | 746 | 8,689 | 9,435 |
| 株式(海外) | - | 8,313 | 8,313 |
| 短期資金(注)2 | 3,072 | 4,867 | 7,939 |
| その他 | 1,002 | 10,181 | 11,183 |
| 合計 | 5,189 | 88,445 | 93,634 |

(注) 1. 合同運用投資で運用している制度資産の公正価値は、活発な市場における公表市場価格がないものに含めている。

2. 短期資金には、預金、コールローン等が含まれている。

(単位：百万円)

| 項目 | 当連結会計年度(2019年3月31日) | | |
|----------|------------------------------|--------------------------------------|--------|
| | 活発な市場における 公表市場価格が あるもの | 活発な市場における 公表市場価格が ないもの (注)1 | 合計 |
| 債券(国内) | - | 38,193 | 38,193 |
| 債券(海外) | 54 | 20,344 | 20,398 |
| 株式(国内) | 328 | 7,896 | 8,224 |
| 株式(海外) | - | 8,686 | 8,686 |
| 短期資金(注)2 | 3,768 | 2,960 | 6,728 |
| その他 | 776 | 11,099 | 11,875 |
| 合計 | 4,926 | 89,178 | 94,104 |

(注) 1. 合同運用投資で運用している制度資産の公正価値は、活発な市場における公表市場価格がないものに含めている。

2. 短期資金には、預金、コールローン等が含まれている。

数値計算に使用した主要な仮定は以下のとおりである。

(単位：％)

| 項目 | 前連結会計年度 (2018年3月31日) | 当連結会計年度 (2019年3月31日) |
|-----|-------------------------|-------------------------|
| 割引率 | 0.4 | 0.4 |

仮に割引率が0.5%変化した場合における確定給付制度債務の増減額は以下のとおりである。なお、この感応度分析は、他の前提条件が一定であることを前提としているが、実際は他の前提条件の変化が感応度分析に影響する可能性がある。

(単位：百万円)

| 項目 | | 前連結会計年度 (2018年3月31日) | 当連結会計年度 (2019年3月31日) |
|-----|------------|-------------------------|-------------------------|
| 割引率 | 0.5%上昇した場合 | 5,613 | 5,593 |
| | 0.5%低下した場合 | 6,216 | 5,864 |

確定給付制度債務の加重平均デュレーションは以下のとおりである。

(単位：年)

| 項目 | 前連結会計年度 (2018年3月31日) | 当連結会計年度 (2019年3月31日) |
|---------|-------------------------|-------------------------|
| デュレーション | 12.9 | 12.8 |

翌連結会計年度における確定給付制度への予想拠出額は3,015百万円である。

(3) 確定拠出制度

確定拠出制度への拠出に係る費用計上額は以下のとおりである。

(単位：百万円)

| 項目 | 前連結会計年度 (2018年3月31日) | 当連結会計年度 (2019年3月31日) |
|--------------------|-------------------------|-------------------------|
| 確定拠出制度への拠出に係る費用計上額 | 1,359 | 1,466 |

(4) 従業員給付費用

前連結会計年度及び当連結会計年度における従業員給付費用の合計金額は、それぞれ117,698百万円及び121,075百万円であり、主に連結損益計算書の「売上原価」及び「販売費及び一般管理費」に計上している。

19. 資本及びその他の資本項目

(1) 資本金及び自己株式

発行可能株式総数、発行済株式総数及び自己株式数は以下のとおりである。なお、発行済株式は全額払込済である。

| 項目 | 前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日) | 当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日) |
|----------|--|--|
| 株式の種類 | 無額面普通株式 | 無額面普通株式 |
| 発行可能株式総数 | 800,000,000株 | 800,000,000株 |
| 発行済株式総数 | | |
| 期首 | 208,364,913株 | 208,364,913株 |
| 期中増減 | - | - |
| 期末 | 208,364,913株 | 208,364,913株 |
| 自己株式数 | | |
| 期首 | 136,862株 | 140,908株 |
| 期中増減 | 4,046株 | 2,437株 |
| 期末 | 140,908株 | 143,345株 |

(2) 資本剰余金

資本準備金及びその他資本剰余金である。

(3) 非支配持分へ付与されたプット・オプション

当社は、子会社の非支配持分株主に対して当該非支配持分の売建プット・オプションを付与している。当該プット・オプションの対象となっている非支配持分は当該プット・オプションに係る金融負債に振替え、非支配持分と金融負債の差額は資本剰余金の減少として処理している。当該金融負債は公正価値により認識され、前連結会計年度末及び当連結会計年度末における金額は、それぞれ17,098百万円、12,581百万円である。

当該金融負債の公正価値は将来キャッシュ・フローを現在価値に割り引いて算出しており、公正価値の変動額は資本剰余金の増減額として認識することとしている。

当該金融負債の公正価値のヒエラルキーのレベルはレベル3である。また、公正価値のヒエラルキー及び評価プロセスについては「注28. 金融商品及び関連する開示」に記載している。

(4) 利益剰余金

利益準備金及びその他利益剰余金である。

(5) その他の包括利益累計額

内訳は以下のとおりである。

FVTOCIの金融資産

取得価額と公正価値との差額である。

確定給付制度の再測定

数理計算上の仮定の変更及び実績修正による確定給付制度債務の現在価値の変動額、並びに制度資産に係る収益の予定と実績との差額である。

在外営業活動体の換算差額

外貨建てで作成された在外営業活動体の財務諸表を表示通貨である日本円に換算する際に生じた為替換算差額である。

キャッシュ・フロー・ヘッジ

キャッシュ・フロー・ヘッジとして指定されたデリバティブ取引の公正価値の変動額のうち有効と認められる部分である。

20. その他の包括利益

内訳項目ごとの組替調整額及び税効果額は以下のとおりである。

(単位：百万円)

| 項目 | 前連結会計年度 (自 2017年 4月 1日 至 2018年 3月31日) | 当連結会計年度 (自 2018年 4月 1日 至 2019年 3月31日) |
|-------------------------|---|---|
| 純損益に振り替えられることのない項目 | | |
| FVTOCIの金融資産の公正価値の純変動額 | | |
| 当期発生額 | 1,003 | 1,221 |
| 税効果額 | 313 | 375 |
| 小計 | 690 | 846 |
| 確定給付制度の再測定 | | |
| 当期発生額 | 2,164 | 1,167 |
| 税効果額 | 686 | 385 |
| 小計 | 1,478 | 782 |
| 合計 | 2,168 | 64 |
| 純損益に振り替えられる可能性のある項目 | | |
| 在外営業活動体の換算差額 | | |
| 当期発生額 | 2,271 | 550 |
| 組替調整額 | - | 497 |
| 税効果調整前 | 2,271 | 1,047 |
| 税効果額 | 103 | 68 |
| 小計 | 2,168 | 979 |
| キャッシュ・フロー・ヘッジの公正価値の純変動額 | | |
| 当期発生額 | 197 | 282 |
| 組替調整額 | 354 | 148 |
| 資産の取得原価調整額 | 105 | - |
| 税効果調整前 | 262 | 430 |
| 税効果額 | 81 | 132 |
| 小計 | 181 | 298 |
| 持分法によるその他の包括利益 | | |
| 当期発生額 | 212 | 287 |
| 合計 | 1,775 | 990 |
| その他の包括利益合計 | 3,943 | 1,054 |

21. 剰余金の配当

(1) 配当金支払額

| 決議 | 株式の種類 | 配当金の総額 (百万円) | 1株当たり 配当額(円) | 基準日 | 効力発生日 | 配当の原資 |
|---------------------|-------|-----------------|-----------------|------------|-------------|-------|
| 2017年5月24日 取締役会 | 普通株式 | 6,247 | 30 | 2017年3月31日 | 2017年5月26日 | 利益剰余金 |
| 2017年10月25日 取締役会 | 普通株式 | 6,247 | 30 | 2017年9月30日 | 2017年11月30日 | 利益剰余金 |
| 2018年5月22日 取締役会 | 普通株式 | 6,247 | 30 | 2018年3月31日 | 2018年5月24日 | 利益剰余金 |
| 2018年10月22日 取締役会 | 普通株式 | 6,247 | 30 | 2018年9月30日 | 2018年11月28日 | 利益剰余金 |

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌連結会計年度となるもの

| 決議 | 株式の種類 | 配当金の総額 (百万円) | 1株当たり 配当額(円) | 基準日 | 効力発生日 | 配当の原資 |
|--------------------|-------|-----------------|-----------------|------------|-----------|-------|
| 2019年5月31日 取締役会 | 普通株式 | 6,247 | 30 | 2019年3月31日 | 2019年6月4日 | 利益剰余金 |

22. その他の収益及びその他の費用

(1) その他の収益

(単位：百万円)

| 項目 | 前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日) | 当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日) |
|----------|--|--|
| 事業再編等利益 | - | 1,053 |
| 材料作業屑処分益 | 1,042 | 348 |
| 補助金収入 | 280 | 249 |
| 固定資産売却益 | 527 | 230 |
| その他 | 3,919 | 1,517 |
| 合計 | 5,768 | 3,397 |

(2) その他の費用

(単位：百万円)

| 項目 | 前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日) | 当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日) |
|----------------|--|--|
| 減損損失 | 306 | 5,266 |
| 特別調査費用 (注) 1 | - | 3,059 |
| 土壌処理費用 | - | 2,099 |
| 競争法等関連費用 (注) 2 | 9,917 | 1,668 |
| その他 | 6,056 | 3,574 |
| 合計 | 16,279 | 15,666 |

(注) 1. 当社製品の一部における不適切な検査等の判明を受け、外部の専門家等から構成される特別調査委員会を設置し、その原因究明及び再発防止策を策定した。当社は、当該特別調査委員会の調査及び関連する費用等を特別調査費用として計上している。

2. アルミ電解コンデンサ等の取引についての独占禁止法違反に関する費用である。

23. 主要な減損損失

前連結会計年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

重要な減損損失の計上はない。

当連結会計年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

(単位：百万円)

| 報告セグメント | 用途 | 地域 | 種類 | 減損損失 |
|-----------|-----------|-------------|----------------------|-------|
| 先端部品・システム | 蓄電池の事業用資産 | 日本 | 建物及び構築物 | 347 |
| | | | 機械装置、運搬具及び 工具器具備品 | 464 |
| | | タイ (注) 1 | 機械装置、運搬具及び 工具器具備品 | 1,140 |
| | その他(注) 2 | タイ | のれん | 2,309 |

(注) 1. 当初の事業計画で想定していた将来キャッシュ・フローが見込めなくなったため、帳簿価額を回収可能価額まで減額し、当該減少額を減損損失として連結損益計算書の「その他の費用」に計上している。なお、回収可能価額は、使用価値により算定しており、使用価値は将来キャッシュ・フローを税引前の加重平均資本コスト6.8%で現在価値に割り引いて算定している。

2. 原価の高騰に伴うビジネス環境悪化による Hitachi Chemical Storage Battery (Thailand) Public Company Limitedの減損損失として連結損益計算書の「その他の費用」に計上している。なお、回収可能価額は使用価値に基づき評価しており、使用価値は経営者により承認された事業計画を基礎とした税引前の将来キャッシュ・フローの見積額を、税引前の加重平均資本コストを基に算定した割引率で現在価値に割り引いて算定している。事業計画は外部情報に基づき過去の経験を反映したものであり、計画期間は5年としている。事業計画期間後のキャッシュ・フローは、資金生成単位グループが属する市場の長期平均成長率の範囲内で見積った成長率を基に算定している。なお、使用価値の算定にあたり、将来キャッシュ・フローを割引率12.6%で割り引いている。

24. 金融収益及び金融費用

(1) 金融収益

(単位：百万円)

| 項目 | 前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日) | 当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日) |
|---------------|--|--|
| 受取利息 | | |
| 償却原価で測定する金融資産 | 682 | 901 |
| 受取配当金 | | |
| FVTOCIの金融資産 | 370 | 315 |
| 有価証券等関連損益 | | |
| FVTPLの金融資産 | 80 | 60 |
| 為替差益(注) | - | 704 |
| その他の金融収益 | 28 | 128 |
| 合計 | 1,160 | 2,108 |

(注) 為替差益には通貨関連のデリバティブ取引に係る損益が含まれている。

(2) 金融費用

(単位：百万円)

| 項目 | 前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日) | 当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日) |
|---------------|--|--|
| 支払利息 | | |
| 償却原価で測定する金融負債 | 1,537 | 1,510 |
| 有価証券等関連損益 | | |
| FVTPLの金融資産 | 10 | 14 |
| 為替差損(注) | 487 | - |
| その他の金融費用 | 352 | 127 |
| 合計 | 2,386 | 1,651 |

(注) 為替差損には通貨関連のデリバティブ取引に係る損益が含まれている。

25. 1株当たり利益

1株当たり当期利益及びその算定上の基礎は以下のとおりである。

| 項目 | 前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日) | 当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日) |
|-------------------------|--|--|
| 親会社株主に帰属する当期利益 (百万円) | 36,324 | 28,723 |
| 発行済普通株式の期中平均株式数 (千株) | 208,226 | 208,223 |
| 基本的1株当たり当期利益 (円) | 174.45 | 137.94 |

(注) 1. 基本的1株当たり当期利益は、親会社株主に帰属する当期利益を連結会計年度中の発行済普通株式の期中平均株式数により除して算出している。

2. 希薄化後1株当たり当期利益については、潜在株式が存在しないため記載していない。

26. キャッシュ・フロー情報

(1) 現金及び現金同等物

内訳は以下のとおりであり、前連結会計年度及び当連結会計年度の連結財政状態計算書における「現金及び現金同等物」の残高と連結キャッシュ・フロー計算書における「現金及び現金同等物」の残高は一致している。

(単位：百万円)

| 項目 | 前連結会計年度 (2018年3月31日) | 当連結会計年度 (2019年3月31日) |
|-----------|-------------------------|-------------------------|
| 現金及び預金 | 58,906 | 60,267 |
| 関係会社預け金 | 25,131 | 41,025 |
| 現金及び現金同等物 | 84,037 | 101,292 |

(2) 非資金取引

前連結会計年度及び当連結会計年度において重要な非資金取引(現金及び現金同等物を使用しない投資及び財務取引)はない。

(3) 財務活動に係る負債の調整表

財務活動に係る負債の増減は、以下のとおりである。

前連結会計年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

(単位：百万円)

| 項目 | 期首残高 (2017年 4月1日) | キャッシュ・ フロー | 非資金変動 | | | 期末残高 (2018年 3月31日) |
|-------------|-------------------------|---------------|-------|-------|-----|--------------------------|
| | | | 企業結合 | 為替変動 | その他 | |
| 短期借入金 | 21,100 | 12,142 | 4,952 | 792 | - | 38,986 |
| 長期借入金 | 14,822 | 10,287 | 2,201 | 259 | - | 27,569 |
| 社債 | 9,974 | 19,906 | - | - | 9 | 29,889 |
| 財務活動による負債合計 | 45,896 | 42,335 | 7,153 | 1,051 | 9 | 96,444 |

当連結会計年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

(単位：百万円)

| 項目 | 期首残高 (2018年 4月1日) | キャッシュ・ フロー | 非資金変動 | | | 期末残高 (2019年 3月31日) |
|-------------|-------------------------|---------------|-------|-------|-----|--------------------------|
| | | | 企業結合 | 為替変動 | その他 | |
| 短期借入金 | 38,986 | 1,628 | - | 1,166 | - | 39,448 |
| 長期借入金 | 27,569 | 1,837 | - | 9 | - | 25,723 |
| 社債 | 29,889 | - | - | - | 15 | 29,904 |
| 財務活動による負債合計 | 96,444 | 209 | - | 1,175 | 15 | 95,075 |

27. 関連当事者

(1) 親会社及び主要な子会社

当社の親会社及び主要な子会社は、「第1(企業の概況) 4(関係会社の状況) (1) 親会社 (2) 連結子会社」に記載している。

(2) 関連当事者との取引

当社グループと関連当事者との間の重要な取引は以下のとおりである。

前連結会計年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

(単位:百万円)

| 種類 | 会社の名称 | 関連当事者との関係 | 取引内容 | 取引金額 | 期末残高 |
|-------------|-------------------------------|-----------------|----------------------------|----------------|--------|
| 親会社 | (株)日立製作所 | 当社製品の販売先、資金の預入先 | 日立グループ・プーリング制度による資金の預入(注)1 | 31,050 (注)2 | 15,162 |
| 同一の親会社を持つ会社 | Hitachi America Capital, Ltd. | 資金の借入先 | 日立グループ・資金融通制度による資金の借入(注)1 | 10,624 (注)2 | 10,624 |

(注) 1. 市場金利を勘案して利率を合理的に決定している。

2. 取引金額については、前期末時点との差引増減金額を表示している。

当連結会計年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

(単位:百万円)

| 種類 | 会社の名称 | 関連当事者との関係 | 取引内容 | 取引金額 | 期末残高 |
|-------------|-------------------------------|-----------------|----------------------------|----------------|--------|
| 親会社 | (株)日立製作所 | 当社製品の販売先、資金の預入先 | 日立グループ・プーリング制度による資金の預入(注)1 | 15,218 (注)2 | 30,380 |
| 同一の親会社を持つ会社 | Hitachi America Capital, Ltd. | 資金の借入先 | 日立グループ・資金融通制度による資金の借入(注)1 | 2,584 (注)2 | 13,208 |

(注) 1. 市場金利を勘案して利率を合理的に決定している。

2. 取引金額については、前期末時点との差引増減金額を表示している。

(3) 主要な経営幹部に対する報酬

(単位:百万円)

| 項目 | 前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日) | 当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日) |
|-------|--|--|
| 短期給付 | 827 | 778 |
| 退職後給付 | 24 | - |

28. 金融商品及び関連する開示

(1) 財務上のリスク

当社グループは、世界各地において幅広い分野にわたる事業活動を行っていることから、市場リスク、信用リスク及び流動性リスク等の様々なリスクによる影響を受ける可能性があり、これらの財務上のリスクを回避もしくは低減するためにリスク管理を行っている。

市場リスク(為替や金利等の変動リスク)

外貨建ての取引に係る為替及び金利変動リスクを低減するために、デリバティブ取引を利用している。

なお、当社はデリバティブ取引について、取引権限及び取引限度額等を定めたデリバティブ取引管理規程に従って担当部署が取引を行い、取引の内容及び時価等の状況は管掌役員が定期的に取締役会に報告している。子会社においても当社のデリバティブ取引管理規程に準じて同様の管理を行っている。

(a) 為替リスク

外貨建ての営業取引や金融取引における為替変動リスクを低減するために、為替予約取引、通貨オプション取引及び通貨スワップ取引を利用している。

前連結会計年度末及び当連結会計年度末に当社グループが保有する外貨建金融商品につき、その他全ての変数が一定であることを前提として、日本円が米ドルに対して1%円安となった場合における当社グループの連結損益計算書の税引前当期利益への影響額(為替感応度)は以下のとおりである。

(単位：百万円)

| 項目 | 前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日) | 当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日) |
|---------|--|--|
| 税引前当期利益 | 61 | 48 |

(b) 金利リスク

運転資金及び設備投資資金の調達や資金運用における金利変動リスクを低減するために、借入金の固定金利と変動金利の適切なバランスを維持することや、必要に応じて金利スワップ取引等のデリバティブ取引を利用している。

なお、当社グループは、変動金利の有利子負債を超える現金及び現金同等物を維持しており、現状においても金利支払が当社グループの損益に与える影響は軽微である。したがって現在の金利リスクは当社グループにとって重要なものではないと考えており、金利感応度分析の結果については記載を省略している。

(c) 株価変動リスク

市場性のある有価証券について価格変動リスクを低減するために、定期的に時価や取引先企業の財務状況等を把握し、取引先企業との関係を勘案して保有状況の継続的な見直しを行っている。

前連結会計年度末及び当連結会計年度末に当社グループが保有する上場株式について、その他全ての変数が一定であることを前提として、株価が1%下落した場合における当社グループの連結包括利益計算書のその他の包括利益(税効果考慮前)への影響額(株価感応度)は以下のとおりである。

(単位：百万円)

| 項目 | 前連結会計年度 (自 2017年 4月 1日 至 2018年 3月31日) | 当連結会計年度 (自 2018年 4月 1日 至 2019年 3月31日) |
|----------|---|---|
| その他の包括利益 | 89 | 72 |

信用リスク(取引先の契約不履行等に係るリスク)

当社グループの営業活動から生じる売上債権及びその他の債権は顧客の信用リスクに晒されている。売上債権について、与信管理規程及び債権管理規程に従い担当部署が取引先の状況を定期的にモニタリングし、取引先ごとの期日管理及び残高管理を行うとともに、財務状況の悪化等による回収懸念の早期把握を行うことでリスクの低減を図っている。子会社においても当社の与信管理規程及び債権管理規程に準じて同様の管理を行っている。さらに市場リスクを軽減する目的で行うデリバティブ取引については、取引相手先である金融機関の信用リスクに晒されている。

信用リスクの最大エクスポージャーは、連結財政状態計算書における減損損失控除後の金融資産の帳簿価額と保証債務残高の合計額である。債務保証残高は、「注30. コミットメント及び偶発事象」に記載している。

前連結会計年度末における、期日が経過しているが減損していない金融資産の年齢分析は以下のとおりである。

(単位：百万円)

| 項目 | 前連結会計年度 (2018年 3月31日) |
|-----------|--------------------------|
| 30日以内 | 3,920 |
| 30日超90日以内 | 1,051 |
| 90日超 1年以内 | 129 |
| 1年超 | - |
| 合計 | 5,100 |

当社グループでは金融資産が減損した場合、減損を当該金融資産の帳簿価額から直接減額せず貸倒引当金を計上している。貸倒引当金の増減は以下のとおりである。

(単位：百万円)

| 項目 | 前連結会計年度 (自 2017年 4月 1日 至 2018年 3月31日) |
|-------------|---|
| 期首残高 | 943 |
| 期中増加額(繰入) | 640 |
| 期中減少額(目的使用) | 199 |
| 期中減少額(戻入) | 500 |
| その他 | 23 |
| 期末残高 | 907 |

取引先の財務内容、支払の遅延状況等を勘案して個別に減損した金融資産の減損前残高は、前連結会計年度2,325百万円であり、432百万円の貸倒引当金を計上している。

当連結会計年度の売上債権及びその他の債権に係る貸倒引当金の増減内容と、貸倒引当金に対応する売上債権及びその他の債権の総額での帳簿価額の増減内容は、以下のとおりである。なお、その他の債権には、主にリース債権並びに短期貸付金、未収入金、償却原価で測定する負債性証券及び長期貸付金等の償却原価で測定される金融資産が含まれる。

(単位：百万円)

| 売上債権 | 貸倒引当金 | | | 総額での帳簿価額 | | |
|--------------------------|-------|-------|-----|----------|-------|---------|
| | 集合的評価 | 個別的評価 | 合計 | 集合的評価 | 個別的評価 | 合計 |
| 2018年3月31日 (会計方針の変更前) | 466 | 429 | 895 | 155,081 | 2,318 | 157,399 |
| 会計方針の変更による 累積的影響額 | 7 | - | 7 | - | - | - |
| 2018年4月1日 (会計方針の変更後) | 459 | 429 | 888 | 155,081 | 2,318 | 157,399 |
| 期中増減(純額) | 67 | 249 | 182 | 16,297 | 102 | 16,195 |
| 信用減損(注)1 | 27 | 189 | 162 | 189 | 189 | - |
| 直接償却(注)2 | 2 | 2 | 4 | 2 | 3 | 5 |
| その他(注)3 | 3 | 15 | 12 | 779 | 11 | 768 |
| 2019年3月31日 | 500 | 352 | 852 | 137,814 | 2,617 | 140,431 |

- (注) 1. 信用減損が生じた金融資産に関する貸倒引当金については、個別的評価により貸倒引当金を測定するため、集合的評価から振替えている。
2. 金融資産の全体又は一部分を回収するという合理的な予想を有していないと判断された場合、直接償却として認識を中止している。
3. 主に為替変動の影響等が含まれている。

(単位：百万円)

| その他の債権 | 貸倒引当金 | | | 総額での帳簿価額 | | |
|--------------------------|-------|-------|----|----------|-------|--------|
| | 集合的評価 | 個別的評価 | 合計 | 集合的評価 | 個別的評価 | 合計 |
| 2018年3月31日 (会計方針の変更前) | 9 | 1 | 10 | 20,345 | 1 | 20,346 |
| 会計方針の変更による 累積的影響額 | - | - | - | - | - | - |
| 2018年4月1日 (会計方針の変更後) | 9 | 1 | 10 | 20,345 | 1 | 20,346 |
| 期中増減(純額) | 3 | 3 | 0 | 1,189 | 13 | 1,202 |
| 信用減損(注)1 | 0 | 3 | 3 | 13 | 13 | - |
| 直接償却(注)2 | - | - | - | - | - | - |
| その他(注)3 | 1 | - | 1 | 129 | - | 129 |
| 2019年3月31日 | 11 | 1 | 12 | 19,272 | 1 | 19,273 |

- (注) 1. 信用減損が生じた金融資産に関する貸倒引当金については、個別的評価により貸倒引当金を測定するため、集合的評価から振替えている。
2. 金融資産の全体又は一部分を回収するという合理的な予想を有していないと判断された場合、直接償却として認識を中止している。
3. 主に為替変動の影響等が含まれている。

流動性リスク(支払期日に支払を実行できなくなるリスク)

当社は各部署からの報告に基づき適時に資金繰計画を作成するとともに、手許流動性の売上収益に対する水準を適切に保つこと等により流動性リスクを管理している。子会社においても資金繰計画を元にグループ金融等を利用し流動性リスクを回避している。

当社グループが保有するデリバティブ以外の金融負債の期日別の残高は以下のとおりである。

(単位：百万円)

| 項目 | 前連結会計年度(2018年3月31日) | | | |
|---------|---------------------|---------|--------|--------|
| | 1年以内 | 1年超5年以内 | 5年超 | 合計 |
| 買入債務 | 85,293 | - | - | 85,293 |
| 社債及び借入金 | 43,588 | 34,902 | 20,475 | 98,965 |
| その他(注) | - | 17,098 | - | 17,098 |

(注) 子会社の非支配持分株主に付与している売建プット・オプションに係る金融負債である。なお、金額については公正価値により記載している。詳細は、「注19. 資本及びその他の資本項目」に記載している。

(単位：百万円)

| 項目 | 当連結会計年度(2019年3月31日) | | | |
|---------|---------------------|---------|--------|--------|
| | 1年以内 | 1年超5年以内 | 5年超 | 合計 |
| 買入債務 | 80,215 | - | - | 80,215 |
| 社債及び借入金 | 42,605 | 34,334 | 20,328 | 97,267 |
| その他(注) | - | 12,581 | - | 12,581 |

(注) 子会社の非支配持分株主に付与している売建プット・オプションに係る金融負債である。なお、金額については公正価値により記載している。詳細は、「注19. 資本及びその他の資本項目」に記載している。

当社グループのデリバティブ金融負債の期日別の残高は以下のとおりである。

(単位：百万円)

| 項目 | 前連結会計年度(2018年3月31日) | | | |
|------------|---------------------|---------|-----|-----|
| | 1年以内 | 1年超5年以内 | 5年超 | 合計 |
| 為替予約 | 81 | - | - | 81 |
| 通貨オプション | 10 | - | - | 10 |
| 通貨スワップ | - | - | - | - |
| 金利スワップ | - | - | - | - |
| コモディティスワップ | 168 | - | - | 168 |

(単位：百万円)

| 項目 | 当連結会計年度(2019年3月31日) | | | |
|------------|---------------------|---------|-----|----|
| | 1年以内 | 1年超5年以内 | 5年超 | 合計 |
| 為替予約 | 7 | - | - | 7 |
| 通貨オプション | 29 | - | - | 29 |
| 通貨スワップ | - | - | - | - |
| 金利スワップ | - | - | - | - |
| コモディティスワップ | 52 | - | - | 52 |

(2) 公正価値

金融商品の公正価値

主な金融商品の帳簿価額及び公正価値は以下のとおりである。

(単位：百万円)

| 項目 | 前連結会計年度 (2018年3月31日) | | 当連結会計年度 (2019年3月31日) | |
|---------------|-------------------------|--------|-------------------------|--------|
| | 帳簿価額 | 公正価値 | 帳簿価額 | 公正価値 |
| 償却原価で測定する金融負債 | | | | |
| 社債及び借入金 | 96,444 | 96,934 | 95,075 | 95,732 |

公正価値の測定方法

公正価値の測定は当社の評価方針及び手続に従って行われており、金融商品の個々の資産性質、特徴並びにリスクを最も適切に反映できる評価モデルを決定している。また、担当部署は公正価値の変動に影響を与え得る重要な指標の推移を継続的に検証している。

短期間で決済される社債及び借入金の公正価値は帳簿価額と近似していることから当該帳簿価額によっている。

決済までの期間が長期の借入金のうち変動金利のものはその金利が短期間で市場金利を反映すること、また、当社グループの信用状態に大きな変動が生じていないことから、その公正価値は帳簿価額と近似していると考えられるため当該帳簿価額によっている。一方、固定金利のものは元利金の合計額を期末時点で新たに同様の借入を行ったと仮定した場合に想定される利率で割り引いた現在価値を公正価値としている。

決済までの期間が長期の社債の公正価値については取引先金融機関から入手した評価価額によっている。

上記以外の金融資産及び金融負債の公正価値は概ね帳簿価額と近似している。

公正価値のレベル別分類

公正価値のヒエラルキーは、その測定に使用する指標の観察可能性が高い順に以下の3つのレベルに区分している。

レベル1

同一の資産又は負債の活発な市場における相場価格により測定した公正価値

レベル2

レベル1以外の直接的又は間接的に観察可能な指標を使用して測定した公正価値

レベル3

観察可能でない指標を使用して測定した公正価値

公正価値の測定に複数の指標を使用している場合には、その測定において重要な指標のうち、最も観察可能性が低いものに基づいて公正価値のレベルを決定している。公正価値のレベル間の振替は、各四半期の期首時点で発生したものと認識している。

上場株式についてはその株価により公正価値を測定しており、公正価値レベル1に分類している。

非上場株式については割引将来キャッシュ・フローに基づく評価技法及び純資産価値に基づく評価技法等を用いて公正価値を測定しており、公正価値レベル3に分類している。

債券については取引先金融機関から提出された評価価額により公正価値を測定しており、公正価値レベル3に分類している。

社債及び借入金については公正価値レベル2に分類している。

デリバティブ取引については取引先金融機関から提出された評価価額により公正価値を測定しており、FVTPLの金融資産又はFVTPLの金融負債として公正価値レベル2に分類している。

非支配持分へ付与されたプット・オプションについては、「注19．資本及びその他の資本項目」に記載している。

経常的に公正価値により測定する金融商品は以下のとおりである。

(単位：百万円)

| 項目 | 前連結会計年度(2018年3月31日) | | | |
|----------|---------------------|------|-------|--------|
| | レベル1 | レベル2 | レベル3 | 合計 |
| 資産 | | | | |
| その他の金融資産 | | | | |
| デリバティブ | - | 450 | - | 450 |
| 有価証券等 | 8,850 | 193 | 6,287 | 15,330 |
| 負債 | | | | |
| その他の金融負債 | | | | |
| デリバティブ | - | 259 | - | 259 |

(単位：百万円)

| 項目 | 当連結会計年度(2019年3月31日) | | | |
|----------|---------------------|------|-------|--------|
| | レベル1 | レベル2 | レベル3 | 合計 |
| 資産 | | | | |
| その他の金融資産 | | | | |
| デリバティブ | - | 133 | - | 133 |
| 有価証券等 | 7,170 | 227 | 6,282 | 13,679 |
| 負債 | | | | |
| その他の金融負債 | | | | |
| デリバティブ | - | 88 | - | 88 |

前連結会計年度及び当連結会計年度において、公正価値レベル1とレベル2の間の重要な振替は行われていない。

公正価値レベル3に分類される経常的に公正価値により測定する金融商品の増減は以下のとおりである。

(単位：百万円)

| 項目 | FVTPLの金融資産 | FVTOCIの金融資産 | 合計 |
|-------------------|------------|-------------|-------|
| 2017年4月1日時点の帳簿価額 | 1,088 | 4,008 | 5,096 |
| 純損益 | 80 | - | 80 |
| その他の包括利益 | - | 294 | 294 |
| 購入 | 228 | 573 | 801 |
| 売却又は償還 | 38 | - | 38 |
| レベル3への振替 | - | 63 | 63 |
| その他 | 8 | 1 | 9 |
| 2018年3月31日時点の帳簿価額 | 1,350 | 4,937 | 6,287 |
| 純損益 | 38 | - | 38 |
| その他の包括利益 | - | 120 | 120 |
| 購入 | 102 | - | 102 |
| 売却又は償還 | 20 | - | 20 |
| レベル3への振替 | - | - | - |
| その他 | 1 | 4 | 5 |
| 2019年3月31日時点の帳簿価額 | 1,469 | 4,813 | 6,282 |

上記の金融資産に係る純損益は連結損益計算書の「金融収益」及び「金融費用」に含まれており、その他の包括利益は連結包括利益計算書の「FVTOCIの金融資産の公正価値の純変動額」に含まれている。

レベル3への振替は、株式の観察可能なインプットを入手することが困難となったことによるレベル2からの振替である。

非支配持分株主に付与している子会社株式の売建プット・オプションは、上表に含んでいない。プット・オプションについては、「注19. 資本及びその他の資本項目」で記載している。

(3) デリバティブとヘッジ活動

公正価値ヘッジ

公正価値ヘッジとは、既に認識された資産又は負債、若しくは未認識の確定約定の公正価値の変動に対するヘッジであり、ヘッジの効果が有効である限り公正価値ヘッジとして指定したデリバティブの公正価値の変動は、ヘッジ対象の公正価値の変動とともに純損益として認識している。公正価値ヘッジとして指定したデリバティブには外貨建ての資産及び負債に係る為替変動リスクの低減を目的とした為替予約取引がある。

前連結会計年度において連結損益計算書に計上されたヘッジ対象に係る損益は、575百万円であり、ヘッジ手段に係る損益と概ね見合っている。

キャッシュ・フロー・ヘッジ

キャッシュ・フロー・ヘッジとは、主に予定取引のヘッジであり、ヘッジの効果が有効である限りキャッシュ・フロー・ヘッジとして指定したデリバティブの公正価値の変動はその他の包括利益として認識している。その他の包括利益として認識した金額は、ヘッジ対象である取引が純損益に影響を与える時点で純損益に振り替えている。ヘッジ対象が棚卸資産等の非金融資産の場合においては、その他の包括利益として認識した金額は資産の取得原価の調整として処理している。キャッシュ・フロー・ヘッジとして指定したデリバティブには、主に材料の予定取引に係る価格変動リスクの低減を目的としたコモディティスワップ取引、外貨建ての資産に係る為替変動リスクの低減を目的とした為替予約取引がある。

当連結会計年度末において、主な取引に係るキャッシュ・フローが発生すると予想される期間及びそれらが純損益に影響を与えると予想される期間は1年以内である。

ヘッジ会計が適用されていないデリバティブ取引

当社グループは、ヘッジ会計の要件を満たさない場合においても経済的に合理的である場合にデリバティブ取引を利用している。当該デリバティブ取引の公正価値の変動は純損益として認識している。

デリバティブ取引の公正価値は以下のとおりである。

(a) 通貨関連取引

(単位：百万円)

| 取引の種類 | 前連結会計年度 (2018年3月31日) | | |
|----------------------------|-------------------------|-----------|------|
| | 契約額等 | うち 1年超 | 公正価値 |
| 公正価値ヘッジ | | | |
| 為替予約 | | | |
| 売建 | 4,478 | - | 238 |
| 通貨スワップ | | | |
| 売建 | - | - | - |
| 買建 | - | - | - |
| キャッシュ・フロー・ヘッジ | | | |
| 為替予約 | | | |
| 売建 | 2,226 | - | 119 |
| 買建 | 1,994 | - | 72 |
| 金利スワップ | | | |
| 変動受取・固定支払 | - | - | - |
| ヘッジ会計が適用されていない デリバティブ取引 | 4,509 | - | 57 |

(b) 商品関連取引

(単位：百万円)

| 取引の種類 | 前連結会計年度 (2018年3月31日) | | |
|--|-------------------------|-----------|------|
| | 契約額等 | うち 1年超 | 公正価値 |
| キャッシュ・フロー・ヘッジ コモディティスワップ 変動受取・固定支払 | 3,221 | - | 158 |
| ヘッジ会計が適用されていない デリバティブ取引 | 378 | 12 | 7 |

当社は、ヘッジ会計を適用する際は、ヘッジ対象とヘッジ手段との間に経済的関係があることを確認するために、ヘッジ対象とヘッジ手段の重要な条件が一致しているか又は密接に合致しており、ヘッジ対象の公正価値又はキャッシュ・フローの変動と、ヘッジ手段の公正価値又はキャッシュ・フローの変動とが相殺し合うかどうかの定性的な評価を通じてヘッジの有効性を評価している。また、ヘッジ手段とヘッジ対象の経済的関係及びリスク管理方針に基づき適切なヘッジ比率を設定している。なお、当連結会計年度において、純損益に認識したヘッジ非有効部分は重要ではない。

2019年3月31日現在におけるヘッジ手段の想定元本及び帳簿価額は以下のとおりである。なお、ヘッジ手段の帳簿価額は、連結財政状態計算書において「その他の金融資産」及び「その他の金融負債」に含まれている。

(単位：百万円)

| ヘッジ手段 | 想定元本 | | 帳簿価額 | |
|------------------------|-------|-------|------|----|
| | | うち1年超 | 資産 | 負債 |
| 公正価値ヘッジ 為替リスク | 1,061 | - | 5 | 7 |
| キャッシュ・フロー・ヘッジ 為替リスク | 5,977 | - | 64 | - |
| 価格リスク | 4,015 | - | 14 | 50 |

2019年3月31日現在において公正価値ヘッジを適用しているヘッジ対象の帳簿価額は以下のとおりである。

(単位：百万円)

| 公正価値ヘッジ のヘッジ対象 | 連結財政状態計算書 表示科目 | 帳簿価額 | |
|-------------------|-------------------|------|-----|
| | | 資産 | 負債 |
| 為替リスク | 売上債権、買入債務 | 702 | 359 |

当連結会計年度において公正価値ヘッジを適用しているヘッジ手段及びヘッジ対象の公正価値の変動並びにヘッジ対象の帳簿価額に含められたヘッジ対象に係る公正価値ヘッジ調整の累計額は重要ではない。

当連結会計年度においてその他の包括利益累計額に計上されたキャッシュ・フロー・ヘッジを適用しているヘッジ手段の公正価値の増減内容は以下のとおりである。

(単位：百万円)

| | 期首残高 | その他の包括利益に認識したヘッジ手段の公正価値変動 | ヘッジ対象資産及び負債の帳簿価額へ直接含めた金額 | 純損益への振替額(注)1 | その他(注)2 | 期末残高 |
|-------|------|---------------------------|--------------------------|--------------|---------|------|
| 為替リスク | 47 | 125 | - | 147 | 0 | 25 |
| 価格リスク | 158 | 415 | 539 | - | 2 | 36 |

(注) 1. なお、純損益への振替額は、連結損益計算書において、為替リスクについては主に「売上収益」「金融費用」に、価格リスクについては主に「売上原価」に含まれている。

2. 「その他」には、主に為替の影響等が含まれている。

(4) 認識の中止の要件を満たさない金融資産の譲渡

当社グループでは、売上債権の一部について手形の裏書等の方法により流動化を行っている。しかし、当該流動化債権の中には、債務者が支払を行わない場合に当社グループに遡求的に支払義務が発生するものがあり、このような流動化債権については金融資産の認識の中止の要件を満たさないことから認識の中止を行っていない。

前連結会計年度末及び当連結会計年度末におけるこのような流動化債権の金額は295百万円及び222百万円であり、連結財政状態計算書の「売上債権」と「社債及び借入金」(流動負債)にそれぞれ同額を計上している。

(5) 資本管理

当社グループは、現在及び将来の事業活動のための適切な水準の資産、負債及び資本を維持する事に加えて、事業活動における資本効率の最適化を図ることを重要な方針として資本を管理している。

資本管理においては、親会社株主持分比率を指標として用いており、四半期ごとに取締役会において報告が行われている。前連結会計年度及び当連結会計年度における親会社株主持分比率はそれぞれ57.1%及び59.3%である。

29. 担保

(1) 担保に供している資産

(単位：百万円)

| 項目 | 前連結会計年度 (2018年3月31日) | 当連結会計年度 (2019年3月31日) |
|--------|-------------------------|-------------------------|
| 棚卸資産 | 2,211 | 2,795 |
| 有形固定資産 | 1,959 | 1,778 |
| その他 | 2,497 | 2,648 |
| 合計 | 6,667 | 7,221 |

(2) 担保を付している債務

(単位：百万円)

| 項目 | 前連結会計年度 (2018年3月31日) | 当連結会計年度 (2019年3月31日) |
|-----------------|-------------------------|-------------------------|
| 1年以内に返済予定の長期借入金 | 281 | 106 |
| 長期借入金 | 1,680 | 1,749 |
| 合計 | 1,961 | 1,855 |

30. コミットメント及び偶発事象

(1) 契約はしているが発生していない重要なコミットメント

(単位：百万円)

| 項目 | 前連結会計年度 (2018年3月31日) | 当連結会計年度 (2019年3月31日) |
|-----------|-------------------------|-------------------------|
| 有形固定資産の取得 | 15,507 | 12,691 |

(2) 債務保証

重要な債務保証はない。

(3) その他

当社及び一部の子会社は、米国等において、アルミ電解コンデンサ等の取引に関する独占禁止法違反を理由とする損害賠償を求める民事訴訟を起こされている。これらの影響額は未確定である。

31. 後発事象

(1) 取得による企業結合

(Apceth Biopharma GmbHの取得)

当社は、2019年1月31日開催の取締役会の決議に基づき、4月2日付でApceth Biopharma GmbHの全持分を取得し完全子会社化した。

企業結合の概要

(a) 被取得企業の名称及びその事業の内容

被取得企業の名称 Apceth Biopharma GmbH
事業の内容 再生医療等製品の受託製造

(b) 企業結合の主な理由

当社グループは、「2018中期経営計画」の中で、ライフサイエンス事業を将来の基盤事業へ育成することを基本方針とし、診断薬事業の事業基盤の確立、および再生医療事業の立ち上げを進めている。

今回のApceth Biopharma GmbHの持分取得により、同社の受託製造拠点や幅広い販売網を活用して、再生医療事業のさらなる拡大を図るため。

(c) 取得日

2019年4月2日

(d) 取得企業が被取得企業の支配を獲得した方法

現金を対価とする持分の取得

(e) 結合後企業の名称

Apceth Biopharma GmbH

(f) 取得した議決権比率

| | |
|-------------------|--------|
| 取得日直前に保有していた議決権比率 | 0.0% |
| 取得後の議決権比率 | 100.0% |

(g) 取得企業を決定するに至った主な根拠

現金を対価とする持分の取得により、当社がApceth Biopharma GmbHの議決権の過半数を取得したため。

取得の対価

現金及び現金同等物9,407百万円(概算)

取得関連費用

株式取得に係る業務委託費用等112百万円(概算)

なお、のれん、取得した資産及び引き受けた負債の公正価値については、現時点では確定していない。

(2) 報告セグメントに属する主要製品群の一部見直し

2019年4月1日付の組織体制の見直しに伴い、当連結会計年度において「機能材料」に含まれていた無機材料、一部の樹脂材料は、翌連結会計年度より、「先端部品・システム」に区分を変更することとしている。また、「先端部品・システム」に含まれていた電子部品は、「機能材料」に区分を変更することとしている。

なお、変更後の区分によった場合の当連結会計年度の報告セグメントに係る売上収益、損益及びその他の項目の金額に関する情報は、現在算定中である。

(2)【その他】

当連結会計年度における四半期情報等

| (累計期間) | 第1四半期 | 第2四半期 | 第3四半期 | 当連結会計年度 |
|---------------------------|---------|---------|---------|---------|
| 売上収益 (百万円) | 168,932 | 343,518 | 522,366 | 681,025 |
| 税引前四半期(当期)利益 (百万円) | 11,373 | 23,280 | 35,146 | 40,500 |
| 親会社株主に帰属する四半期(当期)利益 (百万円) | 8,178 | 16,413 | 26,031 | 28,723 |
| 基本的1株当たり四半期(当期)利益 (円) | 39.28 | 78.82 | 125.01 | 137.94 |

| (会計期間) | 第1四半期 | 第2四半期 | 第3四半期 | 第4四半期 |
|-------------------|-------|-------|-------|-------|
| 基本的1株当たり四半期利益 (円) | 39.28 | 39.54 | 46.19 | 12.93 |

2【財務諸表等】

(1)【財務諸表】

【貸借対照表】

(単位：百万円)

| 項目 | 前事業年度 (2018年3月31日) | 当事業年度 (2019年3月31日) |
|---------------------|-----------------------|-----------------------|
| 資産の部 | | |
| 流動資産 | | |
| 現金及び預金 | 977 | 1,046 |
| 受取手形 | 2 2,900 | 2 2,462 |
| 電子記録債権 | 2 6,071 | 2 6,137 |
| 売掛金 | 1 78,692 | 1 67,913 |
| 製品 | 5,982 | 5,750 |
| 半製品 | 2,907 | 3,672 |
| 仕掛品 | 6,742 | 7,582 |
| 原材料 | 8,283 | 8,185 |
| 短期貸付金 | 1 319 | 1 14,949 |
| 未収入金 | 1 11,634 | 1 11,158 |
| その他 | 1,225 | 689 |
| 貸倒引当金 | 30 | 11 |
| 流動資産合計 | 125,702 | 129,532 |
| 固定資産 | | |
| 有形固定資産 | | |
| 建物 | 26,755 | 27,150 |
| 構築物 | 4,074 | 4,116 |
| 機械及び装置 | 36,437 | 38,910 |
| 車両運搬具 | 103 | 85 |
| 工具、器具及び備品 | 3,619 | 3,869 |
| 土地 | 12,396 | 12,393 |
| リース資産 | 166 | 161 |
| 建設仮勘定 | 2,914 | 2,934 |
| 有形固定資産合計 | 86,464 | 89,618 |
| 無形固定資産 | | |
| のれん | 9,540 | 7,155 |
| その他 | 5,120 | 5,639 |
| 無形固定資産合計 | 14,660 | 12,794 |
| 投資その他の資産 | | |
| 投資有価証券 | 10,475 | 8,703 |
| 関係会社株式 | 103,867 | 103,713 |
| 関係会社出資金 | 25,641 | 24,467 |
| 株主、役員又は従業員に対する長期貸付金 | 4 | 2 |
| 関係会社長期貸付金 | 17,182 | 14,257 |
| 長期前払費用 | 2,403 | 2,363 |
| 長期前払年金費用 | 8,358 | 10,349 |
| 繰延税金資産 | 6,714 | 7,238 |
| その他 | 2,388 | 2,503 |
| 貸倒引当金 | 2,382 | 380 |
| 投資その他の資産合計 | 174,650 | 173,215 |
| 固定資産合計 | 275,774 | 275,627 |
| 資産合計 | 401,476 | 405,159 |

(単位：百万円)

| 項目 | 前事業年度 (2018年3月31日) | 当事業年度 (2019年3月31日) |
|-----------------|-----------------------|-----------------------|
| 負債の部 | | |
| 流動負債 | | |
| 電子記録債務 | 5,948 | 5,730 |
| 買掛金 | 1 40,494 | 1 37,949 |
| 短期借入金 | 1 1,448 | - |
| リース債務 | 1 80 | 1 73 |
| 未払金 | 1 10,210 | 1 7,835 |
| 未払費用 | 1 15,139 | 1 16,512 |
| 未払法人税等 | 1,219 | 1,200 |
| 前受金 | 18 | 51 |
| 預り金 | 2,161 | 2,113 |
| その他 | 1,220 | 660 |
| 流動負債合計 | 77,937 | 72,123 |
| 固定負債 | | |
| 社債 | 30,000 | 30,000 |
| リース債務 | 1 353 | 1 334 |
| 退職給付引当金 | 6,662 | 7,255 |
| 資産除去債務 | 1,279 | 1,368 |
| その他 | 28 | 23 |
| 固定負債合計 | 38,322 | 38,980 |
| 負債合計 | 116,259 | 111,103 |
| 純資産の部 | | |
| 株主資本 | | |
| 資本金 | 15,454 | 15,454 |
| 資本剰余金 | | |
| 資本準備金 | 32,862 | 32,862 |
| その他資本剰余金 | 0 | 0 |
| 資本剰余金合計 | 32,862 | 32,862 |
| 利益剰余金 | | |
| 利益準備金 | 3,564 | 3,564 |
| その他利益剰余金 | | |
| 固定資産圧縮積立金 | 2 | 1 |
| 別途積立金 | 120,000 | 120,000 |
| 繰越利益剰余金 | 112,336 | 122,160 |
| 利益剰余金合計 | 235,902 | 245,725 |
| 自己株式 | 246 | 251 |
| 株主資本合計 | 283,972 | 293,790 |
| 評価・換算差額等 | | |
| その他有価証券評価差額金 | 1,323 | 282 |
| 繰延ヘッジ損益 | 78 | 16 |
| 評価・換算差額等合計 | 1,245 | 266 |
| 純資産合計 | 285,217 | 294,056 |
| 負債純資産合計 | 401,476 | 405,159 |

【損益計算書】

(単位：百万円)

| 項目 | 前事業年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日) | | 当事業年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日) | |
|----------------|--|---------|--|---------|
| | | | | |
| 売上高 | 1 | 374,352 | 1 | 364,319 |
| 売上原価 | 1 | 289,308 | 1 | 286,350 |
| 売上総利益 | | 85,044 | | 77,969 |
| 販売費及び一般管理費 | 1, 2 | 61,799 | 1, 2 | 60,474 |
| 営業利益 | | 23,245 | | 17,495 |
| 営業外収益 | | | | |
| 受取利息 | 1 | 298 | 1 | 283 |
| 受取配当金 | 1 | 3,950 | 1 | 12,683 |
| 投資有価証券売却益 | | 395 | | 473 |
| 固定資産賃貸料 | 1 | 509 | 1 | 494 |
| 関係会社貸倒引当金戻入額 | | 651 | | 2,013 |
| 為替差益 | | - | | 407 |
| その他 | | 1,556 | | 1,268 |
| 営業外収益合計 | | 7,359 | | 17,621 |
| 営業外費用 | | | | |
| 支払利息 | 1 | 15 | 1 | 12 |
| 社債利息 | | 144 | | 194 |
| 固定資産処分損 | | 538 | | 607 |
| 為替差損 | | 105 | | - |
| 固定資産賃貸費用 | | 257 | | 237 |
| 投資有価証券評価損 | | - | | 424 |
| 社債発行費 | | 95 | | - |
| その他 | | 1,000 | | 852 |
| 営業外費用合計 | | 2,154 | | 2,326 |
| 経常利益 | | 28,450 | | 32,790 |
| 特別利益 | | | | |
| 関係会社事業損失引当金戻入額 | | 1,306 | | - |
| 特別利益合計 | | 1,306 | | - |
| 特別損失 | | | | |
| 減損損失 | | 120 | | 1,304 |
| 競争法等関連費用 | | 9,572 | | 1,432 |
| 特別調査費用 | | - | 3 | 3,059 |
| 土壌処理費用 | | - | | 2,099 |
| 特別損失合計 | | 9,692 | | 7,894 |
| 税引前当期純利益 | | 20,064 | | 24,896 |
| 法人税、住民税及び事業税 | | 3,961 | | 2,674 |
| 法人税等調整額 | | 461 | | 94 |
| 法人税等合計 | | 4,422 | | 2,580 |
| 当期純利益 | | 15,642 | | 22,316 |

【株主資本等変動計算書】

前事業年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

(単位：百万円)

| 項目 | 株主資本 | | | | | | | | |
|---------------------|--------|--------|----------|---------|-----------|----------|---------|---------|---------|
| | 資本金 | 資本剰余金 | | | 利益準備金 | 利益剰余金 | | | 利益剰余金合計 |
| | | 資本準備金 | その他資本剰余金 | 資本剰余金合計 | | その他利益剰余金 | | | |
| | | | | | 固定資産圧縮積立金 | 別途積立金 | 繰越利益剰余金 | | |
| 当期首残高 | 15,454 | 32,862 | 0 | 32,862 | 3,564 | 4 | 120,000 | 109,186 | 232,754 |
| 当期変動額 | | | | | | | | | |
| 剰余金の配当 | | | | | | | | 12,494 | 12,494 |
| 当期純利益 | | | | | | | | 15,642 | 15,642 |
| 自己株式の取得 | | | | | | | | | |
| 自己株式の処分 | | | 0 | 0 | | | | | |
| 固定資産圧縮積立金の取崩 | | | | | | 2 | | 2 | - |
| 株主資本以外の項目の当期変動額(純額) | | | | | | | | | |
| 当期変動額合計 | - | - | 0 | 0 | - | 2 | - | 3,150 | 3,148 |
| 当期末残高 | 15,454 | 32,862 | 0 | 32,862 | 3,564 | 2 | 120,000 | 112,336 | 235,902 |

(単位：百万円)

| 項目 | 株主資本 | | 評価・換算差額等 | | | 純資産合計 |
|---------------------|------|---------|--------------|---------|------------|---------|
| | 自己株式 | 株主資本合計 | その他有価証券評価差額金 | 繰延ヘッジ損益 | 評価・換算差額等合計 | |
| 当期首残高 | 234 | 280,836 | 1,170 | 120 | 1,290 | 282,126 |
| 当期変動額 | | | | | | |
| 剰余金の配当 | | 12,494 | | | | 12,494 |
| 当期純利益 | | 15,642 | | | | 15,642 |
| 自己株式の取得 | 12 | 12 | | | | 12 |
| 自己株式の処分 | 0 | 0 | | | | 0 |
| 固定資産圧縮積立金の取崩 | | - | | | | - |
| 株主資本以外の項目の当期変動額(純額) | | | 153 | 198 | 45 | 45 |
| 当期変動額合計 | 12 | 3,136 | 153 | 198 | 45 | 3,091 |
| 当期末残高 | 246 | 283,972 | 1,323 | 78 | 1,245 | 285,217 |

当事業年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

(単位：百万円)

| 項目 | 株主資本 | | | | | | | | |
|---------------------|--------|--------|----------|---------|-------|-----------|---------|---------|---------|
| | 資本金 | 資本剰余金 | | | 利益準備金 | 利益剰余金 | | | 利益剰余金合計 |
| | | 資本準備金 | その他資本剰余金 | 資本剰余金合計 | | その他利益剰余金 | | | |
| | | | | | | 固定資産圧縮積立金 | 別途積立金 | 繰越利益剰余金 | |
| 当期首残高 | 15,454 | 32,862 | 0 | 32,862 | 3,564 | 2 | 120,000 | 112,336 | 235,902 |
| 当期変動額 | | | | | | | | | |
| 剰余金の配当 | | | | | | | | 12,493 | 12,493 |
| 当期純利益 | | | | | | | | 22,316 | 22,316 |
| 自己株式の取得 | | | | | | | | | |
| 自己株式の処分 | | | 0 | 0 | | | | | |
| 固定資産圧縮積立金の取崩 | | | | | | 1 | | 1 | - |
| 株主資本以外の項目の当期変動額(純額) | | | | | | | | | |
| 当期変動額合計 | - | - | 0 | 0 | - | 1 | - | 9,824 | 9,823 |
| 当期末残高 | 15,454 | 32,862 | 0 | 32,862 | 3,564 | 1 | 120,000 | 122,160 | 245,725 |

(単位：百万円)

| 項目 | 株主資本 | | 評価・換算差額等 | | | 純資産合計 |
|---------------------|------|---------|--------------|---------|------------|---------|
| | 自己株式 | 株主資本合計 | その他有価証券評価差額金 | 繰延ヘッジ損益 | 評価・換算差額等合計 | |
| 当期首残高 | 246 | 283,972 | 1,323 | 78 | 1,245 | 285,217 |
| 当期変動額 | | | | | | |
| 剰余金の配当 | | 12,493 | | | | 12,493 |
| 当期純利益 | | 22,316 | | | | 22,316 |
| 自己株式の取得 | 5 | 5 | | | | 5 |
| 自己株式の処分 | 0 | 0 | | | | 0 |
| 固定資産圧縮積立金の取崩 | | - | | | | - |
| 株主資本以外の項目の当期変動額(純額) | | | 1,041 | 62 | 979 | 979 |
| 当期変動額合計 | 5 | 9,818 | 1,041 | 62 | 979 | 8,839 |
| 当期末残高 | 251 | 293,790 | 282 | 16 | 266 | 294,056 |

【注記事項】

(重要な会計方針)

1. 資産の評価基準及び評価方法

(1) 有価証券の評価基準及び評価方法

子会社株式及び関連会社株式

移動平均法に基づく原価法によっている。

その他有価証券

時価のあるもの

決算日の市場価格等に基づく時価法によっている。(評価差額は全部純資産直入法により処理している。また、売却原価は移動平均法により算出している。)

時価のないもの

移動平均法に基づく原価法によっている。

(2) デリバティブの評価基準及び評価方法

時価法によっている。(ヘッジの有効性が確認されたものについてはヘッジ会計を適用している。)

(3) たな卸資産の評価基準及び評価方法

製品・半製品・仕掛品

移動平均法(一部 個別法)に基づく原価法によっている。

原材料

移動平均法に基づく原価法によっている。

なお、収益性が低下したたな卸資産については帳簿価額を切り下げている。

2. 固定資産の減価償却の方法

(1) 有形固定資産

定額法によっている。

(2) 無形固定資産

定額法によっている。

なお、自社利用のソフトウェアについては社内における見込利用可能期間に基づく定額法によっている。また、のれんについてはその効果の及ぶ期間に基づく定額法によっている。

3. 引当金の計上基準

(1) 貸倒引当金

債権の貸倒による損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については個別に回収可能性を勘案し回収不能見込額を計上している。

(2) 退職給付引当金

従業員の退職給付に備えるため、当事業年度末の退職給付債務及び年金資産の見込額に基づき計上している。退職給付引当金及び退職給付費用の処理方法は以下のとおりである。

退職給付見込額の期間帰属方法

退職給付債務の算定に当たり、退職給付見込額を当事業年度末までの期間に帰属させる方法については給付算定式基準によっている。

数理計算上の差異及び過去勤務費用の費用処理方法

数理計算上の差異は、各事業年度の発生時における従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数(10年)で定額法により按分した額を、それぞれ発生翌事業年度から費用処理することとしている。

過去勤務費用は、その発生時における従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数(10年)で定額法により費用処理している。

4. その他財務諸表作成のための基本となる重要な事項

(1) 外貨建の資産及び負債の本邦通貨への換算基準

外貨建金銭債権・債務は、決算日の直物為替相場により円貨に換算し、換算差額は損益として処理している。

(2) ヘッジ会計の方法

ヘッジ会計の方法

繰延ヘッジ処理によっている。

ヘッジ手段とヘッジ対象

ヘッジ手段.....為替予約、通貨オプション、通貨スワップ及びコモディティスワップ

ヘッジ対象.....外貨建債権・債務、外貨建予定取引及び材料購入取引

ヘッジ方針

為替変動リスクを低減するため、対象債権・債務の範囲内でヘッジを行っている。また、材料の価格変動リスクを低減するため、材料購入の範囲内でヘッジを行っている。

ヘッジの有効性評価の方法

ヘッジ開始時から有効性判定時点までの期間において、ヘッジ対象とヘッジ手段の相場変動の累計を比較し、両者の変動額等を基礎にして判断している。

(3) 消費税等の会計処理

消費税及び地方消費税の会計処理は税抜方式によっている。

(4) 退職給付に係る会計処理

退職給付に係る未認識数理計算上の差異及び未認識過去勤務費用の会計処理の方法は、連結財務諸表におけるこれらの会計処理の方法と異なっている。

(表示方法の変更)

(「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」の適用)

「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」(企業会計基準第28号 平成30年2月16日)を当事業年度の期首から適用しており、繰延税金資産は投資その他の資産の区分に表示し、繰延税金負債は固定負債の区分に表示する方法に変更している。

この結果、前事業年度の貸借対照表において、「流動資産」の「繰延税金資産」3,678百万円は、「投資その他の資産」の「繰延税金資産」6,714百万円に含めて表示している。

(貸借対照表関係)

1. 関係会社に対する金銭債権及び金銭債務(区分表示したものを除く)

| 項目 | 前事業年度 | 当事業年度 |
|--------|--------------|--------------|
| | (2018年3月31日) | (2019年3月31日) |
| | 百万円 | 百万円 |
| 短期金銭債権 | 29,744 | 44,406 |
| 短期金銭債務 | 15,170 | 11,907 |
| 長期金銭債務 | 353 | 334 |

2. 期末日満期手形等

期末日満期手形等の会計処理については、満期日に決済が行われたものとして処理している。

なお、当事業年度末日が金融機関の休日であったため、次の期末日満期手形等を満期日に決済が行われたものとして処理している。

| 項目 | 前事業年度 | 当事業年度 |
|--------|--------------|--------------|
| | (2018年3月31日) | (2019年3月31日) |
| | 百万円 | 百万円 |
| 受取手形 | 484 | 403 |
| 電子記録債権 | 132 | 219 |

3. その他の偶発債務

当社及び一部の子会社は、米国等において、アルミ電解コンデンサ等の取引に関する独占禁止法違反を理由とする損害賠償を求める民事訴訟を起こされている。これらの影響額は未確定である。

(損益計算書関係)

1. 関係会社との取引高

| 項目 | 前事業年度 | 当事業年度 |
|-----------|-------------------------------|-------------------------------|
| | (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日) | (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日) |
| | 百万円 | 百万円 |
| 営業取引(売上高) | 103,252 | 102,949 |
| 営業取引(仕入高) | 107,316 | 102,680 |
| 営業取引(その他) | 20,396 | 19,854 |
| 営業取引以外の取引 | 4,528 | 13,295 |

2. 販売費及び一般管理費のうち主要な費目及び金額

| 項目 | 前事業年度 | 当事業年度 |
|---------------------|-------------------------------|-------------------------------|
| | (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日) | (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日) |
| | 百万円 | 百万円 |
| 退職給付費用 | 1,333 | 851 |
| 減価償却費 | 1,750 | 2,426 |
| 研究開発費 | 16,052 | 16,362 |
| 荷造及び発送費 | 9,581 | 9,774 |
| 従業員給料及び手当 | 11,500 | 11,303 |
| 販売費に属する費用のおおよその割合 | 32% | 32% |
| 一般管理費に属する費用のおおよその割合 | 68% | 68% |

3. 特別調査費用

当事業年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

当社製品の一部における不適切な検査等の判明を受け、外部の専門家等から構成される特別調査委員会を設置し、その原因究明及び再発防止策を策定した。当社は、当該特別調査委員会の調査及び関連する費用等を特別調査費用として計上している。

(有価証券関係)

前事業年度(2018年3月31日)

子会社株式及び関連会社株式

| 項目 | 貸借対照表計上額 | 時価 | 差額 |
|--------|----------|-------|-------|
| | 百万円 | 百万円 | 百万円 |
| 子会社株式 | 6,678 | 5,266 | 1,412 |
| 関連会社株式 | - | - | - |
| 合計 | 6,678 | 5,266 | 1,412 |

時価を把握することが極めて困難と認められる子会社株式及び関連会社株式

| 項目 | 貸借対照表計上額 |
|--------|----------|
| | 百万円 |
| 子会社株式 | 96,917 |
| 関連会社株式 | 272 |

これらについては、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、上表の「子会社株式及び関連会社株式」には含めていない。

当事業年度(2019年3月31日)

子会社株式及び関連会社株式

| 項目 | 貸借対照表計上額 | 時価 | 差額 |
|--------|----------|-------|-----|
| | 百万円 | 百万円 | 百万円 |
| 子会社株式 | 6,678 | 6,682 | 4 |
| 関連会社株式 | - | - | - |
| 合計 | 6,678 | 6,682 | 4 |

時価を把握することが極めて困難と認められる子会社株式及び関連会社株式

| 項目 | 貸借対照表計上額 |
|--------|----------|
| | 百万円 |
| 子会社株式 | 96,917 |
| 関連会社株式 | 118 |

これらについては、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、上表の「子会社株式及び関連会社株式」には含めていない。

(税効果会計関係)

1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別内訳

| 項目 | 前事業年度 (2018年3月31日) | 当事業年度 (2019年3月31日) |
|--------------|-----------------------|-----------------------|
| 繰延税金資産 | 百万円 | 百万円 |
| 退職給付引当金 | 3,805 | 4,085 |
| 未払賞与 | 2,227 | 2,105 |
| 貸倒引当金 | 736 | 119 |
| 関係会社株式評価損 | 6,343 | 5,646 |
| その他 | 4,026 | 5,366 |
| 繰延税金資産小計 | 17,137 | 17,321 |
| 評価性引当額 | 7,066 | 6,582 |
| 繰延税金資産合計 | 10,071 | 10,739 |
| 繰延税金負債 | 百万円 | 百万円 |
| その他有価証券評価差額金 | 581 | 124 |
| 長期前払年金費用 | 2,549 | 3,156 |
| その他 | 227 | 221 |
| 繰延税金負債合計 | 3,357 | 3,501 |
| 繰延税金資産の純額 | 6,714 | 7,238 |

2. 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主要な項目別の内訳

| 項目 | 前事業年度 (2018年3月31日) | 当事業年度 (2019年3月31日) |
|----------------------|-----------------------|-----------------------|
| | % | % |
| 法定実効税率 | 30.7 | 30.5 |
| (調整) | | |
| 交際費等永久に損金に算入されない項目 | 0.9 | 0.5 |
| 受取配当金等永久に益金に算入されない項目 | 5.7 | 14.8 |
| 研究開発費の税額控除 | 4.8 | 3.2 |
| 評価性引当額 | 2.8 | 2.0 |
| のれん償却 | 3.6 | 2.9 |
| その他 | 0.1 | 3.3 |
| 税効果会計適用後の法人税等の負担率 | 22.0 | 10.6 |

(重要な後発事象)

取得による企業結合

(Apceth Biopharma GmbHの取得)

当社は、2019年1月31日開催の取締役会の決議に基づき、4月2日付でApceth Biopharma GmbHの全持分を取得し完全子会社化した。

企業結合の概要

(a) 被取得企業の名称及びその事業の内容

被取得企業の名称 Apceth Biopharma GmbH
事業の内容 再生医療等製品の受託製造

(b) 企業結合の主な理由

当社グループは、「2018中期経営計画」の中で、ライフサイエンス事業を将来の基盤事業へ育成することを基本方針とし、診断薬事業の事業基盤の確立、および再生医療事業の立ち上げを進めている。

今回のApceth Biopharma GmbHの持分取得により、同社の受託製造拠点や幅広い販売網を活用して、再生医療事業のさらなる拡大を図るため。

(c) 取得日

2019年4月2日

(d) 取得企業が被取得企業の支配を獲得した方法

現金を対価とする持分の取得

(e) 結合後企業の名称

Apceth Biopharma GmbH

(f) 取得した議決権比率

| | |
|-------------------|--------|
| 取得日直前に保有していた議決権比率 | 0.0% |
| 取得後の議決権比率 | 100.0% |

(g) 取得企業を決定するに至った主な根拠

現金を対価とする持分の取得により、当社がApceth Biopharma GmbHの議決権の過半数を取得したため。

取得の対価

現金及び現金同等物9,407百万円(概算)

取得関連費用

株式取得に係る業務委託費用等112百万円(概算)

なお、のれん、取得した資産及び引き受けた負債の公正価値については、現時点では確定していない。

【附属明細表】

【有形固定資産等明細表】

(単位：百万円)

| 区分 | 資産の種類 | 当期首残高 | 当期増加額 | 当期減少額 | 当期償却額 | 当期末残高 | 減価償却 累計額 |
|--------|-----------|---------|--------|-------------------|--------|---------|-------------|
| 有形固定資産 | 建物 | 84,870 | 3,210 | 758 (377) | 2,395 | 87,322 | 60,172 |
| | 構築物 | 15,819 | 457 | 101 (21) | 390 | 16,175 | 12,059 |
| | 機械及び装置 | 230,630 | 13,506 | 7,000 (759) | 9,656 | 237,136 | 198,226 |
| | 車両運搬具 | 637 | 30 | 18 (0) | 48 | 649 | 564 |
| | 工具、器具及び備品 | 31,981 | 2,030 | 1,005 (138) | 1,626 | 33,006 | 29,137 |
| | 土地 | 12,396 | 1 | 4 | - | 12,393 | - |
| | リース資産 | 366 | 56 | 70 | 61 | 352 | 191 |
| | 建設仮勘定 | 2,914 | 19,167 | 19,147 | - | 2,934 | - |
| | 計 | 379,613 | 38,457 | 28,103 (1,295) | 14,176 | 389,967 | 300,349 |
| 無形固定資産 | のれん | 23,849 | - | - | 2,385 | 23,849 | 16,694 |
| | その他 | 20,358 | 2,095 | 212 (8) | 1,567 | 22,241 | 16,602 |
| | 計 | 44,207 | 2,095 | 212 | 3,952 | 46,090 | 33,296 |

(注) 1. 当期減少額の()内数値は減損損失の計上額であり、内数表示している。

2. 当期増減額の主な内訳

[有形固定資産増加額]

| | | | |
|--------|---|-------|-------|
| | | | 百万円 |
| 機械及び装置 | : | 山崎事業所 | 3,321 |
| | | 下館事業所 | 2,723 |

[有形固定資産減少額]

| | | | |
|--------|---|-------|-------|
| | | | 百万円 |
| 機械及び装置 | : | 下館事業所 | 3,420 |
| | | 名張事業所 | 918 |

3. 当期首残高及び当期末残高は、減損損失控除後の取得価額により記載している。

【引当金明細表】

(単位：百万円)

| 科目 | 当期首残高 | 当期増加額 | 当期減少額 | 当期末残高 |
|-------|-------|-------|-------|-------|
| 貸倒引当金 | 2,413 | 22 | 2,044 | 391 |

(2) 【主な資産及び負債の内容】

連結財務諸表を作成しているため、記載を省略している。

(3) 【その他】

該当事項なし。

第6【提出会社の株式事務の概要】

| | |
|----------------|--|
| 事業年度 | 4月1日から翌年3月31日まで |
| 定時株主総会 | 6月中 |
| 基準日 | 3月31日 |
| 剰余金の配当の基準日 | 9月30日、3月31日その他取締役会が定める日 |
| 1単元の株式数 | 100株 |
| 単元未満株式の買取り・買増し | |
| 取扱場所 | (特別口座) 東京都杉並区和泉二丁目8番4号 東京証券代行株式会社 事務センター |
| 株主名簿管理人 | (特別口座) 東京都千代田区神田錦町三丁目11番地 東京証券代行株式会社 |
| 取次所 | |
| 買取・買増手数料 | 株式の売買の委託に係る手数料相当額として別途定める金額 |
| 公告掲載方法 | 電子公告により行う。ただし、事故その他やむを得ない事由によって電子公告による公告をすることができない場合は、日本経済新聞に掲載して行う。 |
| 株主に対する特典 | なし |

(注) 当社定款の定めにより、単元未満株主は、会社法第189条第2項各号に掲げる権利、株主の有する株式数に応じて募集株式の割当て及び募集新株予約権の割当てを受ける権利並びに単元未満株式の売渡請求をする権利以外の権利を有していない。

第7【提出会社の参考情報】

1【提出会社の親会社等の情報】

当社の親会社等である(株)日立製作所は、東京証券取引所ほかに上場しており、継続開示会社である。

2【その他の参考情報】

当事業年度の開始日から有価証券報告書提出日までの間に、次の書類を提出している。

- (1) 臨時報告書
企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第9号の2(株主総会における議決権行使の結果)に基づく臨時報告書である。
平成30年6月22日(2018年6月22日)関東財務局長に提出
- (2) 有価証券報告書及びその添付書類並びに確認書
事業年度(第69期)(自平成29年4月1日(2017年4月1日)至平成30年3月31日(2018年3月31日))
平成30年6月29日(2018年6月29日)関東財務局長に提出
- (3) 内部統制報告書及びその添付書類
平成30年6月29日(2018年6月29日)関東財務局長に提出
- (4) 四半期報告書及び確認書
(第70期第1四半期)(自平成30年4月1日(2018年4月1日)至平成30年6月30日(2018年6月30日))
平成30年8月8日(2018年8月8日)関東財務局長に提出
- (5) 臨時報告書
企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第3号(特定子会社の異動)に基づく臨時報告書である。
平成30年10月22日(2018年10月22日)関東財務局長に提出
- (6) 発行登録書(株券、社債券等)
平成30年10月26日(2018年10月26日)関東財務局長に提出
- (7) 四半期報告書及び確認書
(第70期第2四半期)(自平成30年7月1日(2018年7月1日)至平成30年9月30日(2018年9月30日))
平成30年11月9日(2018年11月9日)関東財務局長に提出
- (8) 臨時報告書
企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第9号(代表執行役の異動)に基づく臨時報告書である。
平成30年11月26日(2018年11月26日)関東財務局長に提出
- (9) 訂正発行登録書
平成30年11月26日(2018年11月26日)関東財務局長に提出
- (10) 臨時報告書
企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第3号(特定子会社の異動)に基づく臨時報告書である。
平成30年12月18日(2018年12月18日)関東財務局長に提出
- (11) 訂正発行登録書
平成30年12月18日(2018年12月18日)関東財務局長に提出
- (12) 四半期報告書及び確認書
(第70期第3四半期)(自平成30年10月1日(2018年10月1日)至平成30年12月31日(2018年12月31日))
平成31年2月12日(2019年2月12日)関東財務局長に提出
- (13) 臨時報告書
企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第9号(代表執行役の異動)に基づく臨時報告書である。
平成31年2月28日(2019年2月28日)関東財務局長に提出
- (14) 訂正発行登録書
平成31年2月28日(2019年2月28日)関東財務局長に提出

第二部【提出会社の保証会社等の情報】

該当事項なし

独立監査人の監査報告書及び内部統制監査報告書

2019年6月21日

日立化成株式会社
執行役社長 丸山 寿 殿

E Y 新日本有限責任監査法人

| | | |
|--------------------|-------|---------|
| 指定有限責任社員 業務執行社員 | 公認会計士 | 葛 貫 誠 司 |
| 指定有限責任社員 業務執行社員 | 公認会計士 | 樫 山 豪 |

< 財務諸表監査 >

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている日立化成株式会社の2018年4月1日から2019年3月31日までの連結会計年度の連結財務諸表、すなわち、連結財政状態計算書、連結損益計算書、連結包括利益計算書、連結持分変動計算書、連結キャッシュ・フロー計算書及び連結財務諸表注記について監査を行った。

連結財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、「連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」第93条の規定により国際会計基準に準拠して連結財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない連結財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した監査に基づいて、独立の立場から連結財務諸表に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に連結財務諸表に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき監査を実施することを求めている。

監査においては、連結財務諸表の金額及び開示について監査証拠を入手するための手続が実施される。監査手続は、当監査法人の判断により、不正又は誤謬による連結財務諸表の重要な虚偽表示のリスクの評価に基づいて選択及び適用される。財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、当監査法人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、連結財務諸表の作成と適正な表示に関連する内部統制を検討する。また、監査には、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての連結財務諸表の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、上記の連結財務諸表が、国際会計基準に準拠して、日立化成株式会社及び連結子会社の2019年3月31日現在の財政状態並びに同日をもって終了する連結会計年度の経営成績及びキャッシュ・フローの状況をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

< 内部統制監査 >

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第2項の規定に基づく監査証明を行うため、日立化成株式会社の2019年3月31日現在の内部統制報告書について監査を行った。

内部統制報告書に対する経営者の責任

経営者の責任は、財務報告に係る内部統制を整備及び運用し、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して内部統制報告書を作成し適正に表示することにある。

なお、財務報告に係る内部統制により財務報告の虚偽の記載を完全には防止又は発見することができない可能性がある。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した内部統制監査に基づいて、独立の立場から内部統制報告書に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の監査の基準に準拠して内部統制監査を行った。財務報告に係る内部統制の監査の基準は、当監査法人に内部統制報告書に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき内部統制監査を実施することを求めている。

内部統制監査においては、内部統制報告書における財務報告に係る内部統制の評価結果について監査証拠を入手するための手続が実施される。内部統制監査の監査手続は、当監査法人の判断により、財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性に基づいて選択及び適用される。また、内部統制監査には、財務報告に係る内部統制の評価範囲、評価手続及び評価結果について経営者が行った記載を含め、全体としての内部統制報告書の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、日立化成株式会社が2019年3月31日現在の財務報告に係る内部統制は有効であると表示した上記の内部統制報告書が、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して、財務報告に係る内部統制の評価結果について、すべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

-
- (注) 1. 上記は監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社が別途保管しております。
2. XBRLデータは監査の対象には含まれていません。

独立監査人の監査報告書

2019年6月21日

日立化成株式会社
執行役社長 丸山 寿 殿

E Y 新日本有限責任監査法人

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 葛 貫 誠 司

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 榎 山 豪

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている日立化成株式会社の2018年4月1日から2019年3月31日までの第70期事業年度の財務諸表、すなわち、貸借対照表、損益計算書、株主資本等変動計算書、重要な会計方針、その他の注記及び附属明細表について監査を行った。

財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した監査に基づいて、独立の立場から財務諸表に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に財務諸表に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき監査を実施することを求めている。

監査においては、財務諸表の金額及び開示について監査証拠を入手するための手続が実施される。監査手続は、当監査法人の判断により、不正又は誤謬による財務諸表の重要な虚偽表示のリスクの評価に基づいて選択及び適用される。財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、当監査法人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、財務諸表の作成と適正な表示に関連する内部統制を検討する。また、監査には、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての財務諸表の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、上記の財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、日立化成株式会社の2019年3月31日現在の財政状態及び同日をもって終了する事業年度の経営成績をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

(注) 1. 上記は監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社が別途保管しております。
2. XBRLデータは監査の対象には含まれていません。